○（さげ）我前の千町の田をば植ゑるには〳〵の、（五月女）早少女そろへてはやしかた。
○（さげ）やれ見事、おひ瀧樣の宮立は宮作りの。（五月女）何處なるばんじよ（番匠）が建てたやら。
○（さげ）白紙の中折疊み手に持ちて〳〵の、（五月女）千疊の松の筆戀し。
○（さげ）あんな山は主ある山か。主なきは〳〵の、（五月女）山守りつけて我山に。
○（さげ）奥山の木の葉の中の薄櫻〳〵の、（五月女）蕾見えた二つ三つ四つ。
○（さげ）近づきに逢うたる其夜の短かさは〳〵の、（五月女）話殘いた二つ三つ四つ。
○（さげ）一の谷の敦盛樣は十六歳のお年の年で、黑谷上で軍に負けたが、口惜しや、（五月女）熊谷の小次郎に討ち取られ。
○（さげ）熊谷が出家となりて黑谷へ〳〵の、（五月女）熊谷小次郎は何處に居る。
○（さげ）秋の田の刈り穗のいほのとまをあらみ〳〵の、（五月女）我衣手は露にぬれつゝ。

○（さげ）我殿が鞍馬の山へ年籠り〳〵の、（五月女）御福貰うて今戻る。
○（さげ）御福は貰うたが、藏は何處へ建てうか。（五月女）藏を建てう〳〵。
○（さげ）紅が今花盛り、八重ぶけて、おそぶけての、（五月女）つむやつまずの花盛り。
○（さげ）暮れ合に西山見れば晴やかな。有りがたいの、（五月女）日輪樣のお山入り。
○（さげ）今日の田の友達に文をやる〳〵の、（五月女）暇の文かや、なつかしや。（飯石郡）
○（下げ）三ばいは、ヤーレ、どちからござる宮の方から、（早少女）宮の方から、ヤーレ、あしけの駒にたづなよりかけ、（おろし）たづなよりかけ、先づ三ばいは。
○（下げ）さんばいの、ヤーレ、母御のもとを尋ぬれば、（早少女）尋ぬれば、ヤーレ、伊勢ではてい照皇（せいくわう）太神宮。
○（下げ）さんばいの、ヤーレ、たなびく月はいく月か、（早少女）いく月か。ヤーレ、十月となれば生れくる。
○（下げ）生れきて、ヤーレ、うぶゆの水は何處水か、（早少女）どこ水か。ヤーレ、大和の國の岩清水。
○（下げ）大山の、ヤーレ、岩根をつたふたきしみづ、（早少女）たき清水、ヤーレ、流れておちて川となる。（おろし）なんとしやら〳〵、空うちはれて。
○（下げ）十七が、ヤーレ、かけたるたすきのむすびだれ、（早少女）むすびだれ、ヤーレ、春三月の藤の花。
○（下げ）十七が、ヤーレ、こがねのご椽に腰うかけて、（早少女）腰うかけて、ヤーレ、かみとくひまを待ちたまへ。（おろし）早くかみうとけとの、田に大鼓が。
○（下け）酒はくる、ヤーレ、肴はなくしてちちやの薬を、（早少女）ちちやのはを、ヤーレ、すわへにやあへて御肴。（おろし）酒の肴にやこのしろやいて。
○（下げ）幾千代も、ヤーレ、榮ゆる御代の日出たさやよ、（早少女）めでたさよ。ヤーレ、國おだやかに田植をする。（おろし）田植するのも御上（おみ）の御恩。
○（下げ）のうばし藥を手にもちて、沖の三斗田での、（早少女）どの苗をとらうかと、沖の三斗田での、（おろし）何ともち上げ、三斗の苗を。
○（下げ）苗代のすみをめぐる水は鏡かやの、（早少女）思ふ樣のかけ見せる水は鏡かやの。（おろし）なんとかけよ見た、思ひのとのご。
○（下げ）京の三十三間堂の佛の數はなんほーか。（早少女）三萬三千三百三十三體ござるが本だけな。（おろし）佛作りて眼を入れて。
○（下げ）昨日京から下りたる白いすけの笠をば、（早少女）早少女にやきせるとて、白い菅の笠をば。（おろし）笠は京笠しめをは三島の。
○（下げ）あきどーにやごいするか、コラ、せんだびつにごいするか。（早少女）せんだびつの中にやある花、むらさきがごいせんよ。（おろし）何とござろにや紺花色が。
○（大）三（さん）ばいの、ヤーレ、どちからござる宮の方から、（小）宮の方から、ヤーレ、あしけのこまにたづなよりかけて、（おろし）（大）たづなよりかけ、いまさんばいのござる、（小）エーヘーエー、よりかけいまさんばいの。（朝出掛）

○(大)ひるま舟のほの上に、白い鳥の羽ヤレ、(小)口はにしき、二ちよーれんけ羽の白い鳥ヤレ、(おろし)(大)口の白いは都の鳥よ。(小)エーヘーエー、白いは都のとりよ。　(書出掛)

○(大)日暮方の早少女よ。春の鶯はの、(小)色々の音をだす、春の鶯はの。(おろし)(大)なんと音をだす、うぐひすどりは、(小)エーヘーエー、ねをだす、鶯どりは。

○三ばいの父御はだれとたづねたら、「天たう樣とおぼえたり。

○三ばいの母御はだれとたづねたら、「京白川の大蛇なり。

○三ばいのうぶゆの盥なにだらひ。白かねこがねのはぎあはせ。

○三ばいのござるやら、露をこぎわけて、「つゆをこぎわけ、いま三ばいの。

○三ばいのたなはる月は幾月か。「よろづの神のあそび月。

○三ばいのうまれし月はここの月、「十月となればうまれくる。

○三ばいのとりあげうばは誰人か。「大和の國の千代が母。

○三ばいの乳づけの人は誰人か。「宇佐八幡の母御なり。

○三ばいのうぶゆの水はどこ水か。「大和の國の岩清水。

○三ばいのうぶゆの杓は何杓か。「白金黄金のたま柄杓。

○三ばいのうぶぎの裁はなにだちか。「白もこ小袖を八重だちに。

○三ばいのその縫ひはじめどこからか。「末長かれと脊縫から。

○三ばいのそのひもつきはどこからか、「末長かれと小脇から。

○三ばいの御國めぐりの裝束は、烏羽色のあらみごと。

○大山こーをめぐる水をくみあげて、「くみあげて、きよめて、三ばいに參らせう。

○大山坂本は嘸さむからう。「給の小袖もきせてたもれかせの。

○大山おやまの小ならの葉をば、きりおろせ。かけにせう、小ならの葉をば。

○京から下る小女郎のきぬのたもとに何あらう。「墨硯筆あらう、からくれなゐのふみあらう。

○馬のりが三人通るどれがこれのむこ。ヤレ、「染手綱ぶち馬、中をのりたがそであらう。

○若い衆の立ちよりにやどれがこれのむこ。ヤレ、「じんじらじまに地むらさき、小太刀さいたが「そであらう。

○鶯といふ鳥はおもしろい鳥。ヤレ、「かご山にかくれて、御經よむ鳥。ヤレ。

○梅のにほひたづねて梢まはるうぐひす、「それはさうと鶯は花をちらすな、鶯。

○京の三十三間堂にや、佛の數はなんほーか。「三萬三千三百三十三體ござると云うたけな。

○數のほとけを皆さまゞ〳〵に、「よろへてよりこそきざむ。

○京にのぼる道にこそふしぐろの稻あれ。稻は三ばいの米八石。

○三ばいのござるやら、つゆをこぎわけてノー、「かちんはゞきと、たうがさ、露をこぎわけて。

○三ばいのひるの宿、どれがおやどやらノ、「白銀柱に玉のみすだれよノー。

○朝おきてほそ戸にあけて見わたせば、「こがねにまさる朝日さす。

○朝日さす日向の里に野芹つむ、「だいじなひめに笠を。

○ほととぎすが小菅の笠をかたぶけて、かたぶけて、「きけども鳴かぬナー。

○今日のおしろのよいは誰手柄。「さきうじ樣の御手柄。

○さき牛の角まきに迦陵嚬伽がとまつた。「迦陵嚬伽といふ鳥は面白い鳥。ヤレ。

○おん酒はくるゝ者はなくして新ちさの、「新ちさの葉をば、酢あへにあへて御肴。

○この川わたる時、ちやせんつんぎりおとした。拾ひはせんかやつんがめは。「あれなうこれなう、もつたいない。足もがれ、手もがれ、甲をはなされ、目ぬかれ、この川に住居はせんとも、拾ひはせんぞえ、つんがめは。

○梅の木の下でまりをとんとけたれば、「梅は、ばらりこほれる、毬はそらにとまつた。

○苗代のすみをめぐれる水はからの鏡の、「思ふ殿にかけ見せうや、水はからの鏡の、「からの鏡に初音の殿御。(又からの鏡を品よく見せる。)

○さんばいの、ヤーレ、父親さまとたづぬれば、「たづぬれば、ヤーレ、そら天竺の天たうさん。「父をたづねてそら天竺に。

○京鎌倉の、ヤーレ、内裏の柱は皆佛「皆佛、ヤーレ、前には十門の戸をたてゝ、十門とまる戸音エー。「そらには黄金の蝶が舞ふ。「そらにあそぶは黄金の蝶か。

○今日のひるねにおもしろい夢みた。「なんと見たか、とのばら。「近江八景の湖、一に勢多の唐橋「二には西の石山、三には近江の鐘を見た。「何と見あげた、近江のかねを。

○琵琶女に小びはめに、琵琶、ヒョーイヒョーイ、「小琵琶ヒョーイヒョーイ、びはーどこに置いてきた。「ゆんべのところの手白拍子に置いて來た。「琵琶を忘れた、お手白拍子に。

○今日植ゑる田主は、田のさご(田植に適當したる時)植ゑてノ、「やつまどの藏をたて、德を招いたよな。「倉をたてては一村長者と。

○昨日から今日いふく風は何風かの。「西北南風、よさに來いとの風ふく。「さてもよう吹く、よさには來いとの。

○苗もちの子供の晝のねごとにーの、「えゝにようほほしやと晝のねごとにの。「何とよいにようほ丹後の國に。

○今日の、ヤーレ、前牛おしろのよさはだれてがら、「だれてがら、ヤーレ、ささうじさまのおん手がら、さてもようかく、今日さきうじは。

○今日ちらうたる散早友達さともだちは、名殘なごれをしや友だち。「あらひ川のよしの根で、文を參らせうやノ、「なごれをしやというては袖を。「なごれをしくば屋づまに立ちよれ。

○(さげ)こーの國は、ヤーハレ、むーかしはどーろのうーみなーれど、ノーサ、うーみなれどのー、(早少女)ハーレヤー、どーろのうみ、ヤーハーレヤ、いーざなぎじようーのほーこのつゆ、(さげ)いざなぎは、ヤーハーレ、てんからーおーりておき島へ、ノーサ、おきしまへノー、(早少女)ハーレヤー、おーきしまへ、ヤーハレヤ、おーりては島のたねとなる。

○田のはじめ日向のさとのみくほたね、まかずのたねがはえた。

○八雲立つ出雲の國をうちはじめ、此あしはらが田となりて。

○三ばいは三月まではとしとこで、三月からは田の神。

○三ばいは、こがねのかいを手に持ちて、あやなるたすきなけかけて、(おろし)(下げ)あやなるーたすき、(早少女)なーけかけーて。

○三ばいはこがねのひつにこしかけて、こがねのかいを手にもちて。

○三ばいのひるまのよねはどこ米か、加賀越前の御上米。

○三ばいのひるまのごりよふはなにつらば、めしつらば、こがねの、おん箸や白銀か。

○白かねのこぎとりならべみぎもらば、みぎもるともにたべた。

○三ばいのおみきの酒はどこさけか。大和の國のきざけ。

○三ばいのおんさかづきはどこ木地か。紀の國木地で、やらみごと。

○三ばいのおんさかづきのそのだいは、白木のだいで、やらみごと。

○さかづきに長柄の銚子持ちそへて、まつ三ばいにまるらせる。

○(おり歌)(さげ)さーけはでるがー、さかなんにやーなにをか。ちしやのはーを、(早少女)ちしやのはーをーすあへんにーあへてはおんさか。

○このだいはみるほどみごと、やらみごと、いづみがわいてやらみごと。

○きにようから、けふまでかけた黒鯛を、きらばや尺のまないた。

○黒鯛の切りぞめはたれみすか。山田が太郎これがみす。

○黒鯛の切りもりしてはたれまゐる。まづ三ばいにまゐらせよ。

○天竺の高天原でひるねして、思ふとのごを夢いめにみて。

○天竺の天じの前のべにうめは、八重ではなうてここのうめ。

○やはたやま扇のまかけでおきみれば、平家無のおふねでおだましや。

○やはた山ひとつの弓のいきほひは、やほよろづのてきは。

○すま寺の、青ばの笛はおはこいり、あつもりさんのみたから。
○今日の三ばいさんをおくるには、大原郡の森へ。
○今日のおなりさんをおくるには、どこまでおくる。峠のさきの米子。
○今日の田のともだちにふみをやる。いとまのふみかや、なづかしや。
○(おろし)(さげ)あーらひをんばーどーこんで、(早少女)しーけうーなーがれかーしの、(早少女)いちにちとーかけたなーさけをあらひのかーはで、おといたー。(邑智郡)

◎正午の歌

○(れり)今日の、ヤーレ、田の神樣をおろすには、ノーサ、おろすには、ヤーレ、立しほばまいてきよめたり。
○(れり)さんばいは、ヤーレ、今こそ神名をもらはれる、ノーサ、もらはれる、ヤーレ、ひるこの宮へ移られる。
○(れり)お宮へ移る其よせい、ノーサ、其よせい、ヤーレ、三百餘人のもせいで。

○(れり)さんばいさまが今こそござるよ、宮の上よ、薹毛の駒には手綱ゆりかけて。(おろし)やれたづなゆりかけ、早いは駒の足音。
○(れり)さんばい樣の御酒まるらんす、やんよし酒。ながえの銚子でちごの盃。(おろし)ちごの杯長柄の銚子でみつごし。
○(れり)今日の、ヤーレ、田の友達に文をやる、ノーサ、文をやる。ヤーレ、いとまの文が。なづかしや。(かけ)一日の田友達や、なごれをしや友だち。洗ひ川また文を參らせうヤレ。(れり)ヤーレ、なごれをしむ早少女は、ノーサ、早少女はヤーレ、洗ひの川でまち給へ。(かけ)洗ひ川が又しげようながーせ、なをうてなりと物言ふや、しげうながーせな、(おろし)ヤーレ、川、川しげうて物が言はれぬ。

◎畫まながれ

○(れり)今日のおなりのひめはどなたやら。まだぞんめいでわがさとに。(かけ)おなりのひめさまは、わが里にこそな、まだぞんめいでわがさとにこそな。

○(れり)今日のおなりのひめをやとふには、兵庫の町の中の町。(かけ)おなりのひめさまをやとひ取るにはな、あまたのよせいで、かごでむかへたりな。
○(れり)今日の田ぬしの庭に臼するて、十二の臼にみな入れて。(かけ)ひるま米をつくやら十二がらうすでな、よめごたちもきて見やれ、十二がらうすでな。
○(れり)今日の田主の庭にかま据ゑて、しらげのこめをたきあげる。(かけ)ひるまはできたが、なにをおしるにな。若狹のはもや、若めをしるでな。
○(れり)今日の田主のたうどがおいければ、こんかご揃へ箸を待つ。(かけ)膳組はでけたが、箸をけづらでな、がらりがらりと、箸をけづらでな。

◎ひとながれ

○わが殿は夏なる竹を求めて、あふぎの骨と名づけたり。
○あふぎの骨をば七つけづりて、八つけづりてな、かなめりんとうたうや。
○わが殿はあふぎの紙を折りたゝむ、十二に折りてつまへたり、あふぎは折つたり、骨にやさいたりな、白い紙に

は繪を書いたりな。
○わが殿はあふぎの町に行かれたが、繪をかくを見て日を暮らす。あふぎの繪を見れや、裏の繪を御らうじ、三つになるあこの手習を御ごろじ。
○けふの扇の施主はどなたやら、照手のひめに鷹尾女郎。扇は一本なり、君は二人なり、さかうやく、中をりんと裂かうや。
○我殿は扇の風にさそはれて、諸國の風にひまをやる。扇のかざしよりは、しばのかざしこそナ、すゞしからうもの、しばのかざしこそナ。
○しらべし太鼓笙の笛、御殿のちごを舞ひおろす。あふぎをさし上げてまひ居ればナ、椽のそらで笛を吹く、前の樂に合はせて。
○大阪の定石が前に舟浮けて、槇とり直し、月をまつ。くれなゐのあふぎに月の輪をかいたナ、それをかいた殿原は、心にくい殿ヤレ。

◎夕しのび

○(れり)登きは、南閻浮洲の國見れば、日輪樣の舞ひござ

る。（かけ）日は遠い様なれど、西の山場にナ、蓮華の花やらさいがこだれたをんだ。

○（れり）清盛は、音頭の瀬戸で日を暮らす、日輪様を招きとる。（かけ）清盛といふ人は、世に名のこいた、兵庫のつきじまと、音頭の瀬戸をひらいた。

○（れり）日はくれる、おさないちごが笛を吹く、しのびの太鼓、笙の笛。（かけ）洗ひ川の中の瀬でちごが笛を落いた。やなうてや、やなうてや、やなに笛がとまつた。

○（れり）一日の田の友達にわかれるが、文やる程なひまもない。（かけ）きのふ、けふから、つれようたが、いとをしぞや。わかれがいとをしいとナ、思へども、今日から文やたもらの。

○（れり）一日の田の友達にや文をやる。いとまの文か。なづかしや。（かけ）一日の田ともだちや、なごれをしやともだち。（かけ）洗ひ川でまた文を参らせう。ヤーレ。

○（れり）一日の名殘ををしむ友達が、洗ひの川でまちござる。（かけ）洗ひ川でまたしけうながれかせな。會うてなりとも物言ふや、しけうながれかせな。（以上夕しのび）

○田の神はさんばいさんと祝はれて、三把の苗をきりかざる。

○田の神のさんなる月はここの月、とつきになせばさんの紐。

○うぶゆの水はどこ水か。やまとの國の岩瀬水。

○うぶゆの鹽はなに鹽。黄金の鹽かなびしやく。

○うぶゆの絹はなに絹か。あさぎのきぬをやへだちに。

○田を植ゑて見せませう、しろのよいところへ。

○今日の風はよい風、さゝふきさまいた。

○昨日から今日まで吹く風は何風か。

○早少女さんの上手は、さがるほど上手だ。

○栗の花こそナー、空にさいたナー。

○小皿に桃は、ころり〳〵こぼれる。

○扇ををりてたゝんで、腰にさいてよいさうな。

○赤いかたぴらでナー、ぴんなれ、しやんなれ。

○十二がらかさでナー、よめごたちはナー、だれや。

○ひるの野菜には何を買うたりやナー、わかめ買うたりやナー。

○かうらい花のやうなれど、よめは、にくいもの、ヤレ、むこは、かはいもの。ヤレ。

○お日見や。小供や。お日は山にかゝつた。

○日が暮れさうな、おいそぎなされや。

○濱田の橋のヨ下見れば、鯉かや、鮒かや、鮠の子か。幼き鮠の子は淀みには住まいで、瀬にかうや、瀬にすもや、早い川の瀬に住もや。

○はしわらを手に持ちて、おきの三斗田に、ヤレどの苗をとらうかと、おきの三斗田に。ヤレ。

○ひるま米をつくやら、なにがらうすでナ、アラよめごだちも出て見やれ、なにがらうすで。ヤレ。

○酒はくる、肴にやなにをや。ちしやの葉よ。すあへにあいたら、おん肴を。

○朝起きてこうたけ山を見下せば、黄金にまさる朝日さす。

○我が殿は夕草刈りに行かれたが、彼のそねゞが思はれる。

○ざとう京へ登りて、何を萬事習うた。一には太鼓、二にや笛、三にやさゝら手拍子、馬の拍子を取るやうに、これを萬事習うた。

○田の神の、ヤーレ、産なる月は九月、ヤレ、一月たせば、産の月。

○田の神の、ヤーレ、産湯の水はどこの水。ヤレ、大和の國のえはせ水。

○田の神の、ヤーレ、七夜の祝はどう祝ふ。五帖カごぜの紙をきりかざる。（はやし）さこ田も、でんだいも、一はかにやりませう。

○田の神の、ヤーレ、産湯の鹽なに鹽。こがねの鹽にかな植びしやく。こゝはなぜゆるまなか。（のろきか）よえゑんでゆるまなー。

○北野地の天神樣の社こそ、二重の屋根は銀づくし。（七重の御殿はひはだぶき。）

○天神御殿の屋根裏を御覽じ、二重の屋根裏銀で包んだりな。

○北野地の天神樣は梅ずきで、御殿のほりもの梅づくし。

○天神御殿のほりものをごらうじ、美しき梅のほくそれを掘りたまふ。

○天神の御殿のまくをごらうじ、「金紗の絲で梅の紋。
○天神の御殿の幕は美しや、「金紗の縫に梅のほく。
○天神の御殿のみすは美しや、「眞紅のみすでうつくしや。
○天神御殿の前のみすを御覽じ、「美しき眞紅に前のみすを御らうじ。
○天神の戸帳を上げてをがんだら、「さも有り難や、御姿を拜んだ。
○天神の御殿の庭の梅のほく、「衣通姫が植ゑ給ふ。
○天神の梅のほくは、はえたぢやないか。「はえたぢや御座らぬ。我等が寄進だ。
○天神の御庭の梅の花盛り、「さも美しや花さかり。
○やよ梅の花こそ美しきもの、ヤレ。「今こそ花盛り、美しきもの。ヤレ。
○天神の御前にさいたる八重梅を、「鶯が花ふみちらしてねを出す。
○梅の香を尋ね來て、「末を守れ、鶯やれ。「とまれ鶯、花ちらかすな鶯。

うの花ながれ

○あを山にいまこそひらく花ざかり、「枝葉をたれてしろ〳〵と。
○うの花、早少女がをり苗とらばな、「さくら色のとの原、をりてはやせかせな。
○うの花が、なかせの雨にながされて、「さきこたれたは、しろ〳〵と。
○けふ田主せどにさいたは、「家花、うの花、さきとくの花。ヤレ。

栗ながれ

○奥山にさき揃うたる花の何花か。「うの花まぜり栗の花。
○栗の花やろ、白さいたはな。「なろならじは花にとひたまへ。
○栗の木は栗ざかりなり、「枝葉をたれてみだれると。
○栗原を通ればてれておちる栗、ヤレ、「やぶれたるそいてたまらざる栗。ヤレ。

○我とのはとよなりこうゆみながれ、「すゑには弓のつるながれ。
○弓持ちて生れるとよなりの神、ヤレ、「とよなりの神にこそ弓の木はさいたり。
○我とのはけふ陣立があればこそ、「矢本をあまたしそろへて。
○矢はぎはしやすかなはぎあはせてな、「あかいはね、白いはね、はぎまぜてな。

鶯ながれ

○うぐひすはまだ巣のうちにをるやらう、「これ廣いの野原に。
○鶯といふとりは、かこの山にこうぞな、「しのぶねを出し、かこの山にこうぞな。
○鶯は梅にはすきな鳥でこそ、「くわたんさいた梅の木に。
○梅に鶯は面白いもの、ヤレ、ゑがけどもな、梅にうぐひす。

紺やながれ

○紺やにはゆうたるもかれ八重ひがき、「そめほすものはあやにしき。
○早少女のさごろもは染めほいたよな、「けんげや花色に染めほいたよな。
○紺やには今出すあるは末よかれ、「いまこそあるは花ざかり。
○あの花さいたが、なにや染とてな、「かりふ袴染めとて、たつたり、ぬうたりな。「なんとこ袴たゝんで殿に參らせる。
○紺やには五色のきねを染めいだす。「これこそ殿の夏ばかま。
○はかまは染めすがな、紋を付けてはな。「小紋染、はれせぬ紋をつけてはな。
○紺やにはまりけるはかま仕立てたに、「十二にへだをとり給へ。
○立つはぬうたりまりのこばかまな、「へだをそろへてまりのこはかまな。

よりとも流

○あの城はどなたの城かめづらしや。「よりとも様のおしろか。

○よりとものお城なれやうつくしきもの、ヤレ。「七重のくるわで、うつくしきもの。ヤレ。

○けさおきて、おしろのうちを見渡せば、「よりとも様のたちすがた。

○けさとうに城へ出て城うち見ればな、「うつくしきよりとものおん立姿。

○よりともをけさこそ見たれめづらしや、「にしきのきぬをきかざりて。

○よりとものいしやうこそうつくしき物、ヤレ、「にしきのきぬに、またふしの紋付けてな。

○よりとものめしたるおびは何きぬか。「しまじゆどんすふしのもん。

○よりともの帶なれや、うつくしき物、ヤレ、「にしきのきぬに、またふしの紋付けてな。

雜

○藏たて、今こそ俵の積みもどし、「さもにぎやかにつみたまへ。

○ゑびす大黑一の藏にこうぞな、「俵をつむとて、一の藏にこうぞな。

○けふの田主の庭のいと柳、「七重にこたれて絲柳。

○門のわきの小柳は、やうじ木によいとな、「けづりほそめて、やうじ木によいとな。

○わか殿ははりまの沖に出てな、「けふ四つときのしほをまつ。

○沖のはまでしほをくまば、たごに手をかけてな、「立つ波おしわけて、たごに手をかけてな。

○けさおきて、ならはしかけて見渡せば、「きよみづ寺の初夜の鐘。

○むかひなる大寺を、けさおきて見れば、「うつくしきちごたちが、花折りかざいた。

（邇摩郡）

○沖のろかいろの上にとまるとりはなん鳥。くちやーにしきにとれんけの羽の白い鳥。ヤレ。

○さんばい〳〵と祭る神なれば、赤い柱たてゝたもれなう、おさんばい。

○日は暮れる、ゆくやごぜんこまー、どこへつないだ。尾を越し、谷を越し、さんがりまつに繫いだ。

○宮島様のご普請にや、どなたが棟梁なされた。飛驒の工匠にたけだの番匠、兩人棟梁なされた。

○伊勢の天照太神宮の破風の茅が足らないで、それをてんでに刈らいで、何をてんでに刈らうか。

○天竺では蓮華花、唐では牡丹、日本で櫻花、これが花の王。ヤレ。

○相川の中の瀨に、稚子が笛を落いた。やなうて〳〵、やなに笛がとまるぞ。

○山田を植ゑれば、けうといものを見る。ヤレ。猿がさゝらすれやーこそ、たぬきやつゞみを打つ。ヤレ。

○濱田の橋を下見れば、鯉かい、鮒かい、鮎の子か。

○酒まいだんするたんのかめは、ながえのながしに玉の盃は。

○朝屋のこんがらすが露にしよほぬれて、うら〳〵と鳴いて通る、しよほぬれて。

○茶をもちのごだるどや。かちんかたびらで、ともへに灰の松、すさーさゝ色で。

○日はひよ〳〵る高くなる。四石蒔の苗はなんとして申し上げうか、四石蒔の苗はな。

○酒は來る。肴にやなにかや。ちしやの薬をすあへきや、あへたるちしやの薬を。

○若者は三人をるが、どれがおと嫁ちよー〳〵。いん黑皮に、まんひやーがさに、あんがきはいたがをとよめ。

○若者は三人をるが、どれがこれのおともこ。觀音經を手にゝすゑて讀むのがこれのおともこ。

○おがんさんはあづま下りで、笈はなんでつゝんだ。錦のゆたんかけう、かなこ縞でつゝんだ。

○今日の田の田友達や、なぐれをしやけーに、晩の洗ひにや文を參らせうよ。

○日暮烏やら笠の緣を廻るのー。植ゑよたー廻るまいけに、上れと廻りか。ヤレ。

○しだれ小柳は楊枝木にはよいとな、けづり細めて楊枝木にはよいとな。ヤーレ、小柳やなぎは、しんだれやすいよ、ヤーレ〳〵、柳はしんなれやすいよ。

○あさはかで、聲をならさにや。ならさん聲はねごや。

○面白、大山寺の鐘のなる音。

○朝霧つゝみまはして見れば、關も小倉ももろせんたびはこのだび。

○長柄の銚子、玉の盃酒まゐらする。玉の盃で日は暮れる。

○ゆくやごに駒はどこへつないだ。尾を越し、谷をこし、さんがり松につないだ。

○上のまちから下のまちまで、ゆりひろがれや苗の葉。

○苗の元さよしろとにぎれば、小なくに別る面白い。

○此苗はほごのなへやら、うゐるがさまのほみだれ。

○今日の農神樣どちらの方からおいでたのー。東の方からりゆごの駄馬でおいでたのー。

○今こそござる東から、あしげの駒に手づなゆりかけ〳〵。

○笠のはたそろうたが、どこ笠そろうた。すこしつほに、京笠に、大和笠がそろうた。

○日は晝になりたぞや。箸をけづれ、殿ごさん。ざらりと箸をけづれ、殿御。

○西のがくやの雲見れば、むらさよ雲ごそさよでたれ。あれや何雲かと人問はゞ、あれこそ昔の五郎王子の忘れづまとはあのことよ。

○今朝ごとゝねすごして、殿田に太鼓がなるけな。ヤレおかた起きて髪をいへ。殿田に太鼓がなるけな。

○朝日長者の弟婿（おとむこ）がさゝけまいたる手あいは、三十三さやなれとまいたる手あいは。

○我殿は昨日陣立て、今日中山で討たれたいなー。討たれ死やら、討死やら。

○昨日見て今日見れば、門の松が高いなー。高いこそ道理よ。德の量がまさりた。

○酒飲ませう、田の中に長柄の銚子に、千代の盃で。

○植ゑよろし、この田に籾が千石はまいたねぞ、又萬石も出來よー。

○此まちは大かいまちぞや、今日此まちで日がくれう。日が暮れたら戸を立てまはして、ちごがけのなごーよばー

○殿は京からもどれたが、おほかたなにがみやけか。京櫛、京針、京かんざし、たと紙が土產ぢや。

○ほとり苗こそよくにとれ。ほとり苗こそ千石の米がなる、ほとり苗にこそ。

○向うなる青山の鹿を打ちとれよ、弓をかまへ、矢をつがへ、鹿を打ち取れよ。

○清盛と云ふ人は、よい名をのこした。兵庫には築島（つきしま）を、音戸（おんど）の瀨戸（せと）をきりぬいた。

○京から下る京ばんじやうにやー、はだにおいたるめいをいが、はだをやぶるやまつゞらほーしは、ほたるほーし。ヤレ。

○沖を通るかざり船は、どこの殿の船やら。金の幕をうたれたる、越後樣の船やら。

○京へのほれ、京へのほれ。京でなにを習うた。一にや太鼓、二にや笛、三にやさゝら手拍子（てびやうし）。

○日暮れがたのさうとめと、春のうぐひすよーな、新芽に芽を出す春のうぐひすよな。

といに隱いて、かゝにしらせてちごがけのなごーよばー。

○京のまちの京姫は袴立ちがひよーすひやな。八尋たちて八尋ぬうて、八尋ひだをりやつた。

○梅の木の下でまりをほんとけあけたー。梅はばーらりこるけたが、まーりはそーらにかゝつた。

○面白い聲がするあれはなにの聲。ヤレゑびすだいこくの俵つみの聲やら。

○道路を通る女どまー、なして色がしろいか。笠をさゝすにほかでなあはず、それで色が黑いぞ。

○おん手そろたら、うた出せー。どうとりうたやへ。

○今朝のとのああさがりー（朝獵）に、ゃ、つーるまーき（弦卷）おといた。つるまーきばつかりかや、ゆーみに矢付（やたけ）おといたー。

○東むきの東戸をさらりとあけて見たれば、こーがねまさりのあさひこそさいづる。

○日中前の笠をきるなら、ろくにきよ。早少女（さをとめ）のうばのかけになるぞ、ろくにきよー、早少女（さをとめ）。

○蓮けの花やらさしこざれたらんだ。さいはこだれ面白や。

○奥山のかや刈は、昨日刈るか、今日刈るか。昨日刈りはしなびたが、あれは今日刈りかなー。

○梅の木の下でまりをほんとけあけたー。梅はばーらりこるけたが、まーりはそーらにかゝつた。

○面白い聲がするあれはなにの聲。ヤレゑびすだいこくの俵つみの聲やら。

○道路を通る女どまー、なして色がしろいか。笠をさゝすにほかでなあはず、それで色が黑いぞ。

○おん手そろたら、うた出せー。どうとりうたやへ。

○今朝のとのああさがりー（朝獵）に、ゃ、つーるまーき（弦卷）おといた。つるまーきばつかりかや、ゆーみ（弓）に矢付（やたけ）おといたー。

○東むきの東戸をさらりとあけて見たれば、こーがねまさりのあさひこそさいづる。

○日中前の笠をきるなら、ろくにきよ。早少女（さをとめ）のうばのかけになるぞ、ろくにきよー、早少女（さをとめ）。

○蓮けの花やらさしこざれたらんだ。さいはこだれ面白や。

西の山ばにさしやこだれた、西山寺の蓮華ば。

○鶯と云うたる鳥はきようかの山の鳥やら。きよかの山にかくれて、はなごうよんだ鳥やろ。

○しろかきがしろに追はれて、きりくはがきではやめた。

○歌をうたへば田主やきらやる。農神樣はよろこびの、中のよろこび皆神々のよろこび。

○樣は三度笠ふりあけてきやる。すこしお顏が見とござる。お顏がくしの三度笠。

○朝間もちのござるやら、赤いかたびらでびんらりしやらりと、赤いかたびらで。

○親方樣の早稻植ゑにや、なによーしーやーとーのご。内にや米をなでるやらおーきにや。（美濃郡）

○苗をば、何ととる、元へ手を入れて、うらをばなびかせて、元へ手を入れて。

○ひるめしが來るやら、赤いかたびらは、ひらりしやらりと、赤いかたびらが。

○道のはたの筍と、人の小娘は、惜んでも惜まれの、人の小娘は。

○とんとんとうぎりすが何を持つて來たかとな、「とますにとをかけて、たはらもつてきたとな。（知夫郡）

草取歌

○朝起きて細戸口あけて見渡せばよ〳〵、黄金にまさる朝日さす。

○田の神は三ばいさんと祝はれてやく〳〵、ヤレ、三ばいのいねを切りかざるよ。（安濃郡）

麥打歌

○やれな紺屋法師ほーじが娘を、どれがよいか嫁にせう。

○なぎの葉かさにさいたよー、さいた、かさにさいた。（簸川郡）

盆踊歌

こだいず踊

歌の始の囃、サーナーヨーサーナーコラナーヨーコラナイ。

○こだいずが山に寺たてゝ、人も參らず戸も明かず。

○こだいずが山に寺たてゝ、聞けばとらけ和尙樣。

○こだいずが腰にかご提けて、前の小川へ土鰌とりに。

○こだいずが青竹割りやる、與一乘せるとて籠組みやる。（大原郡）

小をどり

○さねもりさまのごりしよはどこか。都となりてごりしよかい。さねもりさまのおくだりならば、いなむしなどもついて行く。いなむしなどをおくりとならば、稻の柱もかずしれず。稻の柱に數ないなれば、米子の町にくらをたちよ。

○上から舟が三そう下る。さきなる舟は絲屋が娘、絲足袋ゆはいて、絲よる手元がおもしろはないか、旅の殿。中なる舟は絹屋がむすめ、絹たびゆはいて、きぬおる手元が面白はないか、旅の殿。あとなる舟は綾屋がむすめ、綾たびゆはいて、綾織る手元がおもしろはないか、旅の殿。

○宮島樣にまゐりて見れば、あらうつくしの宮島よ。あの宮島へまゐりて見れば、三國一の宮島よ。宮島神の白濱ごろじ。こんよとなくは鹿の聲。おかけんさまの氏子をごろじ、つばくろ色にかねつけて。おかけんさまのおともぶねをごろじ、新造が三艘よりそうて、百八さがる燈籠の火。ヤレ。あややら錦を大手にまいて、中には樂をなされ候。

○なはての小草、見る人ごとが刈りたがる。

○十七八が淺川わたる。わたさばわたせ、今負ひわたせ、あの山かけのある内に。

○これのおせどの蓮の池、清水がわいて、泉わく。今こそお前のよざかりよ。サー。

○これのおせどの梅の木に、うそがとまりて琴をひく。琴のひびきに花が散る。今こそお前の世ざかりよ。サー。

○これの小庭のごよの松、鶴が巢をかけ、ごしよゐるが、あそぶ所がおもしろや。今こそお前のよざかりよ。サー。

○秋鹿が谷の細道ゆきつめて、あそぶ所がおもしろや。扇に尺八とりそへて、さすはたださかひこのわかい衆。

○庭雀竹の小枝をゆきつめて、あそぶ所がおもしろや。扇

に尺八とりそへて、さすはたださかひこのわかい衆。
○雞がお前のここにはをゆきつめて、遊ぶ所が面白や。扇に尺八とりそへて、さすはたださかひこのわかい衆。
○大坂木綿に鹿はつかぬ。エー。おもひなかづく、ちきりにおさぐさ。しんごうしのはやさ、てうしのよさよさ、しんとろとろとくだまいて、さてのうきよや。
○大坂ひどんすにちりはつかぬ。エー、おもひなかづく、ちきりにおさぐさ、しんごうしのはやさ、てうしのよさよさ。しんとろとろとくだまいて、さてのうきよや。
○大坂あや織りに鹿はつかぬ。エー。おもひなかづく、ちきりにおさぐさ、しんごうしのはやさ、てうしのよさよさ、しんとろとろとくだまいて、さてのうきよや。
○大坂いま織にちりはつかぬ。エー。おもひなかづく、ちきりにおさぐさ、しんごうしのはやさ、てうしのよさよさ、しんとろとろとくだまいて、さてのうきよや。
○伊勢山伏と、京山伏の、かけたるけさはノ、淺ぎもよぎすみぞめ、イヨ紫染にこそこひの絲やそめほそ。
○伊勢山ぶしと、京やまぶしの、さいたる太刀はノ、一尺二尺三尺、三尺さけをに戀の絲やそめほそ。
○伊勢山伏と、京山伏の、さけたる貝はノ、一つ二つ三つ四つ、七つとふけばこそ、音こそまさるそめほそ。

（邑智郡）

大をどり

○お前の庭へをどりがまるる。黄金の門をおしひらき、一の門ひらき、二の門ひらき、三ごころえておしひらき、三ごころえてひらいて見れば、あらうつくしのまりの庭、まりなる庭へ泉がわいて、つるべでくめどつきもせん。つるべの水で茶をたてさせて、のまばや伊勢のそめつけの。
○うてノ、やれつづみ、手のやれつづみ、はりあげた者にどうとらせう。まひとしめて、てのやれつづみ、はりあげた者どうとらせう。この年よりがをどりをはじめ。
○當所が花の都なり。當所が花の都となれば、加賀越前の舟がつく。加賀越前の舟ばかりかや、京鎌倉の舟がつく。京鎌倉の舟をばつれて、お前の庭に漕ぎさたり、お前の庭にこぎ來る舟は、あれこそこれの寶船。（以上大踊）

備考　この歌は各自鼓をつりて拍子に合せ、且つうたひ且つをどる時に用ふ。

（邑智郡）

○やまくづせー、ハラセー、お山くづいて田にしませう。ハラヤーハトナーヤーハトナー。
○わしの若い時や、あちらからも、こちからも、嫁にとらとらと、ヤートセー、あちもいやいや、ヨーホエヤナー、あとでかたわの男をもつた。あたまさえちち、かみやしよろのひげ、まえげ八の字、目はさるまなこ、鼻は獅子鼻、口や鰐口で、胸は鳩胸、出腹で出尻、あゆむすがたはあひるのすがた。あんなものでも、とのと定めれや、かはゆてならの。

（知夫郡）

しよがいな

○しよがいなのならい時やござい。酒の四五丁も持つてござい。ショガイナ。

（知夫郡）

○きそんどのかや、けにやだて男。何處へ置いてもまぎれない。

（知夫郡）

米搗歌

○米をつくには五人こそよけれ。調子揃へてとろ〳〵つけば、いかな大名も立ちとまる。

（仁多郡）

地搗歌

○ヨーホイ、これはてまのしゆう、てをのしゆうなんどはよう聞かさい。この石なんどまうしるは、大黒柱のしわる石、あくじさいなんつきつけて、諸國のたからをつきこんで、さいよさんよとおなりこめ、ようもつくてをのしゆう。コレハサノエー、ハンリヤショーヨイサ〳〵。
○どれもどなたもてをのしゆう、てをのしゆなんどはよう聞かさい。ごんごんつきでははいらんぞ。したには卵はしる置かぬ、上には天井はり置かぬ。つなもとなんぞへてをかけて、あたまのそらまでとりあけて、サイヨサン

ヨと、おなりこめ。ようもつくてをのしゆう。（能義郡）

石搗歌

○大黒柱のみつぎとり、諸國の寶をよせあつめ、大黒ゑびすが才取りで、七福神が音頭取る。これをねつき石につきこんで、あとははんじよも守ります。

○こちのやしきはめでたい屋敷、舟が三艘舞ひ込んで、さきへ來る舟の帆じるしは、小錢たくさんつんで來る。中來る舟の帆じるしは、一分や小判をつんで來る。あと來る舟の帆じるしは、兵糧たくさんつんで來る。大黒ゑびすが棹さして、七福神が上乘りで、こちの旦那は長者となる。こちほどめでたいおやしき。

○あれはようつくどこの衆、よう聞かさい。此石なんど、申するは、大黒柱の下の石。此石なんど、つきはじめ、此石なんどでつきをさめ。上からつるが舞ひおりて、下から龜がまひあがる。鶴は千年、龜は萬年、富貴繁昌とついてごしやれ。

○あれはようつくつなの衆よ。いんまの調子はよい調子、あの調子なんどをかはさずに、さいとりさしづなの衆さんは下をみて、あたまのそらまで取りあげて、とんど、ついてこしやれ。（仁多郡）

木遣歌

○今日は吉日順風丸の大さけだ。今こそこたへました、しやんとせしやんとせ。とも大黒おもてには、ゑびすつ樣が梶をとる。中にかず〳〵寶をつんで、こちらの倉にとつみをさめ。

⊙ドツトコセー〳〵、ヨイヤセーホーライー、これでは、いけない。當世はやりの、ヤートコナ、めでたいものは蕎麥の花、花咲けや實となる、みかどとなる。白ら齒が、よいか。そめ齒がよいか。につこと笑ひばそめばもよかろ。あれを見たか。十七八がお手出いて招く。

右は大きやりとも言ひ、舟おろしに用ふ。（知夫郡）

舟歌

○改まる年の始めの初夢に、きさらぎ山の楠の木を、船に造りて今卸す。白銀の柱を押し立てゝ、黃金のせみをふくませて、みなはてなはをとゝのへて、あーや錦の帆を卷いて、艫の間に松植ゑて、松の嵐を帆に受けて、寶が島へ乘込んで、思ふ寶を積み載せて、こなたの藏へと收め置く。御祝へ。

○エー日出度いノー、若枝も榮えるノー、エー葉もいつも常磐の若緣、榮え榮うて國々の島も一つに豐なる、民のかまども賑うて、エーとささの御代となりにける。御祝へ。

○八雲立つ山は鶴山龜山の、あひを流るゝ芳野川、エー素鷲川の流の其水で、みきを造りてもろはくの、エー夫れを神明に供へ奉り、それを人々戴けば、齡を延ぶるためしとかーや。御祝へ。

○天竺にては人の遊びとれいよーは、エー唐土にては詩を作る、我朝にては千早振る、出雲八重垣妻ごめて、八重垣作る其八重垣を。御祝へ。

○初春の雲とをどしの消え中に、小櫻をどしの扨又夏は卯の花、エー垣邊の水に洗ひ革、秋になりての其色は、エー兜の星は菊の座よ。エー花やかみこそうれしけれ。

○何時も軍に勝ち色の、エー我名は高くあけまする。劍は箱に納めおく、エー只矢囊にいたさんと、富貴の御代となりにける。

○世の中に芽出度い事がある。二歳の祝に、四歳の祝、四十二の祝、六十一の祝、八十八の祝、百一歳の祝ひ、これを祝ふ人は又、四方四角に倉を建て、門ははぶやね八つ造り。床の繪さんをながむれば、松竹梅に鶴と龜、下から龜が舞ひ上る。上から鶴が舞ひ下る。何を舞ふかとながむれば、御家繁昌と舞ひ遊ぶ。御祝へ。

○四方をながむれば、蓬萊山の、エーいさご山、エー黃金の花も咲くらぎ。

○連注繩の齡長かれ七五三、うらじろ小袖は孫に讓りて。

○扨ても目出度い御家の座敷、鶴と龜とが舞ひ遊ぶ。鶴の千とせ龜萬年、末代といはへ。（簸川郡）

○元日の夜の夢に、舟を三艘夢に見た。さきくる舟の帆じるしは、榮螺やきんこを下につみ、中くる舟の帆じるし

は、にしんやかずのこ山にとり、あとくる舟の帆じるしは、一分小判をつみじるし、それで千年萬年繁昌する。

まづはめでたいノーエ。

○まづ目出度いーいーいー、ノーエーエー、ソーレー、わ若枝ーかえーだーもー、エー、えーだーもーさかえーるー、ノーエー、はーもーエー。

○正月の初夢にきさらぎ山の楠の樹を、船に造りて、今卸す、白金柱を押立てゝ、黄金のせみを含ませて、水縄手縄を調へて、綾や錦を帆に巻いて、今朝の嵐を帆に受けて、寶が島に乗り込んで、數の寶を積み受けて、エー旦那(船主の家にては此の家)の倉に納め置く。祝へー目出度いナー。

○正月の初夢に、みそるぎ山の松の葉を、折りて飾ると夢に見た。エーその夢々は合ふならば、三島湊の盃を、一杯受けて眺むれば、四方四面の倉を立て、長者に成るとは、サテモ目出度いナー、祝へー。

○高砂や高砂、尾上の松を臼にして、エー、その木の枝を杵にして、飾をー、ヤーレ、搗く、ヤーラ、さては、目出度いナー。祝へー。

○さても目出度い此の座敷、鶴と龜とが舞ひ遊ぶ。鶴は千年、龜は萬年、末代までも目出度いナー、祝へー。

○新艘卸して、浮形見れば、艫に大黒、二にや蛭子、十二船靈央に据ゑ、鶴と龜とが舞ひ遊ぶ。鶴は千年、龜は萬年、末代までも目出度いナー。祝へー。

○山伏や山伏や、腰に錫杖や法螺の貝、一つ吹きかせ鳴らずとも、鳴ると思へば、たのもしや。先づ目出度いナー。祝へー。

(邇摩郡)

○今日の御祝に鶴と龜とが舞ひ遊ぶ。鶴は千年、龜は又末代までも、目出度いなー。

○あらたまの年のはじめの初夢に、きさらぎ山の楠の木を、船に造りて今おろし、白き柱をおし立てゝ、黄金のせみをく、まして、綾や錦を帆にまいて、寶が島に乗りこんで、かずの寶をつみこんで、旦那の御倉に納めおく。お祝ひ目出度の、ソレ若枝も榮えるノー、葉もしげる。

○波におた〳〵はりまが沖で、潮まきはけしや南風、三丈ばかりの波が來て、ろかいは折れるし帆はさけける。柱は中からわれてとび、どこいそ取りつく島もなし。我々共ならよけれども、國には兩親ござる。可愛や女房に子は二人、も一度あはしてくだんせ。金比羅樣にと願をかけ、七十五人の船方が、かみそり手に持ち髪をつみ、あれよ見なさんせ船頭さん。神の利益が有りがたい。東の方から黑雲が、船頭も一度に手を合せ、をがむまもない風かはる。

○船は破れ船、船頭さは片目、とものおやぢは片ちんば。

○うちのおせどのはす池に、お船が三ばい走りこむ。前なるお船を見おろせば、ゑびす大黑福の神、中なる船を見下せば、金銀寶物積みこんで、後なるお船を見下せば、七福神が竿さして、やれおせそらおせ床の間に。新造つくつてなに積みなさる。黄金白米を積む。

○さても見事なあの船見やれ。金と銀との船板で、金銀黄金重ね葺き、綾や錦で帆をあげて、ともの見ものに松を植ゑ、下から龜がまひ上る、上から鶴が舞ひ下る。(美濃郡)

○新玉の年の初めの初夢に、いさらぎ山の松の枝、床に飾つた夢を見た。この又夢が合ふならば、四方四面の藏を立て、長者になるこそ目出度けれ。ヤーランヨイサ、目出度の五葉、枝もさかえる葉も茂る。

○この船の船頭は福船頭、面梶から二百圓、取梶から三百圓、よーそろ梶から五百圓、三つ合せて千兩。かういふ目出度いことはない。ヤーランヨイサ、目出度の五葉、枝もさかえる葉も茂る。

○その山は山はつる山かめ山の、あひを流れる吉野川。定川の流れる水をくみとつて、おみきに供へて戴いて、壽命長かれ末繁昌。ヤーランヨイサ、目出度の五葉、枝もさかえる葉も茂る。

○その山に雪がまき上げまき下す、瀧田山から富士の山、鳥もかよはぬ山なれど、住めば都に倘まさる。ヤーランヨイサ、目出度の五葉、枝もさかえる葉も茂る。

右は正月二日松直しの船祝、及其の他一般船下しの時に歌ふ。

(知夫郡)

島根縣　ばんご歌　ばんだ歌　追かけ節

○萬づ代と波は寄せきてかはれども、かはらじものはいにしへの石かや。

○これやこの、こゝは高天の原なれば、集りたまへ、四方のかみぐ。　（美濃郡）

○加茂の太夫のたよーのかぐらして見しやい。かぐら見にこそわしや來れ。　（知夫郡）

ばんご歌（一名鑪歌）

○ヤー金がわきますナーこのたたらに、ィヤせんだまんだのナー、ィヤ金ふきだす。

○ヤーむらけ樣がナー、よければナー、炭焚樣もよけれ。ィヤこのよな出るな、その金が金性がよいは。（大原郡）

ばんだ歌

○大坂表の天王寺山、松のみどりかよな／＼と、鐵がわきます、此山内で。

○手前こかねて五十五駄、手前にかねて五十五駄、わけば旦那樣には倉建てなさる。倉の主には金がなる。（仁多郡）

追かけ節

牛馬を牽く時に歌はる。

○こちのおんいへは、まへから繁昌、西のはふにはつるとまる、東のはふにはかめとまる。みねのこざるがちよとまる。つる千年かめ萬年、みねの木こざるは、三萬三千三百三十三年、三月もいけるもの、これもめでたいことなれど、まだもめでたいことがある。とこにかけてある、とこものにうめの木こぼくがかいてある。うぐひすとりが、すをくはひ、十二のたまごを、うみそろへ、よくよくのくめた其の後に、十二のたまごか目をあけて、ていしここへと呼びいだし、金のさかづき銀のながえのおん銚子、一分やこばんの、とりざかな、この家繁昌ほけきよよむ。

○京の三條の絲屋のむすめ、いつもなかの山奥へ、みらへかかるぞ兩親に、さらばやりませういしやうだて、箪笥長持、ふつつゞら、ながさきかもすに、かねの千兩もつけてやる。こら程したてゝやるからに、かならずさりてもどるなよ。こなかゝさんどうよくな、いきてもどらうと思やせん。西がくもれば雨となる、東が曇れば雪となる。雪はしろても水となる、向うのとのごの風しだい。　（能義郡）

○牛を買やらばまだら牛を買やれ。手足が白て、尾が白て、腹にはじやたいのさきまだら、せなかに金銀おひまだら、額にちよんぼりきくまだら、たけのこづのにしをりある、しうとおひたてこづなうつ。どこの市でも市がしら。　（邇摩郡）

大山椿

○さてもめでたナ船通（山名）のとがも、もとは卜藏に葉ははぎ山に、影をさすのが三か國、春はよい／＼。

○さてもめでたな大山椿、もとはお山に葉は日野川に、花は米子の城で咲く。　（仁多郡）

どつさり

○お客望みなら、やり出いて見ませう。當世はやりの、こだいじを、歌に無調法な、わしなれど。

○いとし可愛い、めさきなだのことよ。去年おろいた前髪を、たてゝお下れや元の樣に。

○兩國の橋の上から、文取落す。文は流れる、戀路は沈む。

よれつもつれつ、瀨で遊ぶ。

○鶴の巣ごもり、賀古川本藏、障子明くれば尺八の聲、娘小波で身をやつす。

○筆を柱に硯を船に、書いた文をば帆にまいて、戀と云ふ字を帆印に。

○猫よ、おのれの眼は丸うて四角で、まん中どころがちよこらちよいと赤い。それでなけらな、二階のなけーしちよん／＼ちよろづく、通る鼠をいも取らの。抻らな毎晩毎朝鼠子か、戸棚に上げたる茶碗や皿鉢、しつちんがらりんと落す。

○歌に就いては、わしや思ひ出す。わしのとのごは歌好きで、聲はよい聲、面白い。

○鶴が舞ひます、蓬萊山に。三羽すわりし其山に、中の一羽が舞ひ遊ぶ。あとの二羽鶴うちはやす。

○小夜の中山兩谷清水、谷の清水が峰わくなれば、妻と分れはありやすまい。
○草になりたい、すま取り草に。よれつもつれつ、もつれつよれつ。勝負土俵の中に在る。
○京のとまちで桐の箱ひらうて、あけて見たれば扇の地紙、ひらいて見れば末繁昌。
○忍び忍んで遇はれぬ夜には、門のかさぎに歌をよむ。鳥もはら〳〵我も鳴く。
○大せんお山で目に附くものは、蓮の蓮華の手水鉢、誰が寄進に上げたやら。瀬戸の定右衛門が上げたとな。あらんかぎりの名を殘す。
○京の金閣寺を拜見なしたかごらうじなしたか。楠の天井の一枚ばりではないかいな。はぎのちがひ棚南天床ぶち床ばしら。
○しんぼこたいじに虎の皮きせて、千里飛べとはそれや無理だ。
○下りつけねば上りの節に、港はいらにや、口まで著けて下され、おやちどの。

○親のない子と羽なし鳥は、たつにほろりとないてたつ。
○酒は三盃、男は五尺、五尺男は出ず入らず。
○鳩と鳶と、鳥と雀と、雉と鶯とほととぎすの鳴く聲きけば、鳶ぴろ〳〵、けん〳〵ばた〳〵、はつとんかけたかほととぎす。鶯梅の木小枝とまりてほけきよ讀む。
○麿がまひます、五條の空を。麿でござらぬ牛若丸が、辨慶とろとてまひ下る。
○しよけん知らねば歌の節習へ。歌はしよけんの理をわける。
○大山お山から、ナー隱岐の國見れば、島が四島に大滿寺、サーノーエー、東方から朝日さす、サーノーエー、西に、コレハイドーヂヤナー、五色の、ナー、チヨイト、雲がかける。サーノーエー。
○かのた、かのた、ヤーナー、思ふこと叶うた。鶴が御門に巣を懸けた。サーノーエー、御家、サーコレワイドーヂヤナー、御繁昌と、ナー、チヨイト巣を懸けた。アーサーノーエー。
○私の兄弟は、ナー七人ござる。京や、大坂や、江戸伏見、サーノーエー、佐渡や、コレワイドーヂヤーナー、新潟や、チヨイト私こいに、エーエー、サーノーエー。
○國が小さいとて、愚にしやるな。こゝも昔のあとありて、蛙鳴く音も松風の音も、靜まるいはれあり。（知夫郡）

皆一

○皆一樣におならびなされて、をどり手ぶりを御目にかけう。インサ〳〵〳〵。
○こなたのごもんじ、花のさいたごらんじ。ぜんぜんと見たれば、錢花も咲いたり、黃金の花もさいたり。ヤーラン目出度い八重垣候ぞ。
○こぞより今年は門の松も高いぞ。高いこそ道理ぞ。稻もさかえ候ぞ。
○須彌山の山の小猿が、空の星を取らんとて、手を差しのほす。
○若狹へ上れば津山が見ゆる。さん心得でかぜをば取りやれ。
○しよじの國のごがく院の御寺は、東向の寺なれど、福の參るは數知れず。
○こなたへ參りて、御庭かゝりを眺むれば、梅、桃、唐桃、すもゝやうな實はとても、青葉の櫻、さしても川の御殿櫻、八重の櫻の八重櫻、うづき、けんず皆悉く植ゑ揃へ、今盛りと内による。
○此方へ參りしよもと泉水ながむれば、椎と栗、柿と梨はしまめと、はんさ〳〵〳〵、播磨を廻りてござしやれ。
○岩の間から出る水なれど、忍ぶになれば面白い。
○大國領に黑ない扇を守に持ちて、諸國の福をまねかるゝ。最後の歌は舊八月十五日、一宮神社にて、太鼓の拍子につれ、扇を持ちて舞ふ時に歌はる。（知夫郡）

岡山縣

田植歌

○大山やまーのかーるかいー、昨日きのーがりか、今日けふーがりーかー、おとついーがりーのかーりーほーし。（眞庭郡）

○植ゑども挿せど、まんだまちや長い。なんたら長い長の・まちっ

○此處から見れば近江が一目、笠買うてたもれ、近江笠。

○植田の中をあちこちするは、田の草とりか土鰌ほりか。

○田の草も取らぬ、土鰌の子もほらぬ。唯浮き苗をさすばかり。

○大津の浦でひよんな物拾うた。編み笠なりの物拾うた。

○思ひと戀をさゝ船にや乘せて、思ひは沈む、戀は浮く。

○前田の稻の葉持ちのよさよ、黃金の露に盛りあげる。

○豌豆の花と、さゝけの花は、お從兄弟どしか、お兄弟か。

○向うの山で鷹の羽を拾うた。うれしや殿の矢の羽根に。（苫田郡）

○植田の中でしよほ〳〵なさる。誰かと思へば殿ごさん。

○前田の稻の葉もちのよさ、こがねの露がふりかゝる。

○あの田も植ゑ、この田もうゑた。さなほり酒を飲んでなう。（英田郡）

○ソリヤイノー、植田の中をどんぎりまんぎり（右往左往）するは、うき苗さしか、どぢやうとりか。

○ソリヤイノー、前田のいねは、畦（あぜ）によれかかる、わたしは殿によれかかる。

○ソリヤイノー、植ゑれど、させどー、（合拍子）「オイ〳〵、」このまちやーながい。なんたらーながい、（合拍子）「オイ〳〵、」ながのまち。

○ソリヤイノー、田植が來たらー、（合拍子）「オイ〳〵、」白笠買てもらうて、さらしのひもでー、（合拍子）「オイ〳〵、」

○くやむな娘、ないとて妻が、舟さへ帆かけ風を待つ。

○鷗に沖の潮時とへば、たつ鳥わたしや、波へ問へ。（和氣郡）

○（初の一人）一反二反三反四反五反のー、豆の垣出來らーよー。一人娘のー垣出來ぬよ。（次の一人）さうぢやーよういふ、娘の内のー、エー垣や出來なーよー。チヨイトサイテアトヘヨレ、〳〵。（上道郡）

○向うの山に光るは、月か、ほしか、ほーたるか。

○だいせん山の櫻は、八重に咲いてしをれたり。

○植ゑ田の中に立てるは田の草取りか鳥追ひか。

○大山（たいせん）山の櫻は、八重に小花が咲くやら。

○大山山のしづくにや、笠を十六流いた。

○八重（やよ）がたもとに何、經箱や、本箱や。

○みぞぐちのさいざうが、人に女房を取られて、豌豆に麥のはぜ（參詣りたるもの）をこしにはせて、八まん地獄までたづねた。

○吉野山、櫻のもとに書ねして、花さかりを知らぬ人のあはれさ。

○植田の中に、どんぐまんだり、田草とりか、土鰌（どぢやう）みか。

○別れて君と、松原行けば、露やら、松の涙やら。

○ソリヤイノー、前田のー稻のー葉もちのよさよー、こがねのーつーゆーもりやーけーる。

○ソリヤイノー、むかひのーやーまのーなくひよどりよー。あさくーさーかーりの、めはさまさねどー、あさねーのーとーのゝーめをさーます。

○どんど〳〵とーなるのが、おほたけざゝら、ならーのーが、ひちくーこまざさら。

○ソリヤイノー、植田の中を、どんぐりまんぐりするは、田の草とりか、どぢやうふみかー。ふまのがーや、くさとらぬ。（久米郡）

○苗田の稻があぜによれかゝる、わしは殿御によれかゝる。

○備前のわしは岡山生れ、なる木を米の、まだ知らぬ。

○十七が麥をつく。二十二のとのごがやぐらをり、やぐらにひとめ、麥にひとめ、つかずにおへませうか此麥。
○だいせん山に立つ霧は、米子へおりて雨となる。
○おなり殿はござりたか、白い笠にかーたびら。
○どんどらとーと出て來た。前の川の瀬の音。
○此町は長いぞ。これや命程長いぞ。
○山の谷にひかるは、月か、星か、螢火か。
○田植ゑ、かう植ゑ、傳十郎。

（上房郡）

○大山の、ヤーハレサ、大山に登る、一つ登る、ヤーハレサ、朝こりゆー取りてけさ登る。
○十七が、ヤーハレサ、かけたるたすきに、血がついた、ヤーハレサ、血ぢやないもの紅ぢやもの。トテトン〳〵。
○けふの田の、ヤーレさんばいさんを、おろすねを、ヤーレ、おろすねを、ヤーレ、ソレヤ、おろすねを、ヤーレ、さんばの苗を手にさけて。
○けふの田の、ヤーレ、たのしの屋形、どの家で、ヤーレ、どれやーらす。ヤーレ、八つ棟造りに、ひはだぶき。

○天竺の、ヤーレ、まかもが池、種をつけて、ヤーレ、種をつけて、ヤーレ、其種を、ヤーレ、今朝ほのこくに蒔く種は。
○しろかきが、ヤーレ、前田におりて、なんとかく、ヤーレ、なんとかく、ヤーレ、ソレヤ、なんとかく。ヤーレ、つな引きもどせ、うらやかに。
○十七が、ヤンハーレ、持ちたる鍵はどの倉に、ヤンハーレ、どの倉に。ヤンハーレ、白米倉の戸を開く。
○きたといのー、だい〳〵かぐらにかゝよい〳〵。
○こうといのー、笛と太鼓で、アヨイ〳〵、もとすりの。
○しろかきが、ヤンハーレナ、まぐはにもたれて、ねむりする、ひるまのごしが過ぎたやら。あづまの若殿夢に見た。戰にかてとの、若殿が。
○今日の、ヤンハーレナ、たのしの屋形を眺むれば、ヤンハーレナ、八つむね造りにひはだぶき。
○田植じやうずと聞こえた。今日こそおいで、てーくらびー。
○田の神が、ヤーハレナ、とこいりなさるはどのへやか。

ヤーハレナ、しんじよがざしきのまくの内。
○田の神が、ヤーハレナ、田なりし月は、五月か。小ある月のてんしやにち。
○田の神が、ヤーハレ、つはりのやまひ、なにこーのむ、ヤーハレ、すいかにや梅、これこのむ。
○田の神が、ヤーハレナ、たいないにごーざる。なんぼー月。ヤーハレナ、十月にうれゝば、生れくむ。
○田の神が、ヤーハレナ、うぶゆの盥は何盥。ヤーハレナ、楠木くれにやつわかけ。
○さまの歌聲ほのかに聞けば、高い森木の蟬の聲ー。
○熊谷が、ヤーハレ、日の丸扇さしあげて、敦盛どれと打ち招く。ヤーハレ。

（阿哲郡）

○だいせん山にひかるは、ハラ、月か、星か、螢か、ヤレサセ〳〵。
○お米にしたら數知れん。酒に造らばめいしゆ酒。いとしとのごに飲ませたい。
○三ばいもり木はなになに。卯の花、栗の木、萱の箸。

田植の時、苗代の邊に卯の花、萱、栗の木を立てゝ田の神を祭る。
○だいせん山の卯の花は、八重に咲いたがごだれた。
○今日の田の神樣を拜むには、三把の苗を手に持ちて。田植の時、苗を三把並べ、其上に柿の葉に飯を入れて、田の神に供ふ。
○しろかきがお酒たべすごしてあぜ枕、穗に穗がさいたと夢を見た。
○しろかきが此田に入れて何とかく。鶴のすごもり千どりがき。
○今日の田植の連者が揃うたか。揃はぬ人は苗持ちて。
○朝おきて細戸にあけて見わたせば、黃金にまさる朝日さす。
○我殿が鞍馬山へ何に行く。お福の種を受けに行く。
○鞍馬では夜のひきあけに夢を見た。穗に穗がさいたと夢を見た。
○田の神のそのおや〳〵をたづぬれば、いざなぎ〳〵のみことなり。

○國土の廣き荒野を田となして、くはのみほこやうゑの玉米。
○今日の植田をきよめる何神。植田きよめるさるだひこ。
○大山のお山のほるいつのほる。あさ垢離とりて今朝のほる。
○高綱がのりたる駒は何こまか。こまは池月めづらしや。
○卷狩に其名たかきさむらひは、仁田の四郎たゞつねよ。
○頼朝が富士の卷狩の本陣に、さゝりんだうの幕をはり。
○勝五郎、權現樣のごりやくで、おもかたきにでやはれた。
○宗五郎、百姓なんぎを見るよりも、我が身引きかへ願ひ上げ。
○宗五郎、願書を竹にわりはさみ、おかご内へつき入るゝ。
○宗五郎、水ぜめ火ぜめさん木ぜめ、つみない子供がやいとぜめ。

（川上郡）

草取歌

○打てやゝ、此田を打てやー。うかせゝ、此田にうかせー。

（眞庭郡）

○一目見て、二目と見ぬ山櫻、へだつふすまが春のかすみぞ。
○田の草取は始めたが、三べん四へんと、まはたら五しきのいね一本の稻千石よー。

（阿哲郡）

○私うちが、心とよー、由加の山はよー、青々まつばかりよ。
○泥水にすまひすれども、身は清淨、筆をよごさぬ杜若。
○春の日に岩にほころぶ梅の花、鶯とまれよ此の枝へ。
○さんご四十目のすもりしよまに、歸いんで、田の草とるがよい。

（見島郡）

盆踊歌

○十七八はー竹の水ー。さらーさらと、コノセーコリヤ、おつるは、女子の世の習ひ。ハリヤヨイワイナー。

（久米郡）

千秋樂（てんからこ）

○一つ、ひよどりせんたのみを祝ふ。二つ、ふなだませんどうが祝ふ。三つ、みこんどのすゞもつて祝ふ。四つ、よばひほしややみのよを祝ふ。五つ、いしやどのくすりばこ祝ふ。六つ、むこどのしうとのかみを祝ふ。七つ、なぎなたさむらひしゆうが祝ふ。八つ、やまぶしやほらのかひ祝ふ。九つ、こうやは藍染さま祝ふ。十、豆腐屋がとうふ箱祝ふ。チヨイト一ツチヤウテンカラコ、テンカラコニヤ、聲をせ。ヨイヨイヨイトナ。

（都窪郡）

○出たゝ、なにが出た。山が育ちの者が出た。山が育ちの者なれば、何をいはうにも事しらず。皆さん方の御笑ひ草に、ちよい一口申します。つくゞひやうしをやるなれば、港々に船がつく、船にはろもつく、かぢもつく。御醫者の尻には供がつく。

（川上郡）

豐年踊歌

○打てやゝ囃せや、豐年を。祝ふ手拍子、はで浴衣、笹に短册
折鶴は、千代の松坂こえゝに、おてる子供の手拍子は、
あふ瀨まれなる天の川、幾代ぬる夜の數々を、筆にしらせん露の玉、龍田川には色そへて、流す紅葉の錦帶、わしとそなたは紅の花色に、染めても染めあかぬ。なさけしづくもうけて見ぬ、しんきしんくの緣の絲、柳櫻をこきまぜて、可愛らしさは花の妻、年は十七初花の、雨にしをるゝたちすがた、闇も菜種のちらし書き、筆にもつるゝ亂れ髪、竹に雀はよくとまる、とめてとまらぬ戀の道。紅葉ふみわけ啼く鹿の、しかもかのこの戀衣、ひけばなびかんをだまきの、いとし數々結び初め、もすそほら〳〵しどけなく、蝶に菜種のちらし書き、闇をぬひゆく螢火の、それかあらぬかたち姿、行くへ定めぬあま小舟、岸に放れて便りなく、奈良の都の八重櫻、匂ふ九重うかれ來て、二度の勤めは島原の、柳ふりわけ亂れ髪、かくれゆく島磯千鳥、暮に啼捨小舟、我も木蔭に立ちよりて、吹くはなつかし松の風、錦おり出す紅葉葉の、露の玉散る夕嵐、松の色々みどりして、若き常磐木嫗小松、君がなさけは薄櫻、せめて一夜は絲ざくら、浮世捨てにし墨染の、むかし偲ばん姥櫻、磯馴松風高砂や、たれになびかん一つ松、芳野初瀨の初櫻、引手あまたの八重櫻、

おてるこゝろは浮草の、水の流れも苦にならぬ。夢かうつゝか白鷺の、雪に姿のかくし妻、おもひ亂れし黒髪の、烏帽子狩衣かりの妻、きつゝなれにし戀すてふ、須磨は配所の思ひ草、なにし難波の濱風に、そだつ蘆邊の磯千鳥、駒の足なみはかどらで、心こがすやさしも艸、月と花とのふたおもひ、いとしかはいの諸はがひ、いふもさらなり諸人の、心やはらぐおんど歌。（眞庭郡）

臼挽歌（一名米し）

〇臼のかーるーさーは、あひてーのーよーさーよ。かはるな、あーすーのーの夜も、かはるなー、相手かはるな、あーすーのーの夜も。

〇びぜんをーかーやーま新太郎樣の、のぼりにやーあーめーがふーる、のぼりにやーあーめーがーふーる。

〇さまよさーんよーの三日月さーまーよ。ちらりとみーたーばーかーり、ちらりーとよひに、ちらりとみーたーばーかーり。（眞庭郡）

唐箕歌

〇うちの背戸の三つまた榎、榎實ならずに金がなる。

〇とん／＼とやまの杉の木檜、袖をふりかけ花がちる。（上房郡）

餅搗歌

〇餅搗きの源太郎。搗き手がなけにや搗いてやらう、もみてがなけにやもんでやらう、喰ひ手がなけにや喰うてやらう、餅搗きの源太郎。（川上郡）

酒造歌

〇今搾る酒母は、ごしゆになる。桶の木の大木は板になる。

〇うちあけて見れば羽黒山、見おろせば西隆寺、みほの高瀬が。

〇をさなき時はかさねぎで、年よればひとへゝ脱ぐが竹の子。

〇おもはくさまにそはれぬかと、淺草の觀音さまに七日夜籠り。

〇お江戸ではやる刀掛け、今此處ではやるの蚊帳の釣手に、つりかぎ引掛け、ほつかけなうんよ。（岡山市）

〇忍ばうとすれば「ヤボジヤイ／＼」夫がせく。赤黒なくなよ、斑もなくなよ、忍ぶ約束。（御津郡）

〇今するもとは御酒となる、楠は石となる。ナンエンヨー。

〇玉島がよいとは誰がいうた。前は海、沖では水島、横手は八幡、うねすね入海のり込む大船、よこつけ、べつたり、後には、七つ七島。ナンエンヨー。（淺口郡）

濱歌

製鹽に從事する濱子の歌。

〇かはいーこひぢが濱ひくときにや、涼し風ふけ空くもれ。

〇かはいーこひぢが三番濱で、足に黒土、手に手引く。

〇濱子さむらひ、日をいとはず、雨はふりても、ふちはとる。（兒島郡）

吳産織歌

岡山縣　濱歌　吳産織歌　おひかけ

〇うちがーわがいときやー、あーさんどーなれやー、おひなにかみゆうて、だんだらかけもの、絲ぶさかんざし、黄八の著物に、ほんねる下著に、しゆちんの帶して、一樂羽織で、しら足袋はいて、いちやのせきどで、さしたけかたいで、ドツコイドコショデ、ござおーりなさーれ。それにー迷はぬ人はーなしー。（都窪郡）

おひかけ

此歌は牛追の唄ふ歌なり。

〇大山お山に登る牛、因幡の國から上りたか、出雲の國から登りたか。出雲の國から上りたぞ。出雲の國ではどこ郡。三田の郡の横田町、水の流れる川上に、八川と云ふ村ありまする。大藏さんの出せ子で、とらずで三歳尺二寸、角が高勢で中白で、何處とてとがめるとこはない。昨日手前の其内に、ねだんも百兩になりました。それでも賣る氣になりませぬ。どこの國でも三百兩。

〇あすはお七の寺まゐり、片手に杓もち花さけて、唐から渡るが日本橋、向うはるかにながむれば、つがひのかも

めが遊び居る。あれ見やしやんせかゝさんよ。鳥畜類でもあのやうに、夫婦中よう遊ぶのに、ゝゝゝゝ會してくれんがざんねんな。　（吉備郡）

○牛は一牛菊の紋、角は二本のまへがなを、腹は大鼓のぶちまだら、四足そろへていくときにや。アラヨイショヨイショ。　（上道郡）

追分

○牛を買ひなされや、まだら牛買はれ。四足が白うて、尾が白て、腹には大鼓のぶちまだら、背には金箱負ひまだら、額がちよんぼり菊斑、角は高手で金輪角、伊勢でも、土佐でも大津でも、どこの市でも三百兩。（川上郡）

地方特有歌

○きびつの宮の、かまのめいどの、おとたかし、手水の御前に、内宮谷、ばばのさくらに大鳥居、ほそたに川にまるきばし、ありきになたかきたまつばき、成親卿のゆめのあと、拜まんせ。（或はまるらんせ。）　（都窪郡）

廣島縣

門開き

○やんらー目出度いなー、一千里、萬歳らー、二六のするし三夜のあかとき、待つて見れば、十ぜん箱の種おろす。十方には九萬歳、二十四色の種おろし、おゆうて、けゝしゆうて、やんらー目出度や。あなたは大福長者樣と祝ひます。

右は正月元日、穢多の歌ひ來る歌なり。（比婆郡）

正月元日寅卯の刻より穢多共打連れて（服裝は色褪黄のちはやの脊に日の出に鶴の模樣入りたるを著、袴を著け大小の刀を佩ぶ）氏神及名主の許に集り、門開の祝歌を歌ひ、それより二三人づゝわかれ〳〵に、村内家毎に行きて歌ひ、祝儀として酒、餅、又は米などを貰ふ。

其謠ひ方は音頭取るもの「あーらめでたや」と聲張り上げて唱ふるときは、皆々調子をそろへて次の如く謠ふなり。

○五十六億七千十萬歳、彌勒出生さん夜の曉、畝の眞砂が谷へ下り、谷の眞砂が畝へ上りて、大盤石の巖となりて、君王子の御萬歳と、さしに榮えて楊柳の影向、吉日と持つて參れば、里勝金剛の玉冠を頭に召し、讓り葉を口に加へ、五葉の松を手に持ちて、源氏の門は押しや開けや、王子は是へ候へける。法華經は一部八卷、六萬九千三百八十四文字の中には、一の卷に在りしは、白王品第十六と譽め悅び給ふ。八町に十六町の堀をほり、宮殿樓閣建て並べ、四方に四萬の藏を建て、長者のしんと祝ひては、廻りの懸の植ゑたる木の名はなん〳〵ずるや。御比良菖蒲に唐菖蒲と、松にかゝれる藤の花、山を青める藍の水は、池の浪の立つやうは、書うつ浪を金剛とし、夜うつ浪はゆうきことふつどう樂や。（詞）金はさんじやうの御藏を押し開き、白銀の盤に黄金の扉を向いて參りました。　（賀茂郡）

萬歲樂

萬歲樂は地方の新平民にして、元八屋と稱へたる種族（奇麗に著飾りたる小娘二人を連れたる同行七八人位）、舊正月の二日頃より三味線、四ッ竹、小太鼓等の囃を入れて、小娘を踊らせ、又は舞はせなどして、左に掲げたる歌謠を稱へ、正月の緣起を祝ふとて歩き廻り、米餅酒等を謝物として貰ひ居たるが、去る明治三十五年頃より、笊の製造に熱中し出したるが爲め、彼等の生活上非常なる進歩をなし、更に巡回せざるに至れり。

蓬萊萬歲

○めーでーたーやー、御萬歲ーは、御家をー繁昌ーと祝ひーけり。追手の作りは結構さんよ。先づ萬兩に取りては、一力けんざや二九の繁昌。昔觀音菩薩天の御時より、夫れ天竺より來らせ給ふ。二人の御そさん左の御手に持たせては、藥師の本經が十二卷、天台さんが六十卷、淨土の上では三部の本經や法華經が一部八卷、二十八本、文字の數七億六萬九千三百八十四つの文字を疊み込み、我朝へ來させては、始めて佛法を弘め給ふ。其の後世には聖德大師のけんざう法師。

立舞歌

○すきや物ずき、よい花盡し、春夏秋の花盡し。先づ春咲くは梅の花、トリナリシヤント、寅の尾櫻、よい花盡し。夏は先づ咲く卯の花。エー秋は先づ咲く、ヨイコナ、ヨナコナ、ヨイコナ、重ね菊、品よく廻れ、くるりと廻れ。クルリヤクルクル、こぎりく車菊、御所は御門に、ハレワイサテ、咲くは九重菊。

○若手の枕、寢にやこそ來れ。ハレワイサー、枕やろとは曲がない。シーヨホ、けらきよーをー。

○樣はいにやるかー、送りとてならぬ。デサナ、ついて送ろや峠まで。シーヨホホ、けらきよーをー。

○花の盛りは二八の蕾、ハースツチンチン、色よき霧島、紅五月花、イヤソーレ、心水仙、車花、廻る品よく嫁百合の、イヤ心小菊や。

立踊歌

○獅子に牡丹はあやかりものめが、エー二人つるが嬉しさよ。コナツマカイサン、コナオソメサン、戀風と思はんせ。ソレ、ソレ、ソレ誠ぢやエー、チリチリチンチン……。

○お染久松は、あやかりものめが、エー二人つるが嬉しさよ。コナツマガイサン、コナオソメサン、戀風と思はんせ。ソレ、ソレ、ソレ誠ぢやエー、チリチリチン。

○今年は世がよて、穗に穗が咲いて、道の小草に錢が生る。處は入船寶船、オー世の中よの。ヨイトサノサー。

○あの嫁よい子ぢや。大平樂、ちつくり出しかけた。大坂雪駄で通はんす。往んだら婚さが叱らんせう、往んだら婚さが叱らんせう。

○あれ見やしやんせ、エエッ横町かーら私や、よとなんよとなんお鎌が籠ぢや來る。おいあれがなん、ソコヂヤ、そこ見て中つき。ハレヨイハレヨイヨイ。

○無理な口舌を仕懸けてや置いて、ハートツツン、トツツン、トツチンシヤン、誤り入るが樂に、ハーチンツ、チンリン、リンリン、二世の、チンチンチン、二世の約束うそなれや。イヤほんにどうなとしたがよい。附けて流して置かしやんせ。ハーチンツ、チンリン、リンリン、ハーチツツン、チンリン、ツツツン、ツンツン。

○若水の代りには、あなたの乾の隅よりは、大判や小判や一歩に灰吹。しなの山ではしなの川、短册取り交ぜの、都の車に積ませては、あなたの御藏に、キリリンヤ、サンギリサント引きや納める。さてこそ目出度や御祝ひ。

（甲奴郡）

神明祭歌（舊正月十五日）

○能地のおつつあん章魚どもとつたか。いかばーかりよー。

（豐田郡）

能地の浮鯛

○うきだひ〳〵のうぢのうきだひ、なだかいうきだひ、はかりにかけたら、十匁二十匁三十匁四十匁五十匁六十匁七十匁八十匁九十匁百匁二百匁三百匁四百匁五百匁六百匁七百匁八百匁九百匁一貫めー。

（豐田郡）

正月望歌

舊正月十五日子供の歌ふもの。

○姉さん長持はいつもどる。正月すぎて春過ぎて、菜種のお花が散るとき、ノ！散るとき。

○姉さんたもとに何が鳴く。せみが鳴く。どういうて、石原小石というてなく。

○姉さん其子をおくれんか。あげませうよ、おとうさんに相談づくで上げう。

○金の烟管でたゝかれて、やれ痛や、こらいたや。紫こいろの血が出た。

○姉さん其櫛や何處で買た。竹原のいーだや小小路の小間物屋、ノー小間物屋。

○お前はのーずのぢやこかべり、まへだりかけで、お手ふりで、かたつまからけてお手ふりで。（賀茂郡）

御田植歌

正月中旬御田植とて、穢多四五人三味線太鼓に合せ、在家の戸毎にて左の歌をうたひ、扇を持ちたる子供を舞はしむ。

○（音頭）トタリヤトタリヤ（この音頭にて舞ひ出だす）（ツレ囃）今日は日もよし二月九日、藏の戸を開けた。早稻籾いだし、かしませう二千俵。籾蒔きこそ御目出度い、申せばさても苗立揃ひ、たゐで御座るなら代牛が入りませう。赤いまだら小まだら、何誰のつゞ黑を、先き牛に立てませう。ゐぶり差には二次樣三郎さま、小早少女をましさま、其勢積りは五千人。早苗も採揃へた、どんぶりこんぶり植ゐませう、畦越する程出來ませう。（賀茂郡）

一人鳥追

正月中旬頃、一人鳥追とて、穢多一人太鼓を擊ちて、次の歌を歌ひ來り、米金などを請ふ。

○千乘や萬乘や、二升じやくの御鳥追が參りては、福の御神先に立ち、年玉してこそ御芽出度し、御目出度し。御牛を飼うて作り附けの御仕度、五穀豐饒と御祭め申す。（賀茂郡）

○お月さまは森木のかけで、頃はよい頃出てしのぶ。

○苗とてもあるぞ。よろこべ、この年は苗々と。苗々となへと泣くなよ、あるとしを。（比婆郡）

○朝聲は、ヤーレ、ならしにならせ。ならさぬ聲はねごろ。

○千早振昔神代のはじまり、神代はどこの國で始まる。神代は出雲の國で始まる。苗代はどこの國が始まり。苗代は出雲の國が始まり。出雲でとよせが原を開いた。苗代は千石蒔きの苗代。種を何神さまが求めた。種をば稻荷樣が求めた。種をば桶に廿日かすもの、種をば寒水とりて浸すもの、種をば明き方に向いてまくもの。御方が苗代ふみに出られた。苗代は四寸水にためおけ。（雙三郡）

○（男）東にの、東戸を少しあけて見たれば、（女）黃金色の朝日さす、少しあけて見たれば。

○（合唱）座頭、京へのぼる折や、琵琶ぴやん箱を置いて行け。

戀しかろ折や、またつるがん〳〵てんつるがん、ひいても慰む、置いて行け。

廣島縣　田植歌

○向ひなるだい寺を、朝起きて見たればー、美しき天童たちが花をりかざりて。

○奥山に刈る萱は、昨日がりか今日がりか。昨日刈りははばへた、今日がりは。（山縣郡）

田植歌

○しのだのもんの朝露、拂うて、たをうだ。

○つるぞや、沖の小鯛を。

○くるぞや、はしの渡りを。

○おさいもるは弟嫁。

○横座へなほるは太郎嫁。

○中のかけごをやすめた。

○千石六斗をかせいだ。

○西山かけをおろいた。

○いぐゐを足かとあらうた。

朝六七時より始め、凡一時間以上も各章を繰返し歌ふ。

○ござれ、お出でなされ、參詣せうぢやなーいか、安藝の宮島。安藝の宮島さんの廻廊の階は、いつもどーらどら、

どらめくかどに、福がごーざる。福の神さんならなでこめ。うーちへ、こめごーめーの木、米と金との松竹山の、松の葉のかずあるとは聞けど、ついぞ、見ーもせぬ。

○さまれよい聲そよ、細谷川の鶯の聲。さまれ鶯はせは小まけれど經の字を讀む。經の字をばよう讀まぬ者はなけやけて置きやれ、高いなけしへ。高い高神六字にやおろせ。やしろ定めやれ定めさせませう。定めて置きやれ、あとがしどろまんどろやらにやそろはぬ。なぜ杵の音、なぜたなせ杵のとりえが折れた。音で參らせう。音は音ちやが太鼓の音。よこそねられぬ。夜こそねられにや、泊りにござれ。よう來た。あがれ休め。親子ならこそようきた。あがれ休め茶を飲め。茶をば飲みませうが、茶の子にや何か。梅を茶の子に梅々と。梅ない里に茶をば飲まぬか。よい茶立て喰うてあわふきのけて、嫁をそしりやーる。よめ〳〵とそしりやる。其姑も本は嫁御よ。よめ・にやかづら帶、娘にや京の帶。京の廣き尺長、廣き尺長、半分はたのむ。貰へなから貝でやる。貝ぢや貝ぢやと娘を貝に貝やりにする。

（御調縣）

○ドッコイ、よいこゑぞ、細谷川の。
○ドッコイ、鶯殿、せーほそけれども、經の字を讀む。
○ドッコエ、經字は一字と書きて、二字とこそ讀む。
○さーまの、さんばい樣。此の田の稻は、ドッコエ、八穗で八石。
○ドッコエ、八穗で八石とは、とんでのことか。
○苗をよう取る。きのほり苗を、千把百取る。
○千把百の苗を把にまはせば、貝の百無い。
○たぶさたん處名所と聞けば、むすめをやりたや。
○さまのさんばい樣、前田の稻は、八穗で八石藏く。
○三ばいさーまー、森木のしたで、うつーぎよいころべー。
○娘やりて三年になるが、娘おこさぬ。嬶もこも來ん。
○家陰町出で、申山の松ぞ見える。
○こんな田植しゆはどしよねがぬけて、せみのむで殼くものゑか、つて、空で身が鳴く。空で鳴かずにろくちにおりて、社を定め。定めの内は神と呼ばれん。神は社に、ほとけは佛に住まひなされる。

○さまれ、さんばい樣。此の田の中で八穗で八石、斗で八石か。吉田納か吉田はや早稻米もできつろ。米はもてこんさらした親におめひをもて來た。おめひもてこうよりや、あの背戸川へ身を投げ捨て。身投げるには投げ時がある。すぎた〳〵とおまいさはすぎた。我れにや似ようた似ようてうれし。にやはんとても緣てじやるもの。緣と腐り繩は、切らうにも切れん。

（蘆品郡）

○十七が、ヤーハレ、鍬ふりかだいて何處に行く。ヤーハレ、三角畑のあらおこし。
○十七が、ヤーハレ、まだ田もすまぬに足洗うて、ヤーハレ、我家にかへりて文をかく。
○十七が、ヤーハレ、麻をまくには何時まくか。ヤーハレ、三日土用の午の日に。
○十七が、ヤーハレ、あさをのはえくる、めぐみよよ。ヤーハレ、もとばが一つで葉がしげる。
○十七が、ヤーハレ、あさ苧を刈るには何時かるか。ヤーハレ、六月土用の中頃に。

廣島縣　田植歌

○十七が、ヤーハレ、かつたるあさ苧をそぐには、ヤーハレ、ひちくの竹でそぎたてる。
○十七が、ヤーハレ、そいだるあさ苧をどうなさる。ヤーハレ、もとをそろへて、そろへたてる。
○田ぬしの、ヤーハレ、御門をながむれば、ヤーハレ、總白壁で黑御門。
○田ぬしの、ヤーハレ、御門を入る時に、ヤーハレ、小笠を手にとり、ごめにやなれ。
○天神樣を、ヤーハレ、をがむには、ヤーハレ、玉のみすだれ、まきあげて。
○天神樣の、ヤーハレ、右脇に何古木。梅の木古木で美しや。
○天神樣に、ヤーハレ、まゐるには、ヤーハレ、梅の木小枝をさしあげて。
○此世では時うつものは何ぢややら、ヤーハレ、若狹の國のにはとりよ。
○にはとりはまだ夜の九つに何ならす。ヤーハレ、羽うちならいて聲ならす。

○にはとりは若狭の國の歌のすけ、ヤーハレ、諸國の人の目をさます。

○にはとりはとやからおりて、いほりかく、ヤーハレ、諸國の寶をかきよせる。

○京へのぼるよいにようほ。どれがこちのごれんさんか。ほけきやうてほんもつたが、あれがこちのごれんさん。

○京へのぼる京大工、肩に手斧かたいで、腰には番匠金、かたに手斧。

早少女

○あさまーには、ヤーハレ、さうとーめーだちらの、身をきーよめー、ヤーハレ、身をきーよめー、ヤーハレ、きーよめー、ヤーハレ、ィヤー身をきーよめー、ヤーハレ、きーよめーてーうゑるがーたーうゑーなり。

○あさまーには、ヤーハレ、さうとめだーちが揃うーたかー、ヤーハレ、揃うーたか、ヤーハレ、揃うーたか、ヤーハレ、ィヤー揃うーたか、ヤーハレ、かーさのーわーぐちがーそーろうたか。

○あさまーには、ヤーハレ、この田をーはーじてさしづーする、ヤーハレ、さしづーする、ヤーハレ、ィヤさしづーする。ヤーハレ、さしづにーまーかせてうーゑ給へ。

○たのーかーみのー、ヤーハレ、そのおーやーおーやをたづーぬーれば、ヤーハレ、たづーぬーれーば、ヤーハレ、ィヤたづぬーれば、ヤーハレ、いざなーぎいざなーみのみーことなり。

○あさ起きて、ヤーハレ、かみとーきーあーけーてー、鏡たつ、ヤーハレ、鏡たつ、ヤーハレ。（以上音頭なり。以下之に倣ふ）

「かーがみーたつ。ヤーハレ、わーがーみのすーがーた、とーりなーほす。（附歌なり。以下之に倣ふ）

○朝起きて、ヤーハレ、手水のみーづは、どこにーでる、ヤーハレ、どこにーでる、ヤーハレ、

「どこにーでる。ヤーハレ、わーがすーむ、さーとにーでーるしーみづ。

○いづもでは、ヤンーハーレー、きーづきさーまーに參るにーは、ヤンーハーレー。

「まーゐるには、ヤンーハーレー、御編ごーふくーをたーもれーとをーがむなり。

○よなごーでは、ヤンーハーレー、こひしきー人はどこのー人、ヤンーハーレー、どこのー人、ヤンーハーレー、

「どーこの人。ヤンーハーレー、とーころーはしーれーぬたーびのー人。

○こひしーくば、ヤンーハーレー、たづねーてごーざれ米子まで、ヤンーハーレー、米子まで、ヤンーハーレー、「米子まで、ヤンハーレ、米子のまーちのまんーなーかに。

○だいせんのー、ヤーハーレー、おやまーにのぼるは、いつのーぼる、ヤンーハーレー、いつのーぼる、ヤンーハーレー。「いつのーぼる。ヤーハーレー、あーさごりとーりーてけさのーぼる。

○だいせんーのー、ヤーハーレー、おやまーにのーぼるーひめごーまは、ヤーハーレー、ひめごまは、ヤンーハーレー、

「ひめごまは、ヤンーハーレー、たーんのはーらであせをふく。

○だいせーんの、ヤーハーレー、横手のーそーらーでまーふきりはー、ヤーハーレー、まふきーりは、ヤーハーレー、

「まふきーりは、ヤーハーレー。こーれこそ、よーなごで、あめとーなる。

○だいせーんの、ヤーハーレー、本社のーおー背戸にある笹さーさは、ヤーハーレー、あるさーさは、ヤーハーレー、

「あーるさーさは、ヤーハーレー、しよーこくのーぎうば牛馬のごーふとなる。

○きやうとーでは、ヤーハーレー、五條橋ごーでうのはーしを行く人ひーとは、ヤーハーレー、ゆくひーとは、ヤーハーレー、

「行くひーとは、ヤーハーレー、いーつこそ、たーゆるひーまはない。

○ちーはやーふる、ヤーハーレー、神かみ代のむーかし、田のはーじめ、ヤーハーレー、田のはーじめ、ヤーハーレー、

「田のはーじめ、ヤーハーレー、きーづきの、うーらの、みすまーくほ。

○てなづーちの、ヤーハーレー、はーかりやーるまーすは、なーにまーすか、ヤーハーレー、なにまーすか、ヤーハレー、

「なーにまーすか。ヤーハーレー、こーがねのまーすに、つるをーかけ。

○うぐひーすが、ヤーハーレー、さくらのー小枝に、ひるねして、ヤーハーレ、ひるねーして、ヤーハーレー、

「ひーるねして、ヤーハーレー、はーなーの、ちーるを、ゆーめに見た。

○はな、さーいて、ヤーンハーレー、みのらーの、はーなーは、なんのー花、ヤーンハーレー、何んの花、ヤーンハーレー、

「何の花。ヤーハーレー、みーのらーの、花はあーさの花。

○あつもーりの、ヤーンハーレー、めしたーる鎧は、ひをどーしか、ヤーンハーレー、ひをどーしか、ヤーンハレー、

「ひーをどーしか。ヤーンハーレー、めしたる、よーろひは、ちーのよーろひ。

○うぢがーはで、ヤーンハーレー、其名もたーかきー、さむらーひは、ヤーンハーレー、さむらひは、ヤーンハーレー。

「さーむらひは、ヤーハーレー、かーぢはら、けんだ、かーけするよ。

○かけするのー、ヤーハーレー、のりたーる、こーまは、

なにごーまか、ヤーハーレー、なにごーまか、ヤーハーレー。

「なーにごーまか。ヤーハーレー、くーろけーの、こーまーのーめーいばーなり。

○こーこはー、おほつほぢやー。お手がたちやー、おーいーでー、うゑてーすばらうやー、うゑてーすばらんーせー、ちーちも、たぶさーも、つーかーるとーも。

○さまれさーんばいさーまー。まいだーのー、いーいーねーは、つーゆーのー、なーびーきーかー、あーなーたーのー、いーいーねーは、つーゆーのー、なーびーきーかー、つーゆーのなーびーきーとーは、いーつーほーでーごーこーくー、やーほーでー、はーちーこーくー。

○こーくーとーは、とーでのーこーとーかー、よーしーだーをーさーめーかー、とーでーのーこーとーかー。よーしーだをーさめーなーらー、こーめーをーもーてーきつーろー。こめーをーもーてーこんーぞーやー、さられーしおーやーにー、おもーひー、もーてーきーたー。おも

ーいー、もうてー、こーよーりー、なじよせーどーがーはーにー、みをーばーなーけーんーかー、なじよーせーどーがーはーへー。

○さまり、さんばい樣は、此の田のいねは、露のなびきすれや、五穂で五石。八穂で八石とは、とんでの、米ぢや。吉田はや早稻なら、米もて來つらう。だしやれ、いたゞかう。米はもてこんよりや、なじよ背戸川へ、身をば投げなれ。身をなけまじよにや、身の投げ時が過ぎたでないか。過ぎた、過ぎました、おまへさんすぎた。

さまに片袖、肩に袖とは、よりよし、たよぢや、さん田作りせうよりや、さん田作りをして、若し世に出たら、數に酒買ふ。酒を酒屋に、酒手は殿の腰の、さいふの、めくすり錢は、あきゆんどさの錢、あきゆんど、どちなら、これよりや束、……ねとり立たせな、ねとり立たせら、八萬地獄、八度おちるぞ。八度〳〵とは、なんぼが八度、十五夜のたび、月の十五日の、月星ぢやさえた、村雲もない。村にやあるとも、まんべにおもへ、よめも我が子も、三本えのき、くうやくはので、こいとるまつは、

阿下山の松、阿下のありつね、さゝけのねとで、たてりまけするとはいへど、見た人はない。（神石郡）

○日が暮れれや、ヤーンハーレナ、賑かな、ヤーンハレー、西山方が賑かな、ヤーンハーレナ、賑かな、ヤーンハレー、コリヤ賑かな。ヤーンハレナ、日輪樣が舞ひ御座る。

○今日のー田の、ヤーンハーレナ、田主のー館を眺むーれば、ヤーンハーレナ、眺むーれば、ヤーンハレー、コリヤ眺むーれば、ヤーンハーレナ、八ツ棟造りーにー檜皮葺。

○今日の田のー田友達やー名殘惜しや友達、コリヤ、名殘のー文はまーたー洗川で參らせう。

○植ゑて出つさいせーやー、矢多田や矢野や、（郡内の大字）小童や田房田處ぢや名所と聞けば、娘遣りたーやー。娘遣りてかーらー三年にやーなーるが、婿が未だ來ぬ。婿が來たさうな榎が峠にー、駒が勇めくー。駒が勇めーけや、轡の音が、ざーらーりーざーらりーと、ざらりざらりと勇めく駒に、乘せて遣りたーいー。乘せて遣らいせー

彼
是

や、ありよーもこーりよーも、あんな女郎衆も。……
口僻にや乘る度毎に、始めはじめと、始め。その後逢
ひたり見ちや、信音が聞きたーい。相は聞きたし間は遠
し、川の瀬も鳴る。川の瀬が鳴れやうや、のろのろーと、
其處(底)
そこが恐ろし、恐ろしーやー。後ろは御山、前は大河。
大河の水かへ乾して、親と居りたーい。親と居りても樂
せうーぢやないが、心易さーに。……我子泣く聲千部
の經より、未だーもーおもしーろー。面白や何處山伏の
貝を吹くやーらー、山伏の貝吹きゆー習うて、附いて修
業せうやー、修業さいすれやー、西國四國、阿波の國ま
で。阿波の國では三莊が太夫はー、我にや伯母婿……。
○さまれ三ばい樣。お前の稻はー、八穗で八石、八穗で八
石か飛んでーのーこーとーよ。吉田（舊毛利の城趾のある處）納めの
來
ー、吉田納めのー米持つてきーたーかい。出しやーれー
戴
いーただーくー。米は持て來んぞーえ。去られて、此處
に、思ひ持て來たー。思ひ持て來うよりや、何故背戸川
へ身をば投げぬか。身を投げませうが、身の投げ時は
過ぎたでーは無いーか。過ぎた過ぎまーした、御前さん

にやー過ぎた。我にや似合うた。似合や嬉しや、似合は
ぬとーてーも、緣でじやるもの。緣の鎖綱切らうとて切
れぬ。たくられーもせーぬー。さまれ善い所ぢや三原の
沖の、踊るこのしろ。このしろの踊るのを見たが、數は
得讀まぬ。數は讀めました。粗に讀めた、四千四五百。
四千四五百又數へたら、只の百ない。百ぢや百ぢやと百
で買うた牛が、上り引きゆすする。上り曳きゆすれやー
お前も大事、我も身の耻。

（甲奴郡）

○三拜の、ひるまの御料に召しつらう、召しつらう、黃金
の五本柱、白銀の。
○白銀の御膳をしたて誰參る、誰參る。まづ三拜にまゐら
する。
御酒カ
○白銀の家具とりなほしみぎもれば、みぎもれば、みぎも
る殿に參らする。
○御料三つ四つわればさいは九つなう、それもるまーにの、
八千代
やちよもへつる。
○御料たべてははなう、おびはたもらいで。

○我殿は船乘り出して沖中に、沖中に、沖うつ浪にゆらさ
れる。
○我殿は沖うつ浪にゆらされて、何をする、何をする。三
拜樣の鯛を釣る。
○我殿のつりたる鯛は何にする、何にする。三拜樣の掛鯛
よ。
○昨日からけふ迄かけしかけ鯛は、掛け鯛は、切りはやさ
れる俎板に。
○俎板に切りもの看誰參る、誰參る。まづ三拜に參らする。
○三拜に供へし殘りたれまゐる。誰まゐる。それこそ田主
に參らする。
○俎板に俎鉢に手には庖丁持ちてなう、手に庖刀持ちてな
う、ヤ切るが祝ひ。
○ひるまの上の、ヤレいづみすーみ酒　う。すみ酒にこそ
なう、ヤおいはたもれ。
○ひるまを參らせた三拜の神よなう。とのはしらおりてた
もれ、三拜の。
○ひるまの峠で笠を忘れたよなう。笠もよい笠化粧笠よ。

○沖の田の三本苗のゆつり穗は、ゆつり穗はそれこそ此田
の稻柱。
○稻柱町すまゝ〳〵に榮ゆれば、榮ゆれば、それでは盡きせ
ぬ、いなばしら。
○盡きせずばじつの倉におきあまる、おき餘る、それこそ
田主の祝ひなり。
○祝ひには田をこそ植ゑて見る心、見る心、一本植ゑて千
本も。
○三拜の代かく駒がなんぼ居る、なんぼ居る。白黑まだら
が千疋よ。
○千疋にきせたる小鞍何小ぐら、何小ぐら。白銀こがねの
はぎ小鞍。
○千疋を追ひならべては何とかく、何とかく。隅から隅ま
でこまやかに。
○三拜のしろかく駒を横引かば、横引かば横引き戻す、し
なやかに。
○さつきにはの、小菅をすけんのー笠をばかたむけて、かたむ
けて、見れどんなう、鳴かのがほとゝぎす。

○白銀やの、こがねの、こえんに腰かけて、腰かけて、どなたんの殿やら腰かけて。
○十五夜の月樣そらに舞ひござる、舞ひござる。十二のえとの輪の中に。
○十五夜の月よりも我が心こそなう、三夜にさいたよ我が心。
○梅の木の下でこそ鞠をとんと蹴たらば、梅はばらぐ〜落ちるなり、まりはそらに。
○さ月の早少女は梅をくふかい、くはんかい。梅はすゆて齒がうくよ。桃はにがい。
○大山の宮本沖に立つ菅は、立つすけは、早少女笠に刈りたまへ。
○大山のふもとの茶屋で賣る笠は、賣る笠は、早少女笠にぬひたまへ。
○早少女たちにきせるとて、大仙笠をなう、買ひやくだいた、大山の。
○大山笠には綾の緒をいれてなう、綾の緒をいれて京へ登る。

○笠の緒の八つ打ちや、われが殿に參らせう。
○笠のしづくが手にとほど溜らば、どこのさいやら手にとほど。
○上手な早少女が笠の端をそろへた、丹後但馬田處で笠のはを。
○田には立つとも田笠にきまいなう。田笠にきまい者よ、綾のをを。
○白い菅の玉結びや笠からにこそなう、袖もひかれうや笠からに。
○我殿は荒山打ちて何をする。何をする、麻蒔く畑をうち開く。
○十七が手に鍬持ちてどこに行く、どこに行く、麻まく畑をなるめ行く。
○十七が麻まく畑をなるめては、なるめては、なるめておいてがんぎ（麻蒔く畦）きる。
○十七がなるめた畑のがんぎきる、がんぎきる。日がらをあらため麻をまく。
○十七が麻蒔く頃はいつ頃か、いつ頃か、三月土用の中頃よ。
○十七が小裙をとりてどこに行く。どこに行く、まいたる麻を間引き行く。
○十七がまぶいた麻の出來立ちは、できたちは、さても色よい出來立ちよ。
○十七が麻刈る頃はいつ頃か。六月土用の中頃よ。
○十七が手に鎌持ちて何を刈る、何を刈る。出來たる麻を刈りに行く。
○十七がそいだる竹で何をする、何をする。刈りたる麻の葉をてづる。
○十七がかりたる麻の葉をそぐは、葉をそぐは、紫竹の小竹を手にもちて。
○十七が石釜築いて何をする、何をする。かりたる麻を蒸します。
○十七がうむした麻をどこで干す、どこで干す。刈りたる畑に立てゝ干す。
○十七が手に鍬もちて川ざらへ、川ざらへ、川を渫へて麻をかす。

○上をせき、下をせき、堰きは留めれどもなう、水の心は下へ行くよ。
○十七がかしたる麻をはぐ時は、はぐ時は。
○十七が剝いだる麻をどこで干す、どこで干す、紫竹の小竹にかけて干す。
○十七が釜ぬり据ゑて何を煮る、何を煮る。八つ細布の麻をにる。
○十七が苧をこぐ川はどこ川か、どこ川か。前なる川の中の瀬に。
○十七が扱ひだる麻にのし入れて、のし入れて、日干にならいでかけ干しに。
○愛らしやおごうらが苧をこぐ手元は、上に向いてぞーろりや、下へ向いちやー。
○十七が桶とりだして何をする、何をする。八つ細布のたてをうむ。
○十七が車にすがりて何をする、何をする。八つほそ布のたてつむぐ。
○十七が八つほそ布をどこで織る、どこで織る前なる長屋

で織りたまふ。
○うんだり紡いだり、十二よめへ入れてなう、十二よめへ入れてのー、ヤ殿に著せう。
○くだ卷き上手は天女のひめごなう、絲をしらべてきりゝと。
○乙嫁や乙嫁や、くだまけ乙嫁ー、乙嫁がまいたくだーさいがはしる。
○前なる長屋にはた音がするよなう、長者の乙ひめのはた音が。
○十七が八つ細布をおる時は、おる時は、花のすがたをよりかけて。
○十七がおりたる布をさらすには、晒すには、前なる川の中河原。
○織つたり晒いたり好んだり、殿原。好んだら、殿原のはだにめすよ。
○染める帷子の御紋は何かなう、若荷の御紋にやよー菊よ。
○皐月のかたびらを染め干いたよなう、そんけの花色に、染め干いたよ。

○奥山に今鳴る音は何のおと、何のおと。瀧からおちる水の音。
○我殿のでたちを見れば窪笠で、くほがさで、さもしなやかなくほ笠で。
○我殿は馬のりずきで馬にのる、馬にのる。お馬の上で眠りする。
○我殿が馬のりかけて行く時は、行く時は、きりもかすみも晴れて行く。
○正月にさもにぎやかなしめかざり、しめかざり、門にはかど松しめかざり。
○二月には若水迎へて種をかす、種をかす。まづ早やけさの朝ぎりに。
○三月に吉野の里を眺むれば、千本櫻が咲きこだれ。
○四月には前なる畷ながむれば、ながむれば、やさしき螢が火をともす。
○五月には御門を開き田を植ゑる、田を植ゑる。秋なる氣色を待つばかり。
○六月に奥山見れば雪とけて、雪とけて、小谷小川の水となる。
○七月に前なる窪をながむれば、ながむれば、五穀にみのりてゆらゝゝと。
○八月に千町が窪に鎌入れて、かまいれて、諸國の神に穂がけする。
○九月には奥山見れば鹿がなく、鹿がなく。もみぢふみわけ鹿がなく。
○十月に出雲のくにが賑やかな、賑やかな、諸國の神が集まりて。
○霜月に奥山見れば雪がふる、雪がふる。小谷小山に雪つもる。
○極月はさて此月は乙の月、乙の月、春くるけしきをまつばかり。
○上方の扇子屋町の扇子屋に、あふぎ屋に、千駄の竹を買ひよせる。
○あふぎ屋に千駄の竹を何にする、何にする。あれこそ扇子の骨にする。
○あふぎ屋の扇子の骨の元揃へ、元揃へ、元をそろへて要打つ。
○扇子の骨は五十七つけづり出てなう、八つけづり出てのー、ヤ要いれう。
○八つけづりでゝなう、要かためうーよの。
○扇子屋に扇子に張る紙は何紙か、何がみか。布地の紙に繪をかいて。
○扇子屋に扇子に繪をかく。何繪かく、何繪かく。熊谷次郎を繪にかいて。
○扇子に要なう、さし傘にろくろよ。
○扇子折の先生が、迷うたよ、先生が。
○扇子を折つてたとんで、腰にさいてのゆーさんよ。
○壁ごしに扇子をなけたが屆いたか、屆いたか。折目ゝゝが戀のふみ。
○鶯が生れし藪にすまいでは、住まいでは。あれほど廣い野の山に。
○鶯が春日南山のひな平に、日南平に、くる春ごてにほけきやうよむ。
○鶯の初聲と春は來たれどもなう、なづかしうーて又來た

よ、春も來たよ。

○皐月の五月少女と春の鶯はなう、渡らぬ里もないよ、春のうぐひす。

○鶯が梅なる小枝にひる寢して、ひるねして、花の散るのを夢にみる。

○鶯が小竹のをかに巣をかけて、巣をかけて、十二の玉子うみそろへ。

○鶯が十二の卵生みそろへ、かひそだて、かひそだて、世の中よかれと三羽さえづる。

○鶯がお庭の松ではね休め、はね休め、沖はるばると羽休め。

○そよ一〳〵ふく風は、竹の林こそなう、なびかして通り候、竹の林。

○唐紙障子を紙戸に明けてなう、よい殿招こや、細戸に。

○お方何ゆーすれや障子の影でなう。化粧やけはひしやーる、障子の。

○晝寢はせうーぞなう、殿がそろと來うぞや。

○殿がそろとござらば、障子そろり立てうーや。

○猶もそろとござらば、契り深い殿やれ。

○今日の田の田主の舘何造り、何造り、八つ棟造りにひはだぶき。

○今日の田の田主のやかたひはだぶき、ひはだぶき、そらをばひはだのしぶきに。

○今日の田の田主の御門眺むれば、ながむれば、黑戸の御門を押し立てる。

○押し立て、据ゑたる土臺何土臺、何どだい。栗の木どだいを組合せ。

○組合せ立てたる柱何ばしら、何ばしら。欅の柱を押し立て、。

○押し立て、掛けたる桁は何桁か、何桁か。唐から渡りた唐松よ。

○押したて、掛けたる梁は何梁か、何梁か。唐から渡りた楠よ。

○押し立て、掛けたる垂木何だるき、何だるき。黃金のたるきを打ちそろへ。

○今日の田の田主の樣が袴着て、袴着て、大小さいて宮めぐり。

○今日の田の田主の子息どれなれば、どれなれば。京帷子に編笠よ。

○今日の田の田主のひめごどれなれば、どれなれば。錦の守り綾のふり袖。

○今日の田の田主のお庭眺むれば、ながむれば、牡丹芍藥百合の花。

○今日の田の田主のお庭に接木ある、つぎ木ある。梅の木臺に八重櫻。

○今日の田の田主のお庭の泉水に、泉水に、鯉鮒金魚が舞ひ遊ぶ。

○今日の田の田主のお庭の石垣は、石垣は、どこなる石屋がとりたやら。

○今日の田の田主の樣が御酒まゐる、御酒まゐる、長柄の銚子で御酒參る。

○今日の田主の御神殿を見たらば、こがね垂木にひはだのしよ。

○今日の田主がたがさおひ出てなう、田笠にぎまいものよ、綾の緒を。

○今日の田主のせどに花の咲いたのは、ゑの花さきの花さきやーとくよ。

○新傘に角の紋はどのしゆでござるなう。どのしゆーでござるやら田主で。

○長柄の傘を誰がさいて通るなう。田主のともがらがさいて通る。

○狹い小路に傘はさし樣がござるなう。さし上げて、さいづればさし樣が。

○今日の田主のお庭の櫻は、こがね花がさくよお庭に。

○おなり樣どこまで送る、峠山へ、峠山へ、なさけのためとて峠山へ。

○峠の山へ、おーくりつけた。

○峠山は主ある山か。主なくば、主なくば、山もりつけて我山よ。

○都登る商人のなるてが見たいなう。錦のおみや樣、なるてが。

○京へ登る、のぼるとて、京で何を習うた。一に笛二には

太鼓三にさゝら。

○京へ登るよい女房。誰もほしの、よい女房。

○京に立つたる御堂は、三十三間の御堂よ。

○三十三間の御堂は、中の間が廣いよ。

○弓と矢を肩にかけ、京の御所へ出てなう、よい知行招こや、京の御所へ。

○橘を袖に出て、京の御所へ出てのー、よい殿招こや、京の御所へ。

○弓はたもりたが、しなをば何よ、習ひえた者、しなをば。

○矢はぎどのは上手ぢやよ。はぎ合せてなう、白い羽に黒い羽をはぎ合せ。

○我戀は十方ぐれの八重のそら、八重のそら、きりも霞もはれ行かぬ。

○我戀はつゞらの底の丸鏡、丸かゞみ、たれとり上げて見る人も。

○我戀は寢ござの下のさゝ結び、さゝ結び、たれとり上げてさとらばや。

○我戀は深山のおくのほとゝぎす、ほとゝぎす、人目もしらずに、鳴きくらす。

○我戀は細谷川の丸木ばし、丸木ばし、ふみかやされて袖ぬらす。

○昨日から今日まで吹くは何風か、何風か。戀風なればしなやかに。

○戀をして七郷八さとめぐれども、めぐれども、あはぬは妻の習なり。

○紅は今花盛りうすほけて、うすほけて、摘もにやつまれぬ花ざかり。

○紅を青葉にこめて刻めども、刻めども、色よい花であらはれる。

○鳴くせみを袂に入れてかくせども、かくせども、生ある蟲であらはれる。

○判官樣はどちへなんなう、問はば東への、東への、東んのーひめごにさそはれて。

○判官樣たちやてりはの寺へなう、おんよりなされる、てりはの。

○判官樣の召し馬を梶原が望んだ。望んだも道理ぢやよ、名馬なら。

○判官樣は東下る。笈は何につゝんだ。錦の油團掛けにかの子皮よ。

○よい馬に、よい鞍に、しりがひに金物、乘りながら見參せうや。さいの太郎。

○名馬の駒にや、綾の手綱よりかけうー。

○秋三月穗の上てらす稻妻が、稻妻が五穀の種の實をうらす。

○十七が前田に下りて何を刈る、何を刈る。實りた稻を刈り上げる。

○十七が刈りたる、稻をどこで干す、どこで干す。五反のはでにかけて干す。

○十七が干したる稻を何で扱ぐ、何でこぐ。矢の箭竹でこぎたまふ。

○十七がこいたる籾をひく臼は、挽く臼は、齒びろの臼でひきたまふ。

○十七が挽いたる籾をさびるには、さびるには、紫檀の唐箕でさびたまふ。

○十七がさびたる米を斗るには、はかるには、出雲の國の手なづちよ。

○十七がはかりた、米がなんほある、なんほある。はかりた米が千俵ある。

○十七が馬おひかけてどこに行く、どこに行く。きづきの町へ送りだす。

○きづきには千俵の米を何にする、何にする。諸國の神の神酒造る。

○神酒として殘りし酒は何にする、何にする。それこそ田主に參らする。

○ごんざれ、參ろや、八幡の宮へなう。物の名所は八幡よ。

○此村の氏神樣は何神か、何神か。正八幡が氏神よ。

○八幡には白旗たてゝ、何をする、何をする。正八幡の神儀する。

○八幡には立てたる白旗どこ降り、どこ降り。天から下りた白旗よ。

○八幡から目かけをさして沖見れば、沖見れば、諸國の船が目の下に。

○八幡には馬乘り馬場が賑やかな、賑やかな、諸國の大名が集まりて。
○我殿は八幡の馬場で大鼓打つ、大鼓打つ。諸國の大名の陣大鼓。
○八幡山の御開帳につる卷き落いた。弦卷ばかりかよ、しかも、大刀を。打
○大鼓打ち、うーちーやけの袂まだ縫はぬ、まだぬはぬ。上
思ひの儘に縫うて著せう。
○大鼓のばいはのー、しほをさいたよなう。
○大事なさゝらを天井に上げてなう、すんすらかいたよ、天井で。
○京ざゝらをんば、えさーさするまーよなう。
○京の町へ立ちては、白い鼓七から。
○七からの鼓を買うて來いとの、おつしやつた。
○買うて來たるつゞみにや、綾のしらべよりかけう。
○ばんじやう手鼓はしめれば、腰よなう、お急ぎそろぞや、しめれば。
○十郎らや五郎らが住居處にをなう、矢立の宿にこそ住居處。
○大磯の虎御前が戀に沈んだよなう。十郎參らせうや。戀のまぐさ。
○馬子どの、馬子どの。駒はどこへつないだ。うねを越し谷を越し、下り松へ。
○船頭殿〳〵。船はどこへつないだ。磯を越し浪を越し、沖の島へ。
○天からふつたか地から生えたか。見たか聞いたか、推量か。見もせんよ、聞きもせんよ、只推量。
○山田を作れば、おもしろい者よなう。狸大鼓を打ちや又鹿は笛と。
○深い田のねばい田で、鎌を落いたよなう。かいくりくり上げて、とらいでは。
○向ひなるくずの葉はなじよの風にもまれた。太郎らにもまれたよ、聲にもまれ。
○太郎らは田作らず、我は布織らずのー。似合うたる女夫かやなう。ヤ太郎。
○太郎らが小花見はせん香山よなう。梅もたちきるせんか

ーや。
○向ひなる笹原は誰のしゆーでん作りか。やよはたなけらねど、さーもねが。
○源氏ではいくさの大將誰樣か、誰樣か。兄賴朝が旗頭。
○賴朝が八島を目的に船をはぐ、船をはぐ。千石船を七艘はぐ。
○賴朝がめしたる駒は何駒か、何駒か。鬼鹿毛駒にめして居る。
○賴朝がめしたるかぶと何かぶと、何兜。黃金の兜に龍頭。
○賴朝がめしたるよろひ何鎧、何鎧。をどし鎧をめして居る。
○賴朝が手に持つ者は何と何、何と何。重籐弓に矢を添へて。
○賴朝の張りたる弓は何のつる、何のつる。日本に居らぬ虎の筋。
○賴朝の手柄は、平家の首う討ちとつた。
○賴朝が鬼鹿毛駒に飛びのりて行く時は、行く時は、平家の大將も討ちとられ。
○我が殿の刀は、三條小鍛冶鍛倉。
○鎌倉とは思ふな。さうではないぞや殿原。
○さいてきしめく船頭が刀は、舟の纜つく、船頭が。
○峠のは山に伏したる鹿はなう、鹿の子をよぶには、高い山の間で、かいうごろりぐ〳〵と、よべやー鹿もよりそろ。
○前に大川なけらにやー。そり橋ゆーおといた。
○そりはしのそりやうは、大工からか、木からか。
○そりはしの上でなう、ちごがふみーおといた。
○せいこ〳〵、前の川のせいこ。
○どんどになるはなう、前の川のせの音。
○大川に金輪を据ゑて火を焚かば、火をたかば、浪うちかけて、燃ゑもせぬ。
○長い髪ししやくにわけて、大川を、大川を汲み干す程に思へども。
○長い髪には手ぐしを入れてなう、なけかけてとく手ぐしを。
○今朝程に迎へた神を送るには、白菅笠を手に持ちて。
○手に持ちて送りし神はどの宮へ、どの宮へ。五社ある宮の中の宮。

○中の宮御幸なさるにぎやかな、賑やかな、なりもの揃へでにぎやかな。
○舞うたりまはいたり獅子は舞うたりなう。西の宮にこそし、は舞ふよ。
○山寺の小僧たちや紙がなうてこそなう、木の葉に文をかいた、紙がなうて。
○ほふけ經と手本は、硯筆が所望でな。
○日暮には西山見れば賑やかな、にぎやかな、日輪樣の舞ひござる。
○日暮には濱邊を通れば千鳥なく、千鳥なく。なをなけ千鳥、聲くらし。
○日暮には鶴さへ三羽西に行く、西へ行く。西には池があるちややら。
○日暮の雀が數ろをねらふなう。とまりかけんやらやぶろを。
○日がくれれや坊主が、かねをごんとつくよなう。
○日がくれれや賃とりが、笠のはをさはるよ。
○今日の田ともだちや、なぐれ名殘をしや友達、洗ひ川にこそ文はまゐる。
○洗川のよしの根は、しけう流れかしなう、あうてなりと、物いはうや、しけう流れ。
○一日の契りをこめしどなたにも、どなたにも、暮れゝば別れる習ひなり。
○朝起きて、ならしにならす聲ならす、聲ならす。ならさぬ聲は寢聲なり。
○朝起きて細戸を明けて見渡せば、見渡せば、こがねに勝るあさひさす。
○朝日さす夕日にもどすその本に、その本に、ぜに金七つ朱金九つ。
○小鳥が又夜を込めて西に行く、西に行く。西には妻があるちややら。
○朝まの小鳥が露にそぼれ出てなう、うら〳〵と鳴いて通る、露にしよぼれ。
○朝起きて暦を出して日を見れば、日を見れば今日天赦日萬よし。
○朝まの程はなう、珍らしき者よの。

○慇しくば尋ねてござれ、天竺へ、天竺へ。高天の原で聲がする。
○天竺の高天が原で聲がする、聲がする、田の神樣の聲がする。
○田の神の父子と問へば誰樣か、誰樣か。大元樣が父子なり。
○田の神の母子ととへば誰樣か、誰樣か。龍沙が川の大蛇なり。
○田の神の緣組なさる、どこでする、どこでする。高天が原で御えんぐみ。
○田の神のえんぐみなさる杯は、杯は、白木の三寶に土器よ。
○田の神のえんぐみなさるお肴は、お肴は、津の國鯛を絲作り。
○田の神のたなりし月は幾月か、幾月か。正月三日の注連の內。
○田の神の生れし月はなんほ月、なんほ月。十月となれば生れくる。
○田の神の育ちはどこか陸の國、陸の國、熱田の宮が御產どころ。
○生れ來て引きあけおばは誰樣か、誰樣か。龍宮樣の初の姫。
○生れ來てうぶ湯の清水どこ清水、どこ清水。大和の國の岩清水。
○岩清水汲みとる柄杓何びしやく、何びしやく。飛驒が匠のわけびしやく。
○岩清水汲取るかけは何がけか、何がけか。楠の木ぐれに八つの籬よ。
○八つの籬にかけたる桶屋どこ桶や、どこ桶屋。大和の國の桶屋なり。
○八つの籬にかけたる竹はどこ竹か。津の國竹を八つの籬に。
○生れ來て產湯の盥何だらひ、何だらひ。白金こがねのはぎたらひ。
○生れ來て產湯をわかす何はがま、何はがま。こがねの羽釜を塗りする。る。

○田の神の乳付のおばは誰樣か、どれ樣か。龍宮樣の乙の媛。

○田の神の此世へござるいつござる、いつござる。正月三日のしめの內。

○田の神の此の世へござる乘馬は、のり馬は、あけ三歲のかけの駒。

○田の神ののりたる駒はどこつなぐ、どこつなぐ。丹波の國の笹山へ。

○田の神の此世へござる中宿は、中宿は、富士のお山が中宿よ。

○朝程に田の神樣を卸すには、卸すには、白菅笠を手に持ちて。

○手に持ちて紅扇子さしあけて、さし上けて、三把の苗を手に持ちて。

○田の神を今こそ卸すおりたまへ、おり給へ、三隅の窪のくぼ隅に。

○田の神は今こそござれ、宮の上、〳〵、今年の稻の種卸し。

○正德神よなう、おりさせ給やれ。

○朝霧にまひこめられし小雄鹿が、さをしかが行きはかなうて空を見る。

○朝ぎりは山へ入れ、きりははれ、山へ入れ。

○きりはれてはなう、休め五月少女よ。

○新玉の種さびはじめどちに向く、どちにむく。あき方に向いて種さびる。

○出雲なる黑田の池の池ざらへ、池ざらへ、池ざらへて種をかす。

○新王の年若水を田にあて、田にあて、、蒔かばやけさの朝ぎりに。

○朝ぎりにまいたる種はどこに立つ、どこに立つ。黑田の沖のさこに立つ。

○苗代の隅をめぐる水はかゞみこそなう、思ふ殿子の影見れば、水は鏡。

○苗代の柳かや木を揃へ出るー、枝に、枝がさくよ、木を揃へ。

○苗代の隅々に立つ木は何かなう。何の木は椋の木や、五葉の松よ。

○蒔いたる種には何程出來るなう。何程出來るやら、千石程よ。

○苗手藥を肩にかけ、どの苗を取らうなう。どーの苗を取らうやら、沖の三斗。

○沖の五反田と前の四反田はなう、よみ合せてなう、ヤ丁度九反。

○ほとり苗（苗代べりに在る長き苗）をようにとれ。ほとり苗にこそなう、千石の米がなる、ほとり苗に。

○千石出來る米を又どの倉に積まうなう、東向きの倉にこそけに積まう。

○けさの殿の朝がりに、その卷ゆー落いた。その卷ばかりかよ、たたう紙を。

○けさの殿の大はんにや、吉野山へ迷うた。

○朝まの程はなう、珍らしき者よなう。

○米子からまかけをさしてそら見れば、そら見れば、ほのかに見える、大山が。

○我殿は大山登るしたくする、したくする。白菅笠を買ひよせう。

○大山のお山へ登るいつのぼる、何時登る。朝垢離とりて今朝のぼる。

○大山の麓の茶屋で道問へば、道とへば、麓の茶屋から三里ある。

○大山の本社の前に鳥居立つ、鳥居たつ。白銀こがねの鳥居たつ。

○大山の下山樣は何神か、何神か。諸國の牛馬の守り神。

○大山の下山樣の玉垣へ、玉垣へ、こがねの蔦が舞ひ上る。

○大山の下山ふもとの粽笹は、まき笹は、諸國の牛馬の護符のさゝ。

○大山の下山樣を拜むには、拜むには、榊の柴を手に持ちて。

○大山のまはれば槇の葉の數は、葉の數は、七千三百八葉ござる。

○大山のおみせん箱に何がある、何がある。八萬八聲の歌がある。

○大山のうね九つのそねの松、そーねの松、それこそ米子へかけをさす。

○大山のうね九つを吹きあらす、吹きあらす。それでは米子が寒からう。
○大山の赤松池にふしぎある、ふしぎある。晩には火燈を吹き上げう。
○大山の七谷八谷出る清水、出る清水、しみづでなうて出雲酒。
○大山の本社の前でちごが舞ふ、ちごが舞ふ。十七八なちごが舞ふ。
○大山坂本のこならの葉をんば。折りかけにせうや、こならの。
○大山のお山は寒かろぞーよなう、袷の小袖も着てよかろ。
○大山お山はかんがみ山よなう。かんがみ山やら、くもれば。
○大山よりもなう、西のくもりよなう。
○大山やまの櫻かや、見事にさくよなう。見事にさくよ、又八重の花が。
○大山やまの櫻は、世にやーない櫻よ。
○我殿は鞍馬の山へ年參り、年參り、くらまの御福を取りてもどる。
○我殿はくらまへ參る。けさ下向、けさ下向、御福をたもりて今朝下向。
○くらまのお山の毘沙門天はのー、御福をさづけるびしやもんよ。
○御福はたもうたよ、倉はどこへ立てうか。どこに立てうやら、倉をば。
○倉は立てたよ。倉はじめには、米を積まうや、み倉はじめ。
○倉は立てたよ。倉のかぎはどーかなう。倉のかぎは渡したよ、田主樣へ。
○白銀の京のばんを倉の奥になほいた。嫁がなほいたよ、倉のおくへ。
○白き雀が白い米をくはえて、みくらに一寸入れうや、倉のおくへ。
○賑やかな音がする。おれやー何の音かなう。ゑべす大黑俵まくる其音よ。
○大黑はせい小さけれど倉の主、倉の主、俵をふまへて、

倉の主。
○池の上の七浦で、かや刈り居ればなう、ぞんぞと波が立つ、かやーかれやー。
○朝外にわやかに萱刈りに出てなう、萱刈りに出てなう、ヤ倉のせどへ。
○石菖蒲に駒艸、ちまき萱をかりおけ。
○山川に咲きこだれたる藤の花、藤の花、瀬にゆらされて、ゆら〳〵と。
○戀しくば尋ねてござれ米子まで、米子まで、米子の町のまん中へ。
○おなり（飯を炊く女）樣どこから迎へる。米子から、米子から、米子の町の米屋から。
○おなり樣門迄かごで門からは、門からは、門からおちて徒歩でくる。
○椽に腰をかけてなう、あいさつなさるよー。
○おなり樣手にかぎ持ちてどの倉へ、どの倉へ、白米倉の戸をひらく。
○おなり樣白米倉の戸をあけて、戸をあけて、ひるま（朝飯）の米をはかり出す。
○おなり樣茜のたすきで何をする、何をする。ひるまの米をとぎ上げる。
○心なしの小おなりがひるまするところは、ひるまはしてえたよ、米こぼれ。
○ひるま米をとぐには、やしほぞめのたすきで。
○ひるま米を搗くは、ヤレ、十二からうすでなう、嫁子樣も出ておじやれ、十二からへ。
○ひるま米をさぴるやら、箕の腰に出てなう、さんざとさぴるやら、箕のこしへ。
○我れが殿はさづきなだへ和布かりに出られた。殿子樣のおいでなら、我もついて。
○ひるまは出來たぞ。箸をけづれがしなう、がらり〳〵とはしをけづれ。
○ひるまは出來たぞ。急げ五月少女なう。
○ひるまはできたが、何がお汁ものよなう。磯の和布刈りに出て、それがお汁。
○舟人が千石船に八帆かけて、八ほかけて、梶とり直し、

風をまつ。

○ひるまは出來たが、沖の舟はどーかなう。帆柱おし立て、、風をまつよ。

○此の世では、ヤーハレ、時打つものは、何が打つ、ヤハレ、何が打つ、ヤハレ、何が打つ。ヤハレ、若狹の國のかしは鳥。

○我が殿は戰に出られてどの國に、八島の浦に御座るなり。

○順禮の育ちを問へば阿波の國、德島城下の育ちなり。

○鎌倉の、御座堂が庭に八重櫻、京九重の八重櫻。

○櫻花一枝折らうと思へども、枝遠ければ折りやせん。

○我が殿は、吾妻の山へおのぼりで、足毛の駒に乘り上る。

○商人はどこ商人か。珍らしや、京なる染のかたびらよ。

○伊勢參宮上方道を、おもいかば、松に榊をうゑまぜて。

○田の神に御酒をあげます、歌がいる、八萬八聲の歌がいる。

○一月、改むる正月始めに床はじめ、門松おこいて注連を張る。

○二月、二月四方山見れば、かすみくる、かすみをわたる時の鳥。

○三月、三月げんざの奥の花盛り、初音をひらく鶯。

○四月、四月おしやか樣の誕生つて花見堂中にをられる、おしやかさま。

○五月、五月侍屋敷に幟が立つ、十郎駒にととびのりて。

○六月、六月都の祇園のお神儀が、にぎやかで、音樂そろへて賑やかな。

○七月、七月七夕樣の川渡り、おわたりなされた、いとほしや。

○八月、八月石山寺が賑やかな、ありがたい千部のお經が讀まれたり。

○九月、九月諸國の神の御祭で、菊酒飲んで祝ひます。

○十月、十月諸國の一神がをられんと思へども、出雲の國へ集りて。

○十一月、しもつき出雲の國へ年參り、御酒に穀を手に持ちて。

○十二月、しはすには前なる山が白なりて、朝日でとける富士の山。

○天竺の、ヤーハレヤ、高天原に、神あらば、ヤーハレヤ〳〵、神あらば、ヤーハレ、田の神樣が父ごなり。

○(出し句)大山の、ヤンハレナー、山に登る、何時のぼる、ヤンハレ、いつのぼる。ヤーハレ、(つけ句)あーさごりゆとーりて、けーさのーぼる。

○(出し)さんばいの生れし月は何んぼ月何んぼ月。(つけ)十月になるをり生れくる。

○(出し)大山の下山見れば、何神か〳〵。(つけ)諸國の牛馬の祭り神。

○(出し)朝起きてさんばいの神をおろすには〳〵、(つけ)さんばいの苗を手にもちて。

○(出し)朝起きて前田におりて聲ならす〳〵、(つけ)聲ならす。ならさぬ聲はね聲なり。

○(出し)朝うたはようたへ。朝うたにこーそなう、(つけ)こーゑもようでる、朝うたにや。

○(出し)あふぎをりの先生が迷うたが、先生よ。(つけ)あふぎう折つてたとんで、腰にさしたらゆるさぬよ。

○(出し)翁が孫をまうけた。(つけ)それをついでに腰をせい。

○(出し)ヤーレ清盛や音戸が瀨戸をきーりぬく、(つけ)きーりぬく、音戸が瀨戸を。

○(出し)敦盛や十六歲で討たれた、(つけ)十六歲で。

○(出し)玉織や十四でとのに離れた、(つけ)十四でとーのに。

○(出し)麻をば六月土用に刈りとる、(つけ)刈りとる、六月土用に。

○(出し)麻をば彼岸頃に蒔くもの、(つけ)蒔くもの、彼岸頃に。

○(出し)大工がのみとかんなを忘れた、(つけ)のみとかんなを。

○にーはとーりは、ヤーハレー、わーかさーのくーにの、うーたのすけ、ヤーハレー、うーたのすけ、ヤーハレ、(下歌)ヤーハレ、うーたのーすけ、ヤーハレ、しよこくーのひーとのめーをさます。

○鷄は、はりまの國で、夜をはかる、(下)夜をはかる、夜もすご〳〵と夜をはかる。

○鶏は十二の卵を、うみそろへ、かへそろへ、(下)かへそろへ、諸國たからをかきよせる。
○けさうたうた、雞は、よく歌うた鶏よな。(下)此國千石と、ようたうたう鶏よ。
○巣鳥がまだ夜も明けぬそのうちに、(下)其のうちに、こゑはら〳〵とないて立つ。
○巣鳥が巣を立つときは、なんと立つ、(下)何と立つ。廣瀬がおきに餌ひらひに。
○今朝通る小鳥が、露にしよほぬれて、(下)うら〳〵とないて通る、露にしよほぬれ。
○あさおきて、ならしにならす、何ならす、(下)なにならす。ならさんこゑはねごゑなり。
○今日の日は十方ぐれの、春のせつはなう、(下)きりもかすみもはれやまの。
○いせの國、あさまの山のあさぎりに、(下)あさぎりに、子をよぶ鹿の聲がする。
○わがとのは鞍馬の山へ、月參り、いつもどる。(下)今もどる、御福をたまりて今もどる。

○御福はたもりたが、藏ーたてうもののやの。(下)どこへたてうやら、くらをば。
○萱かりは、富士のもとで刈りをる、(下)かーりをる、富士のもとで。
○いけの上のなならで、かや刈りをればなう、(下)ざんざんと、波がたつよ萱刈れば。
○奥山の萱刈りは、昨日がりか、今日がりか。(下)きのふがりは、しのばえる、ただ今日がり。
○あんさほこ、にはひ五十、かやかりにでての、(下)かやかりにでゝきた、くらのひたひ。
○米子から、まかけをさして、うねみれば、(下)うねみれば、ほのかに見ゆるだいせんの。
○だいせんのお山にのぼる、かどいれに、(下)かどいれに、あさごーりとれと、うめがはで。
○大山の地藏の前のはねつるべ、(下)はねつるべ、水くみあげてこりをとる。
○大山のおとは水に、ゆらされて、(下)ゆらされ、わが身きよめる水なれば。

○大山おにはにあるは花擱へ、(下)はなぞろへ、千本櫻を植ゑまぜて。
○大山のさくらかや、みごとに咲いたなう、(下)みごとにさくよ、また八重に、花が。
○大山さまのごほんぞん、ごしよらは、檜皮葺、(下)檜皮葺こんがねたるきに、ぜにすだれ。
○大山の本社の前で神遊び、(下)かみあそび、注連はりまはしそのなかで。
○大山のたからの松は、どの松かの。(下)ごえふなる松が、寶松。
○大山の七たに八そねふきあらす、(下)ふきあらす、さぞや米子もさぶからう。
○大山お山はさむかろものやなう、(下)袷の小袖もさむからう。
○たにだにおろすかぜはふきぬく、(下)ふきぬく、おろすかぜは。

(比婆郡)

○早少女さんよ三把の苗を取りおけ。一把はさんばい樣に供むけさせう。一つは大工(音頭取)さまに向けさせう。一つは田のし樣に向けさせう。
○お方が取りこむ苗は、いせいな。
○苗代のすまを廻る水をば、苗代の水は鏡なるもの。鏡で思ふ殿の影を見る。
○苗を取れや、いなごはどこに追ひやる。いなごはしみせんの山に追ひやる。のぼりてさか木の枝に止まりた。
○としとこ三月からは田の神。田の神三拜神を祭らせう。
○此の田にさんばい神をおろさせう。
○さんばいの夕なる月はいつやら。夕なるは小なる月の始めよ。
○さんばいは幾月ぶりに生れる。さんばいは十月ぶりに生れる。
○さんばいの産湯の水はどこ水。水には大山やまの清水よ。
○さんばいの産湯の鹽は何やら。鹽は楠ぐれのやつわよ。
○さんばいの産湯の杓ば何やら。杓には金と銀とのはりわけ。
○さんばいの名づけの親はだれやら。おばには七夕樣がた

、れた。

○さんばいのてゝごに立つはだれやら。たかまが原のかみ鳴なりなり。

○さんばいの母御に立つ　はだれやら。りゆうしやが池の主ぬしなり。

○田植におなり（飯た き）を雇ひおくもの。

○おなりはどこの國にをるやら。

○おなりは米子の里でやとうた。

○おなりは門までかごでむかへた。おなりは門からかちで入りこむ。

○おなりはかひき前垂もし緒。

○おかたが座敷をかりに出られた。

○座敷が千疊敷を借られた。

○疊は錦べりの疊よ。

○ひるまに米を千石をたき置け。

○できたらお膳するや、上から。

○するたら、おはじめなされ、上から。

○まるらば、おつけかへや、上から。（以上中食前）

○都にすゞみ廊下がたつけな。廊下は町の中に建てさせう。

○用木にや、どこの山の木をきる。用木は尾張山の楠。

○日もよし、らうか用木の切りぞめ。

○木挽が尾張山で木をきる。木挽が廊下用木をつまゐた。

○木挽が廊下用木に墨をする。木挽が廊下用木にやそまをする。

○木挽が廊下用木をそろへた。用木は千夫かけてよせさせう。

○都にや廊下用木をもとめた。らうかはどこの大工に建てさせう。

○廊下は都大工にや建てさせう。都にやどれがばんじょの上手。しろい殿が手上手、棟梁はは跨くまたてゝ今來た。

○廊下はから木建てか、木だてか。廊下は檜皮ののしぶき。

○廊下のすだれ竹はどこ竹。廊下のすだれ竹はからだけ。

○おかたがすだれ竹のわしうつ。廊下は涼みよいかや町のしゆう。

○廊下のすだれあけや、我との。（以上中食後）

○道ばた、繪に書くほど植ゑ置け。（道傍に植うる時）

○此田にやおうへ家繁昌とをさめた。

○此田にやなぐれ名殘をしの苗植ゑよ。（最終の歌）

○三拜さんのーござるやらー、露を漕ぎ分けてなう、綾の脚半に唐笠でー、露を漕ぎ分けてなう。

○（音頭）ナンヂヤイ、初穂は先づさんばーいに、（早少女）ハーハイ、參らせう、まづさんばーいに。（朝）

○（音頭）ナンヂヤー、やどには御膳を据ゑて、（早少女）ハーハイ、待ちよる御膳を据ゑて。

○（音頭）ナンヂヤー、早少女や洗ひ川。（早少女）ハーハイ、ちがよる洗ひ川。（晝）

○（音頭）ナンヂヤー、早少女や今日見て明日は、（早少女）ハーハイ、見まいか、今日見て明日は。（夕）

○そらで、どんどとよー、なるかみ鳴神さまはー、こゝは、ヤレ桑原くまばら、おちやすまいー。

○大山のが、ヤーハレ、お山にのーぼる、いつ登る、ヤーハレ、いつ登る、ヤーハレ（合唱）いつ登る。ヤーハレ、朝ごりとーりてけさのぼる。

○大山のが、ヤーハレ、お山にのぼり目につくは、ヤーハレ、目につくは、ヤーハレ、（合唱）目につくは、ヤーハレ、はすのれんけに手水鉢。

○大山のが、ヤーハレ、本社の前のはねつるべ、ヤーハレ、はねつるべ、ヤーハレ、（合唱）はねつるべ、ヤーハレ、水つりあけてこりをとる。

○大山のが、ヤーハレ、本社の前のからしゝ、ヤーハレ、からしゝ、ヤーハレ（合唱）からしゝ、ヤーハレ、松江のとのさんの御寄進よ。

○大山のが、ヤーハレ、おみせん箱に何がある、ヤーハレ、何がある、ヤーハレ（合唱）何がある。ヤーハレ、八萬八聲の歌がある。

○朝起きて、ヤーハレ、目りんさまを拜むには、ヤーハレ、をがむには、ヤーハレ、（合唱）をがむには、ヤーハレ、兩手を合はしてさし上げて。

○一の谷、ヤーハレ、はまべが沖にまだはるか、ヤーハレ、まだはるか、ヤーハレ、（合唱）まだはるか、ヤーハレ、押したて行かば近くなる。

○大山の、ヤーハレ、御神樂所はどこにある、ヤーハレ、

どこにある、ヤーハレ、（合唱）どこにある。ヤーハレ、
參れば本社のみぎわきに。
○大山の、ヤーハレ、御神樂所でなにをまふ、ヤーハレ、
なにをまふ、ヤーハレ、（合唱）なにをまふ。ヤーハレ、
十二やさんの神子がまふ。
○正月に、ヤーハレ、おかどをみればにぎやかな、ヤーハ
レ、にぎやかな、ヤーハレ、（合唱）にぎやかな、ヤーハ
レ、門松たーてゝにぎやかな。
○二月には、ヤーハレ、門松たてゝなにをまつ、ヤーハレ、
なにをまつ、ヤーハレ、（合唱）なにをまつ。ヤーハレ、
春のけしきをまつばかり。
○三月には、ヤーハレ、よしのゝ山を見たまへば、ヤーハ
レ、見たまへば、ヤーハレ、（合唱）見たまへば、ヤーハレ、
千本櫻がさいてをる。
○四月には、ヤーハレ、おきなるなはてを見たまへば、ヤ
ーハレ、みたまへば、ヤーハレ、（合唱）みたまへば、ヤ
ーハレ、ごしきのほたるが火をともす。
○五月には、ヤーハレ、おん土ひらいて田を植ゑる、ヤー

ハレ、田を植ゑる、ヤーハレ、（合唱）田を植ゑる。ヤー
ハレ、五穀の稻を田にうつす。
○六月には、ヤーハレ、あら高山の雪とける、ヤーハレ、
雪とける、ヤーハレ、（合唱）雪とける。ヤーハレ、大谷
小谷が川となる。
○七月には、ヤーハレ、たなばたさーまをまつるには、ヤ
ーハレ、まつるには、ヤーハレ、（合唱）まつるには、ヤ
ーハレ、たんじやくたてゝまつる。
○八月には、ヤーハレ、おきなるなはてに鍬入れて、ヤー
ハレ、鍬入れて、ヤーハレ、（合唱）鍬入れて、ヤーハレ、
大御國の神にわけ下り。
○九月には、ヤーハレ、花壇みればにぎやかに、ヤーハレ、
にぎやかに、ヤーハレ、（合唱）にぎやかに、ヤーハレ、
五色の菊がさいて居る。
○十月には、ヤーハレ、出雲の國がにぎやかな、ヤーハレ、
にぎやかな、ヤーハレ、（合唱）にぎやかな、ヤーハレ、
お御國の神がみなおりて。
○十一月には、ヤーハレ、おく山行けばにぎやかな、ヤー

ハレ、にぎやかな、ヤーハレ、（合唱）にぎやかな、ヤー
ハレ、鹿なく聲がにぎやかな。
○十二月には、ヤーハレ、おく山見れば雪が降る、ヤーハ
レ、雪がふる、ヤーハレ、（合唱）雪がふる、ヤーハレ、
大谷小谷が雪となる。
○（音頭）植ゑてさらいせよー、御手がたつなーれーば、（早退
少女）植ゑて、ヤーレ、さらねば、つーほーにやーなる。
○ヤーレ、敦盛や十六歳で、いくさーに、ソーリヤー。
（早少女）十六歳でー、ヤハーハィ行かれた、十六歳で。
○朝起きて、ヤーハレヤ、東の方を眺むればなう、あさ眺
むればなう、（音頭）ヤーレ、眺むれば、ヤーハレ、日輪樣
が舞ひござる。（雙三郡）

○長者殿の、かーどの田の稻はよー、刈れど盡きせの、か
ーど田の。
○今日の日はーやつぢやーものー、お日はやーまにかゝり
たー。
○さいわほざれた、をーたをー西の山にかゝりたー。

○せどの山の櫻花をおーに持つてこい、ヤーレー、ねまの
かざりに、おーに持つてこい。ヤーレー。
○ここどもは、今が田盛り、半夏の頃が田盛り。
○宮島樣の御普請はどなたの建立なされたー。新田が工匠
に武田が番匠、清盛建立。
○名主殿の門田には、錢で塔を積まれた。錢で塔をつまれ
らば、黃金の橋を懸けうなう。（門田を植うる時）
○山里さご田の田を作れば、面白いこと見い。そら猿が三疋
さゝらを蹈むやら、三つ兒が舞ふやら。（山田を植うる時）
○ひよ〳〵と鳴くのはひよこ、小池にすむはをしどり。
○をし鳥の思ひ羽根を、一羽根ほし、やたのみに。
○たのみにはなにがよからう。えんをばおびでむすんだ、
〳〵。（佐伯郡）

○壹合蒔いたー、もーみーだーね、そのありだかは、壹石
壹斗壹升壹合と壹勺。アラ、エーヒーエーヒー、ヤーハ
レノーホイ。（安藝郡）

○苗葉にさがりたは露か白玉かな。露ならば落ちもせうが、玉ならばのらく、苗にさがらば、黄金の玉でさうろな。

○白銀の銚子盆に玉の味を入れてな、田主様に参らせうや、今日の御祝ひにな。酒の肴に、も一つ燒けや、このしろ。

○將棋さしの上手あが將棋をさゝいで、さいつらうく、君に心さいつらう、將棋上手、君に心をさいつらう。

○けさとう車戸をがからりあけて見たらば、黄金をさらのお日がさし候よ。さいた朝日にくもりのさすは無用よ。

○一の谷の合戰、熊谷次郎は敦盛を討たうとて、熊谷次郎は、蓮のつきかや、青葉の笛をわすれた。花の敦盛や十六歳でうたれた。

○一の谷の磯ばたで泣くは誰、ヤレ、敦盛がこひしさに泣くは玉織姫。ヤレ、いとし玉織、十四で後家になられた。

○うさぎ殿、うさぎ殿。なぜに耳が長いか。うねんで生れて、谷んで育つて、うねのさうも聞きたし、谷のさうも聞きたし、それで耳が長いよ。われが生れはさんしろ山の小兎。

○さんばいの生れし國はどこの國、どこの國。ヤーレ、高天の原の生れなり。

○さんばいの生れし月はこゝの月、こゝの月、十月になれば生れ月。

○さんばいの産湯のこゝさは何こゝさか。どこの清水。ヤーレ、高天の原の岩清水。

○さんばいの産湯の盥や何盥、何たらひ、ヤーレ、白銀黄金のはぎたらひ。

○まはれうぐひす、こゝろ忍まはれうぐひす。梅がには名尋ねて、こゝろ忍まはれ鶯。

○こゝろ忍まはりてはなもらさずに鶯、いへーさまれはなもらさずには、ヤーレヤレ、はなもらさずに。

○これの背戸のもりやまに烏千羽やどつた。日がくれる、ゆくやこで、烏千羽宿つた。

○ひがくれるゆくやこで、西の山端にの、れんげのはな、ヤレ、さきが、こだれたをんた。

○けさ殿の見送りに、かみさしゆ落いたー。落いたも、道理ぢや、心殿にの取とられたー。（朝）

○ひるまくのかさをばうくにかつけ、さうとめ。のーばのかけにならう。（十一時頃）

○ひるまのかゝをば、何に水ぢで流いたー。谷水ぢで流いて、きぬでふいておさめたー。（午後始）

○うたひそめしに、まつさんばいをのりいれう。さんばい神は又どのかからましまし。宮のかからましまし。あしけの駒に手綱をゆりかけ、はやいが、こまのあしどり、（男）今こそましまし露をこぎわけて、（女）にしきのはかまはいて、あやの小がさかついて。（山縣郡）

○ここ五月愚しの惟念々相ふるの苗代に、て兆うさ殿の水うこ劫ぐくの水をあて、雜行ざつしゆの草を取り、往生の秋になりぬれば、この質取らこそうれしけれ。

○二月に霞のかさ雨の降る時用意なる。六字はこしやうの川意なるもの。

○三月さんのもゝさに身をこがす、おのが死ぬも知らずして。

○四月死ぬるもいやなれど、それにお寺まゐる氣もない。

○今朝の朝歌草紙に一書いて一流し一たー、エーヨーイ、

○けさとう小鳥にや露にしよほぬれて、うらうらとないて通る、露にしよほぬれて。

○けさ田に出るをりと殿にもの言うたやら、霧は深し殿は見えず、なぜにもの言はれうにや。

○けさ殿の見送りにやかんさしを落した。落したも道理ぢや、殿に心とられて。

○ひるまを麥を搗くやら、十二から白で、おこうたち（女房）も出て見やれ、十二から白で。

○ひるのつち（中日）の笠をばうくに着いや、さうとめ。のーばに蔭をさす、うくに着いや、さうとめ。

○ひるまこぜん出來たが、空主はどこにやら。若狹の濱邊に、若布取りに行かれた。

○日はくれる、晩になる、野邊に手斧をかたいで、どの木を切らうやら、野邊に手斧をかたいで。

○暮れがたのさうとめと春の霞は、面白いねを出す、春の霞は。

○天竺ぢや蓮花、唐ぢや牡丹花、ヤレ、日本では櫻花。これが花の王。オヤレ。

（囃）オイサーソリヤ、草紙に書いて、（合唱）サーハー流しーたー。

○けふはこの田にさんばいおろしまゐらせう。（以下朝）

○ひとつうたうて、いなづるひめにまゐらせう。

○さんばいさまのうぶのたらひは、なにでつくりたやら。きんぎんこがねのはりわけだらひよ。

○さんばい樣の三つの時に書きおかれた御筆に、天下おだやかに、書きおかれた御筆よ。

○みんないさみやれ、今さんばい樣のこだりた。

○さんばいはどちからごだるやら、宮の方、宮の方から、ヤーレ、あしけのこまのたづなよ。

○たづなゆりかけ、今さんばいのごだりた。

○あしけこまには、さんばいのせて、いさませう。

○あしけこまをば、やいたのばゝにのらうや。ばゝにのらうとて、やいたのばゝがしけりた。

○ばゝがしければ、みなきり拂うて乘らうや。

○東くるまど、ほそど、あけて見たらばの、こがねまさりのあさ日さしてはの。

○あさ日さしては、よい早少女（さうとめ）のさごゐよ。

○光輝くみやうじやう星か、あさひか。

○けさの朝歌、草紙にかいて、ながした。

○書いてながしやれ。草紙はこれでかきとる。（以上朝）

○おほさんばいに、ごしゆを進めて候ふよ。

○ながえのてうしで、ごしゆを進めで候ふよ。

○ごしゆをまゐれば、すがたに水を引くやうに。

○酒のしやくをば、十三こちやうがようとる。

○酒は飲んだが肴には何（なに）やの。新茶の葉をばすあへにせうの。（以上酒歌）

○ひるまはまつたが、たゞ沖の早船ばの、はんや船にやほばしらゆりたてゝ、風をまつがほんよ。

○けふのひるまに千石たいたらあらう。なんとうなりが五千人のをつもれた。

○ひるまはできたが、ごでいどのはどこいの。（御亭）わかさの渚にわかめとりに行かれた。

○波が荒れてわかめがはまにつかんよ。さいがないいうて、こがひをほりにゆかれた。（以上書前）

○ひるまのでだちに歌（うた）ひにくいもの、ヤレ、聲がそろはで、うたひにくいもの。ヤレ。

○ひるまごきをばなに水で流した。谷水で流して、絹でふいてをさめた。絹で拭きあげ、おねま棚にをさめた。

○けふうゑる田主がさごに田植ゑての、やつなみに倉をたて、とくを招いてはの。（以上書後）

○此處は道ばた、繪にかく程に、サー植ゑうや。

○さつき花のさうとめは春の鶯よ。エー、歌はぬものもなし。春の鶯よ。

○おんばう（御坊）（盲人）京に上るなーら、琵琶（びや）箱なんぞは置いて行け。後でつるりや、つんつるりや、彈（ひ）いてなり慰まう。

○さんばい樣ーは、ヤーレ、どーちかーらおいでる、ヤーラ、宮の方から、宮の方から、ヤーレ、あーし毛の駒にたーづなゆーりかけ。

○手綱ゆりかけ、今さーんばーいはーござりた、エヘーレヤレ、今さんばーいのござーりた。

○けーさないた鳥のこーや、よーい鳥の聲、ヤレ、田一反にくーこくでーきる、よーい鳥の聲。ヤレ。

廣島縣　田植歌

○けふーの日ーは、やーつちやもの、お日は、やーまばーに、れんけーの花やーら、さーきがこだれたをんだ。

○山田さこ谷、田作れば、おーもしろいこと見候。猿が三疋さーさらすれやー、木の葉がまよー舞（ま）ひ候。

○こーなかりーの椀をば何水でー流いた。谷みづんで流いてー、絹でふきや納めーたー。

○（田囃の出し）くーりーのはー（花）なーやーら、しーろう（白）、咲いてはよー。（早少女）なーらうなーらじは、花に問はれ給へよー。

○（田はやし）くーりーの花ーやーらー、さーいてーはー、やーまーをてーらいたー、（早少女）サツアツサ。

○（田はやし）エーエーエーエー、白ーさーいてーはーよー、（早少女）エーヘーエー、花（はな）やーらー、さーいてーはー、やーまーをー、てーらいたー。

○（田はやし）おんばうどーのー、おんばうどーのー、琵琶（びや）ーどーこへーおーかれたー、（早少女）あー、ゆんべーのとーころのー、ォイ東のはうのおんれいに（御禮）、ヤーぴーやーおいて候よー。

○（田はやし）こんなせーどの（背戸）樅の木ーは、なにゆー（何を）さーけるもみの木ー、（早少女）よーみよー（を）そーしるこじゅー（小姑）との、首をさげるもみの木ー。

○（田はやし）兎どの兎どーのー、なーいて、耳が長いかー。

（早少女）あー、なーがいよー、ながいよー。うーねんでー、生れてー、谷んで育つてー、うねのさうをも聞きたし、谷のさうをもききたし、ながいよー、ながいよー、それで耳が長いよー。

○（田はやし）今日（昨日）見てきによふ（見）ればー、前のまちが高いよー。たーかいこそ道理よー、福の神がまします。

○（田はやし）もーこんどー（婿）の（殿）。京ーくだりにやー、京ーでなーにゆー習うた。（早少女）一にたいこー、二にやー笛、三にやーさーさら、四拍子、やーたら拍子叩くやうにやー物書きー習うた。

○こんな前の大川にやー鮎のみつづれがよー、上るやら下るやーら、鮎の三つづれがよー。

○にのと、かさ（笠）きて立つのは、山田（やまだ）のをどしよ。今朝（けさ）の約束（やくそく）見洗顔の、やくそく。

○ここは、深田よ、深田に大蛇が居るけな。

○ひぐれ、がたには、泣く子のこともおもはん。

○（親歌）栗の花やら白う咲いたやの。（見歌）ならうならじは花にとひ給へ。（おろし）栗の花やら白うて山を照した。

○（親歌）朝とうおきて山のは見たらば、（見歌）霧やら霞やら山の端（は）見たらば。（おろし）今朝のあさぎり、照らすがための朝ぎり。

○（親歌）面白いものは富士のまきがり。（見歌）弓矢をそろへて富士のまきがり、富士のまきがり。おーつの勢が五萬騎、五萬ぎはさむらひの加勢。（おろし）富士のまきがり、三月五日（いつか）ときめた。

○（親歌）太閤さんは朝鮮國にゆかれた、（見歌）よろひ、かぶとで朝鮮國にゆかれた。（おろし）太閤さんは船のしるし、瓢箪じるしでゆかれた。

○（親歌）さんばいさまは祈禱舞をなされた。（見歌）ゑべす大黒が太鼓を打たれた。（おろし）秋はよかれと祈禱舞をまはれた。

○宮島の千疊じき、どなたが御寄進なされた、ひんだたくみの武田がばんじやう、おんたてなされた御寄進よ。

○京の三十三間堂、佛のかずはなんほーか。三萬三千三百三十三體ござり候よ。

○天竺で蓮華花。からで牡丹花、日本では櫻花、それが花の王。

○兎どの兎どのなぜに耳が長いか。うねでうまれて、谷でそだつて、それで耳が長いよ。

○船頭どのー、ふねよー一艘かしやーれ。大船も小船も、ちやんこまでも、艜までも、沖において候よ。

田植歌はいづれも親歌、兒歌、おろしと歌ひ分つものにて、親歌は囃方の一人音頭出しの歌ふもの、兒歌は少女の歌ふもの、おろしは音頭出し、早少女の合唱するものとす。

○天下（てんか）たい平國家（こくか）安全（あんぜん）、五月三十日は國（くに）のよりあひ、殿（との）のよろこぶ五穀成就（ごくじやうじゅ）にうゑてくろめて、けさの初苗（はつなへ）を手にとり參らせう。（早少女合唱）エヘー、けさの初苗を手にとりまゐらせう。（以下朝歌）

○五ごくじやうじゆにうゑてくろめて、まるさんばいを參らせう。（早少女合唱）エヘー、まるさんばいをまゐらせう。

（以下早少女合唱エヘーを略し「の符號を附す）

○おさんばいはどちからござるやら宮の方、「宮の方からあしゆけ（声毛駒）のこまにたづなよ。

○たづなよりかけ、まづさんばいのござるに、「いさむ駒へさんばいのせて參らせう。

○今朝（けさ）の夜のほのぐろに鳴（な）いて通（とほ）るこがらす、「露にしよほれて、ないて通るこがらす。

○今朝ないた鳥の聲（こゑ）やら、「田一反（たん）に五石あるよい鳥のこゑやら。

○けさ夜のほのほに山のはをみたれば、「霧（きり）やら霞（かすみ）やら、山のはを見たれば。

○きりやらかすみやら、山のはを見たれば、「きりが深（ふか）うて、はまに人が。

○今朝の曇（くも）りは照（て）らうが爲（ため）の曇りよ。「照らうとてやら、曇りは霧（は）れてゆくもの。

○殿（との）が町（まち）を通（とほ）るとき明障子（あかりしやうじ）の内（うち）で、「髪（かみ）げづり、化粧（けしよ）いしやる、明（あか）り障子（しやうじ）の内（うち）で。

○けしよいせうにも、けしよい道具忘れた。「けさ田へおりるとて、もとひがみおとした。

○くしは買うたが髪かいけづり忘れた。「ゆうてたもれや、櫛笄も揃へた。（以上朝歌）

○みんな勇め、ヤレ峠の茶屋が近いよ、「いさめ、ヤレ峠の茶屋が近いよ。

○峠の長助が赤ねまいだりで、「お茶まゐれ、参れ赤ねまいだりで。（以上四つ茶前）　前垂

○ひるまたべよと、おごうが門まで出られた、「たべよと、おごうが門まで出られた。（晝飯前）

○酒は飲んだが、肴にや何やら、「ちーしやの葉を酢薑にせうやら。

○酒の肴にやよい物、にしの濱焼、「よいもの、にしのはまやき。

○よいすみ酒よ、むろのすみ酒はよ。「室のすみざけ、甘草の味のするもの。（以上酒の出たる時）

○ひるまの處で箸のだいを忘れた。「ごぜんの處とうてたもれや。はしのだいを忘れた。

○ひるま箸をば楊枝にけづりほそめた、「なんと楊枝にならら、天竺にびはの木。

○苗代の小柳は楊枝によいものやら、「けづりほそめて、楊枝によいものやら。

○昨日京からくだりた白い菅の笠をば、「太郎らにやきせもせいで、白い菅の笠をば。

○白い菅の笠たれにきせるとてやら、「きつきの早少女おちよにきせるとてやら。

○八千石の米をばどのくらに積まうや。「東がはの中のくらにつけをさめ候よ。

○くらの下づみに今年の米を積まうや。「くらにあまりてでにをばつしにつまうや。　錢

○田主どの、まへの田に咲くは何にの花やら。「こゞめ花はでに花よ、さいてとくの花。ヤレ。　錢

○天竺で蓮の花、からで牡丹の花とな、「日本では櫻の花。それが一の花ぢやよ。

○この田にさく花はつちでさといふ花、「手に一枝をりてこれをぬしに参らせう。

○けふの日は八つぢやものお日は山ばに、「れんげの花やらさきがこだれたをんだ。

○この田うゑたら煙草まゐれ、茶参れ。「うゑて茶のもや、これ程咽のかわくに。

○鶯といふ鳥は、今日から山に住むとな、「今日から山に巣をかけ、お經讀む鳥とな。

○何と鶯。法華經は何處で習うた、「何とほけきやうはごてんの山でならうた。

○さつきの早少女梅たまれまいかの。「梅はすゆし、はがうくよ。桃はにがいもの。ヤレ。

○梅の木のひたでまりをけつたれば、「梅ばらりとこぼれて、まりはそらへとまつた。

○次郎や太郎や與之助は駒を何處へつないだ。「うねをこし、谷をこし、さがり松へつないだ。

○ひやうごの沖のかだり船は此の殿のお船か。「金のまくはられたな、ゑちごさんのお船よ。

○かだり船の金の幕、風がばつととれかし、「風がばつととれかし。中の殿見ていの。

○いせの天せう太神宮のござ船をお宮の、「白かねのほばしらに、こがねさをでおすとな。

○つくし船のほのうへにうつくしき鳥が居る、「口にしき西はれんげのはねの白いとりがをる。

○よしつね公はいくさだちをなされた、「五條のはしでい、くさだちをなされた。

○つねもり公のいくさだちのめしものは、「こんむらさきの鎧めし給ふよ。

○敦盛樣は一の谷で討たれた、「熊谷次郎にくびうたれたまうた。

○おもしろい聲がする。あれは何の聲やら、「ゑべす大黑のたはらふみのこゑやら。（以上晝飯後）

○日がくらめや、夜にかけほしが見えるよ、「くらめや、夜にかけほしがみえるよ。

○日がくらめや、蛙が萬部の經よむ、「くらめや、蛙が萬部のお經よむ。（以上夜に入りたる時）

○みんないさめ、ヤレ、いさんでうゑていなうや、「いさめ、ヤレ、いさんでうゑていのうや。

○今日の早少女いかうなごれをしやの、「なごれ惜しくば、なごれの紬をふりわけ。（以上植仕舞）

○今日はわさ植ゑ、さんばいおろし、エヘー、わさうにさんばいおろしまゐらせう。

○おさんばい樣はどちの方からござるや。宮の方から、ヤーアレ、あしけの駒に手繩よー。

○こゝは道端、繪に書く程に植ゑう。

○一合蒔いたる籾種の、其有り高は一石一斗一升一合一勺。

○ちやせんつんぎり落したが、拾ひはせんかいつん蟹や。あれなうこれなう勿體ない事おつしやんな。足もがれう、手もうがれう、甲もはづされう、目を拔かれう。此谷川の棲居をするから、拾ひはせんよー、つんがには。

○きのふ見て今日みれば、門の松が高いよ。高いこそ道理ぢや、月のかさのまさるに。

○この田植ゑうどて、夜から起きて、オイサー、ソレサー、そめーた、ヨイ、よるから、おーきーて、サー、そめーだ。

○植ゑて、さがれや、この谷や大蛇が居るけな。こんな早少女衆は、今いる麥をこーぼした。

○（出）宮島の千疊敷や、どなたが御寄進なされたか。（返）しんだが工匠の、たけだのばんじやうが御寄進なされた。

○（出）宮島のみこの太鼓が音門の瀬戸へ聞えた。（返）ようも〳〵聞えたよ、音戸のせとまできこえた。

○（出）あんな向う馬乘が三人ぢやが、どれがこれの聟やら。（返）そさーぢんしらぢんむらさき、紺立ちさいたがそんだらっ。

○（出）さんばいさんのあがる水は、どこの國で出來たやら。（返）九州肥後の國、瀧のもとで出來た。

○（出）さんばいさんのあがる杓あー、何はぎにはがれたやら。（返）柳小萩にはがれます。

○（出）なんと柴栗やー小さうてかねをつけた。（返）エヘー、柴栗やー小さうてかねをつけた。

○（出）栗の花やら白う咲いたよ。（返）ならうならじや白うさいたよ。

○（出）ゐちご樣の紺の幕風が吹けかせー、（返）ばーと吹けかせ。中の殿を見ていなう。

○（出）酒の肴に、も一つまゐれととるもの、（返）エヘー、肴にや、ま一つまゐれととるもの。

○（出）藏の鍵をばどこの鍛冶がうたれたか。（返）京の町のかぢや町の竹左衛門がうたれた。

○（出）さんばいさんと云ふ神は、どつちから御座るやら。（返）宮の方から、ヤーレ、やしけにこんまに手綱よ。

○（出）何と手綱にや心ゆるすな、（返）エヘー、手綱にや心ゆるすな。

○（出）藏を立てたら村一長者とよばれた、（返）エヘー、立てたら、村一長者とよばれた。

○（出）さんばい棚かざるには、松に竹とでよ。（返）苗の初穗に松に竹とでよ。

○（出）松に竹をそろへて、神酒をそなへ候よ、（返）エヘー、立てては神酒をそなへ候よ。

○（出）おなり殿の御だるやら赤いかたびらで、（返）びらりしやらりと、赤いかたびらでよ。

○（出）御臺所のおなりをみさいの。（返）年は十七まだかねよーつけぬ。

○（出）ひるま米が足らん云うて、十二からうすでよ、（返）おごうたちも出て見やれ、十二からうすでよ。

○（出）なんと客僧が日高にや宿をとられた、（返）エヘー、客そが日高に宿をとられた。

○（出）なんと客そが日はいつと問はれた、（返）エヘー、客僧が日は何時ととはれた。

○（出）お伊勢參りがよい妻つれて、（返）道中のかざりか、よい妻つれて。

○（出）今日うゑる田のしがさごに田を植ゑてよ、（返）エヘー、田のしがさごに田をうゑてよ。

○（出）何と鶯ほけきやうは何處で習うた、（返）エヘー、鶯法華經はどこでならうた。

○おさんばいが見えるには、どちの方から。宮の方、みやの方から、ヤーアレ、蘆毛のこまにたづなよ。（始）

○けふの日の早少女しゆうは一向なごりをしやの、身あらひがはやら、御酒を一ほん參らせう。（終）

○若い衆そろひと紺のぬれ色は、見れば見るほど色のよいものよ。

○今日の日のゑぶりさしはだれとだれを雇うた。きつちり吉松、きちらが太郎の、八百八しろの長三郎を雇うた。
○風がよいやら、千石舟の早さや。
○ここはみちばた、ゑにかくほどにうゑおけ。
○日が入るのやをなべすけがへるがけしけし。
○心だめしは高野の山の蛇柳。
○酒が出た出た。肴はないかと問はれた。
○酒の肴によい物は、にしのつぼいり。
○ひるま麥やら、やからを立てて今つく。
○竹のかたびら干さうとすれば、日が入る。
○兵庫沖の飾り船は何處の殿のおふねか。絹の幕の張られたのは越後さんのお船よ。絹の幕の張られたのを風がぱらり吹きかせ、風がぱらり吹きかせ、中の殿が見たいよ。
○千石船の帆の上に羽根の白い鳥をる、口やー錦、にしやー蓮華羽根の白い鳥をる。白い黑いは筑紫の鳥のならひよ、黑いは筑紫の鳥のならひよ。
○大川の中の瀬で稚子が笛を落した。梁るで〳〵と梁にふえが止まりた、梁をうたしやれ、梁には笛が止まりた、

うたしやれ、梁には笛が止まりた。
○座頭京に上るにはこんのに、袋に、こんのには袋に、さゝらに、三手塗の太鼓に、やつをんどの白拍子うに、琵琶負うて、しやくよの。
○さんばいさんが御座つたよ。あれよー見なされや、蒲黄の直垂に、金の烏帽子での。
○京の町ゆ上り下り、物の直段問うたらば、胡瓜苗の中太が、たんと百目したけな。
○笠賣らうや笠賣らうや、千鳥かけて笠賣らう、だいせん笠に綾の緒で、千鳥かけて笠賣らう。笠がほしさに笠屋の門に立たれた、ほしさに笠屋の門に立たれた。笠を賣らうとてだいせん町に立たれた、賣らうとてだいせん町に立たれた。
○苗を持つ子供しの夜の寐言にはの、よい女房ほしやと、夜の寐言にはの。
○早少女さんの前にさく、あれは何の花かや。こごめ花に紅花に、咲いて德の花よの。
○今日の日の早少女さんにやー、一向名殘をしやの、みはらへまはれ、いつこんなごれ惜しやの。
○此の田濟んだら、洗ひの川にゆかうやの、濟んだら、あらひの川にやゆかうやの。
○音戸が瀨戸を切りぬく清盛公はの、日の丸の扇子をもつてお日を招きもどした。
○植ゑてくろめて先づさんばいをおろそや、黑めて先づさんばいをおろそや。
○向うお山の青山にやー、鹿が伏して候よ。弓ゆー揃へ、矢揃へ、鹿が伏して候よ。
○向うを通る小坊主ものゝこがを拾うて、歌うたりや舞うたりや、頭たたいたりやの。酒の酌とる、も一つあがれと、つぐもの、酌とるも一つあがれとつぐもの。
○向うを三人通りよるはどれが是れ(此家の)婿やら。裙はぢん白、ぢん紫、こんがけはいたがそんだらう。
○上へ參る道ばたにやー、明障子の内での、將棊をさすやら碁をうつやら、明障子の内での。
○書飯持が御座りたよ。赤い襁ゆ掛けての、ひらりしやら御座りたよ、赤襁ゆかけての。
○書飯喰べた處にや箸の臺を忘れた。御膳所問うてたもれ、箸のだいを忘れた。
○お書飯は出來たが、お亭主は何處行つた。若狹の濱にわかめ刈り干すよの。わかめ刈ろとて、荒磯波が高うて、刈ろとて、荒磯波が高うて。
○書飯喰べたら、碗かごーなにでふいてをさめた。谷川の水で流し、綾でふいてをさめた。
○海の上に棚を掛けよ〳〵、棚を掛けての、海の上に棚かけて、朝鮮國が皆見える。
○宮島の千疊敷やー何方が御寄進なされた。しんたが匠の大夫の大工が一建立をなされた。
○山の谷を植ゑるには猿がさゝら搗るけな。猿がさゝらすれやー、狸が太鼓を打つけな。
○日が暮れれやー、ゆくやごぜんお日は山端にの、蓮華の花やらおかゞみだれたよんだ。亂れたよんだ西山寺のお蓮華、たよんだ西山寺のお蓮華。
○鶯といふ鳥は曇り山に巢をかけ、くもり山にや巢をかけ、お經讀む鳥よの。

○植ゑて去りやれ、此の田にやー大蛇が棲むけな、去りやーれや、此の田にやー大蛇が棲むけな。
○植ゑて去りやれや、手に持つ苗は飾りか、去りやれや、手に持つ苗は飾りか。
○五劫思唯の苗代に兆戴永劫の代をして、一念歸命の種おろして、自力雜行の草をとり、念々相續水ながして、往生秋に入りぬれば、このみ取るこそうれしけれ。
○しだれ小柳けづり細めて楊枝木によいもの、だての男に楊枝ほそめて持たせうよ。
○奥山のかや草は昨日がりか、今日がりか。昨日がりやー何がように、今日がりよ、今日がりよ。
○梅の木の下んで毬をほんと蹴つたら、梅やぱーらりこぼれたよ、毬は空に留りた。
○さんばいさんがござりたよ。何方の方から。宮の方、宮の方から、ヤーレ、葦毛の小馬に手綱よ。手綱ゆりかけ、今さんばいがござりた、ゆりかけ、今さんばいがござりた。馬に乗りては、手綱に心ゆるすな、乗りては、手綱に心ゆるすな。

○宇治の茶と加賀の茶を比べて見たらの、つみころよ。露を拂うて摘まうや、寺の新茶をの。
○なーんとこの田でさんばいをおろせ參らさうー。さんばいさまはどーちの方からござれた。あら宮の方から、葦毛の駒で手綱ゆりかけ、さんばいがござれた。
○宮島の千疊敷はどなたが御寄進なされた。アラ、新田がたくみの、大夫の大工が一建立をなされた。
○宮島のみこの鈴は音戸の瀬戸にきこえた。アラ、やうもノ〳〵聞えたよ、音戸のせーとに聞えた。（安佐郡）
○歌のはじめは先づさんばいを參らせう。さんばいはどちからまします。宮の方から、（早少女）宮の方から、ヤーレ、宮の方から蘆毛の駒に手綱よりかけて。
○けさ起きて、くるまどさらりとあけて見れば、こがねまさりのお日がさし候。（以上朝）
○ひるまくへとて、おごうが門まで出られた、ひるまくへとて、おごうが門まで出られた。
○けふの田の田ぬしどのは田のさご植ゑて、八つ棟に藏を建て、とくをまねいだ。
○ひるまのおなりはどこまでおくるか。どこまで送るべしや、かじがしまにおくるよ。
○ひるまの處で箸の臺を忘れた。御膳もとに問うてたもれ、箸の臺を忘れた。
○箸の臺をば御膳の棚に納めた、箸の臺をば御膳の棚に納めた。（以上晝）
○日暮がたの早少女と、春の鶯はなう、おもしろい音を出す、春の鶯は。
○日暮がたの番匠殿は、野邊に手斧かたいで、どの木を切らうかと、野邊に手斧かたいで。
○この田の田友達や名殘をしの友達、あらひ川ではふみをまゐらせうやなう。（以上暮）
○エーへ、べにかねつーけてみーごと。
○エーへ、どんどゝなーるはかーはのせ。
○エーへ、この田にやーゑんこうが居るぞ。
○さんばいさんが、ヤーレ、どーちから見えましや、みーやの方から、ノーヤレ、アレヤ宮の方からなう、葦毛の駒に手づなゆりかけ。
○なはしろの水は、又水は唐の鏡か、思ふ殿御に影みせる、水は唐の鏡か。
○なんと早少女さんや。この大町をぞろりとさらうや、ハーヤーハレ、大町うぞろりとさらうや、ヤーハレヤハレ、大町うぞろりとさらうや。
○けふの早少女や十七八をそろへた、十七八をそろーへた。
○こゝは道ばた繪にかく樣にうゑうや、ゑにかくやうに植ゑうや。
○なんとひるからの米をなんぼー搗いたら有らうか、なんぼー搗いたら有らうか。
○なんとひるから米は二斗ほど搗いたらあらうよ、二斗ほどついたら有らうよ。
○ひるまたべた椀家具を、なんでふいてをさめた。谷の水でそゝいで、綾でふいて納めた。
○けさ田には入る時や簪を落した。落したやら、忘れたやら、殿に心とられて。
○けさ田に這入るときや殿にものをいうたかや。霧は深し、

殿見えず、何のものをいはうにや。

○奥山の兎どのはなぜに耳が長いか。あれやうねで生れて、谷に育て、うねのさうも聞きたし、谷のさうもききたし、それで耳が長いよ。

○（音頭）ヤーレ、苗をば諸手がけで取るもの、（早少女）ヤーレ、取るもの、諸手がーけで。

○（音頭）十七が、ヤーレ、掛けたる襷の結ひ垂れ、ノーサーノ〳〵、（早少女）ヤーレ、結ひだれ、ヤーレ、春三月の藤の花。

○（音頭）かんこ舟の帆の先に、羽の白い鳥居る。（早少女）こつちは錦、にしよー（西蓮華）でんけの羽の白い鳥居る。（高田郡）

賴朝のだん

○（さげ）西のはて、ヤーハレ、紫雲がたなり來た、ヤーハレー、たなり來た、ヤーハレー、（早少女）たなり來た。ヤーハレ、これこそ軍のしらせやら。

以下囃及重複する文句を省く。

○西のはて紫雲が其中に旗が立つ。どうでも軍があるとやら。

○賴朝が諸國の大名を皆よせて、何なさる。軍のこしらひ、矢をはがす。

○賴朝がはいだる矢羽は何矢羽。わしくまたかのいちのはね。

○賴朝が持ちたる弓は何の弓。重籐弓を持ちいさみ。

○賴朝が持ちたる弓につるをかけ、何のつる。日本に居らぬ虎のすぢ。

○賴朝が軍の駒は何の駒。名馬の駒にかいごしき。

○しいたるかいごは何かいご。りんずのかいごにあふりかけ。

○あふりかけたるあふりは何あふり。日本に居らぬ虎の皮。

○虎の皮、つけたる模樣は何模樣。ほたんからし、竹に虎。

○竹に虎、つけたるあぶみは何あぶみ。金銀赤銅のはぎあぶみ。

○はぎあぶみ、かませた轡、何轡。明珍ぐつわに手綱つけ。

○たづなつけたる手綱は何手綱。だんだらすぢのたづなつけ。

○朝糧が馬乘り袴は何ばかま。義經だちの袴なり。

○賴朝は馬のりかけてどこ行かば、八幡のみちをたづね行く。

○賴朝は馬のりかけて馬場行かば、やはたの霧もはれて行く。

○賴朝は馬からおりてどこ行かば、正八幡に參詣する。

○賴朝は正八幡を拜むには、くれなる扇をさしあげて。

○賴朝は正八幡の廣前で、みくじひく。軍にかつとや、三度まで。

○賴朝が召したる鎧は何鎧。緋縅鎧を着かざりて。

○賴朝がめしたる冑は何かぶと。七重のかぶとに劍が立つ。

○賴朝は軍に行くとて舟かざる、三艘の舟をかざりたて。

○賴朝がともぜいは何ほをる。四千人のともぜいよ。

○賴朝は軍にいくとて兵糧つむ、四千俵の兵糧つむ。

○賴朝が軍の舟はいつでる。八月六日に舟をだす。

○賴朝が軍の舟は何時つくか。八月八日に舟がつく。

○賴朝は軍の日限いつなさる。八月十日に日をきはめ。

○賴朝が軍の大將誰樣か。賴朝すけさが旗頭。

○源氏では軍の旗は何の旗。白旗たて、軍する。

○賴朝が弓ひき上げて引く時は、千里のさとの敵がしる。

○源氏ではきりつけ、きりこみ、きりこんで、刀の光も稲妻に。（神石郡）

大拍子

○朝霧は東山に舞ひ居る、舞ひ居る、東山に。

○朝まにしかの添うたを眺むる、眺むる、鹿の添うたを。

○代かきは、丹後の國から雇うた、雇うた、丹後の國から。

○代かきは車座にと直らせう、直らせう、車座にと。

○直りたら御膳据ゑや、若いしゆ、若いしゆ、御膳据ゑや。

○ひるまに五石搗いたが、足るまい、足るまい、五石ついたが。

○大工はばんじやう山に木を切る、木を切る、ばんじやう山に。

○木挽は墨とかねを忘れた、忘れた、すみと曲尺を。

○大工はのみとかんなを忘れた、忘れた、のみとかんなを。

○大工は戰船の木を切る、木を切る、いくさぶねの。

○長いのは輿市殿の槍の柄、槍の柄、輿市殿の。
○源氏には白い旗を建てさせう、立てさせう、白い旗を。
○平家には赤の旗を立てさせう、立てさせう、赤の旗を。
○敦盛は十六歳で討たれた、うたれた、十六歳で。
○玉織は十四で後家になられた、なられた、十四で後家になられた。
○田主にや金の御門を建てさせう、建てさせう、金の御門を。
○田主にや金の屏風を立てさせう、立てさせう、金の屏風を。
○田主の庭にさいたは八重梅、八重梅、庭にさいたは。
○田主のせどに咲いたは錢花、錢花、せどに咲いたは。
○五月少女洗川で雇うた、雇うた、洗川で。
○暮れたら城山かけで寢ていの、寢ていの、城山かけで。
○暮れたら明松つけて送らせう、送らせう、明松つけて。
○麻をば彼岸頃にまくもの、蒔くもの、彼岸頃に。
○麻の種を近江の國から求めた、求めた、近江の國から。
○麻をば彼岸頃に刈るもの、刈るもの、ひがん頃に。

○（さげ）ヤーレ、清盛は音戸がせーとを切りぬく、ソレヤ、おんどがせーとを、（早少女）ヤーハレ、切りぬく、音戸が瀬戸を。
○ヤーレー、供養くやうにや本尊さーまをむーかへうやー、本尊樣を。ヤーハーハイ、迎へうや、本尊さーまを。
○ヤーレー、本尊御輿のお供で迎へうやー、ソーリヤ、御輿の御供で、ヤーハーハイ、迎へうや、御輿の御供で。
○ヤーレー、輿市は軍船をこーのんだー、ソリヤ、いくーさーぶーねを。ヤーハーハイ、こーのんだ、いーくーさーぶーねを。
○ヤーレー、船にはがんどー島のくーすのー木、ソリヤ、がんどーじーまの、ヤーハーハイ、くーすの木、がんどーじーまの。
○八幡には、ヤーレ、白旗たて、何をする、ヤーレ、何をする。ヤーレ、正八幡の旗合せ。
○ヤーレ、此の田に出雲早稻を植ゑさせう、ソーリヤ、出雲早稻を、（下）ヤーハイ、植ゑさせう、出雲早稻を。

（比婆郡）

○なんぢや暮れたら城山蔭で、ハーハイ暮れたら城山蔭で。

（雙三郡）

中の拍子（一名中の調子）

○（さげ）ヤーレ、ひるまに五石ついては、（早少女）ヤーハハイ、足るまい五石ついては。
○（さげ）ヤーレ、長者が八から立てゝ、（早少女）ヤーハハイ、つきうす、長者が八から立てゝ。
○（さげ）ヤーレ、出來たらお据ゑなされ、（早少女）ヤーハハイ、かみから御据ゑなーされ。
○（さげ）ヤーレ、据ゑたらおはしなーされ、（早少女）ヤーハハイ、上からおはしなされ。
○（さげ）ヤーレ、おなりはおなりをけを、（早少女）ヤーハハイ、おごねた、おなり桶を。
○（さげ）ヤーレ、おなりは峠の茶屋が、（早少女）ヤーハハイ、おとまり、峠の茶やが。
○ヨイヤソーリヤ、おなりは、おーなり桶を、ヤーハイハイ、おーごねた、おなりをーけを。
○ヨイヤソーリヤ、おなりはおーなり桶を、ヤーハイハイ、おーとまり、峠のちやー屋で。

（比婆郡）

小拍子

○（音頭）ヤーレ、辨慶は生れはどこよと尋ねた、ハー生れは何處よと、（早少女）ヤーハーハイ、尋ねた、生れは何處よと。
○（音頭）ヤーレ、辨慶は生れは出雲と答へた、ハー生れは出雲と、（早少女）ヤーハーハイ、答へた、生れは出雲と。

（雙三郡）

練り歌

○（さげ）田の神の、ヨーオイ、生れし月はいく月か、ヨーオー、こゝの月ヨー、（早少女）ヤーレー、こゝの月、ヤーレー、十月になれば生れくるもの。
○（さげ）生れ來て產湯のをけは何桶か。（早少女）白銀黃金のはぎかけて。
○（さげ）朝歌にならしにならせ聲ならせ、ヤレ、（早少女）聲ならせ。ならさぬ聲はね聲なり。
○（さげ）雞はときはの國の歌の助、ヤレ、（早少女）歌の助、

ヤレ、夜の八つ時に目をさます。

○(さげ)田の神をおろそと思うて日を見れば、ヤレ、(早少女)日を見れば、ヤレ、今日吉日で萬よし。

○(さげ)今日の田の、田の神樣をおろすには、ヤレ、(早少女)おろすには、ヤレ、三寶みきすゞ手に持ちて。

○(さげ)田の神のつはりの時は何を好む、ヤレ、(早少女)何を好む。ヤレ、西瓜に紅梅これを好む。

○(さげ)田の神の、ヤレ、たなりし月は幾月か、ヤレ、(早少女)いく月か。ヤレ、正なる月の九月。

○(さげ)生れ來て、ヤレ、取りやけのをば誰なるか、ヤレ、(早少女)誰なるか。ヤレ、正八幡のをばごなり。

○(さげ)田の神の、ヤレ、產湯の柄杓は何じやくか、ヤレ、(早少女)何柄杓か。ヤレ、ひだのたくみのわけびしやく。

○(さげ)田の神の產湯の鹽、何鹽、ヤレ、(早少女)何鹽。ヤレ、楠くれのはぎ合はせ。

○(さげ)米子から、まかけをさして空見れば、ヤレ、(早少女)そら見れば、ヤレ、大山樣がほの〻と。

○(さげ)大山の御山へ參る道とへば、(早少女)道とへば、ヤレ、麓の茶屋から三里ある。

○(さげ)大山のうね九つはさむあらせ、ヤレ、(早少女)さむあらせ、ヤレ、さむしゆけ〳〵と吹きあらす。

○(さげ)大山の下山樣は何神か、ヤレ、(早少女)何神か。ヤレ、諸國のはるの守り神。

○(さげ)おなりをば、ヤレ、門までかごで迎へたが、ヤレ、(早少女)迎へたが、ヤレ、門から內はかちでくる。

○(さげ)上方の、ヤレ、扇屋町の扇屋に、ヤレ、(早少女)扇屋に、ヤレ、千結の竹を買ひ入れて。

○(さげ)扇屋に、ヤレ、千結の竹を買ひ上げて、ヤレ、(早少女)買ひ上げて、ヤレ、扇の骨に切り給ふ。

○(さげ)大山の御山の麓の菅のえ、ヤレ、(早少女)菅のえ、ヤレ、早少女笠に縫ひ給ふ。

○(さげ)今日の田の田主のやかたはどれなるか、ヤレ、(早少女)どれなるか。ヤレ、八棟つくりに檜皮葺。

○(さげ)今日の田の田主の前の活洲には、ヤレ、(早少女)活洲には、鯉、鮒、金魚が舞ひ遊ぶ。

○(さげ)代かきは、ヤレ、前田におりて何とかく、ヤレ、(早少女)何とかく。ヤレ、すま〻までもこまやかに。

○(さげ)今日の田の、ヤレ、田主の前田を植ゑるには、ヤレ、(早少女)植ゑるには、ヤレ、なりものぞろへでにぎやかに。

○(さげ)一日の、ヤレ、ちぎりをこめた旅人へ、ヤレ、(早少女)たび人へ、ヤレ、これで別るゝ習ひなり。

○(さげ)高砂の、ヤーハレ、尾の上の松を臼にとる、ヤーハレ、臼に取る、ヤーハレー、(早少女)臼にとる、ヤーハレ、其枝々を杵にとる。

○(さげ)順禮が、ヤーハレ、父母たづねて門に立つ、ヤーハレ、門に立つ、ヤーハレ、(早少女)門に立つ。ヤーハレ、白米ごめのこゝろざし、

○(さげ)酒は出たが、肴は何になり、ちーさの葉を、(早少女)ちーさの葉をすあへてー、これをば肴に御酒參れ。

○(さげ)早月には小菅の笠をばかたむけて、(早少女)かたむけて、見れども鳴かのは郭公。

○世界では、ヤーハレ、五穀を始める何神が、ヤーハレ、何神が、ヤーハレ何神が。ヤーハレ、大黑樣がひろめたる。

○出雲では、ヤーハレ、平田が沖の沖の島、ヤーハレ、沖の島、ヤーハレ、まかすの米がはえ給ふ。(比婆郡)

かつま

○(さげ)朝程にー聲はならしやれ、ならさぬこーゑはね聲なり、(早少女)ならさぬこーゑは寢聲なり。

○(さげ)ひるま御れうに黃金の貝がら盛りおかう、(早少女)黃金の貝殼盛りおかう。

○(さげ)さげ樣のー聲のやすめに、かつまで、ざんざと植ゑださう、(早少女)ソリヤ、かつまでざんざと植ゑ出さう。

○(さげ)高の山には竹がないやら、すへきで立てた茶參る。(早少女)ソリヤ、すへ木でたてた茶まゐる。

○(さげ)此處は大町、植ゑれば先きから穗が出るー、(早少女)ソリヤ、植ゑれば先きから穗が出るーよ。(比婆郡)

小練り歌

○種をまかうごが、なんほー程蒔かうか。何ほー程蒔かう

やら、千石程。

○千石の米を、まだどの藏に積まうか、東向の倉にこそ、けに積まう。

（比婆郡）

きり調子

○（さげ）イヨさかづきはの、まはらんなう。まはらせやて銚子うしこーそ、（早少女）イヨ銚子こーそ、まはらんなう。まはせや銚子こそ。

○（さげ）酒は出たが、肴に何なら、ちさの葉よ。（早少女）ちさの葉を酢あへに、これをば肴に。

（比婆郡）

長うた

○だいせんの、ヤーハレ、おーやまへのーほる、何時のーほる、ヤーハレ、いつのーほる、ヤーハレ、いつのーほる、ヤーハレ、いつのほる。ヤーハレ、朝垢離とーりて、けーさのほる。

○おなり樣を、ヤーハレ、門まで駒でむーかへたが、ヤーハレ、迎へたが、ヤーハレ。迎へたが、ヤーハレ、門からうちはかーちで行く。

○昨日から今日まで掛けたる掛鯛は、ヤーハレ、かけだひは、ヤーハレ、掛鯛は、ヤーハレ、先づさんばいにさし上げる。

○さんばいに、ヤーハレ、さすさかづきはどちまはる、ヤーハレ、どちまはる、ヤーハレ、どちまはる、ヤーハレ、左にまはせば、みーぎもどる。

○けふの田の、ヤーハレ、田の主の石垣は、ヤーハレ、石垣は、ヤーハレ、石垣は、ヤーハレ、どーこなるいし屋がとりたやら。

○日々に、ヤーハレ、ちーぎりをこめたたび人に、ヤーハレ、たび人に、ヤーハレ、たび人に、ヤーハレ、暮れればわかるるならひなり。

○峠山に、ヤーハレ、のーほりて見れば煙たつ、ヤーハレ、煙立つ、ヤーハレ、煙立つ、ヤーハレ、我ふる里かやなづかしや。

（比婆郡）

○今朝通るこがらすは、露にしよほられなう、ゆらゆらとないて通る、つゆにしよほれ。

○あさまのほどにはー、めづらしいものよなう。

○ぢーさん孫まうけたい。それをついでに腰にせうー。

○おなり樣が見えたさうな竹の下にこそなう、見えずかくれず竹のしーたい。

○ひるまと呼んだ、いそけ五月女なう、呼んだら、さーいなうや、いそけ五月女。

○ひるま米をとーぐには、やしま染めたすきで。

○愛らしや、十七がをーをこぐ手ぶりは、上に向いてもとろりや、しーもいむーいても。

○十七八がおーりおろいて、竿にかけて乾すもの、おーるやうにやおいとましゆーて、さらすよいにや。

○とぴ〳〵まへまへー、あきになつたらほーひらへ。

○上もせーき、下もせき、せきはとめたがなう、みーづの心はしーもいこすよ。

○せいこ、せいこ、せやーいかう、前の川のせやーいこ。

○あらひ川のよしの根はしけうながれがしなう、あうてなりとちの云ふーや、しけうながれ。

○ひがくれれや賃とりが、かーさ負うてかけるよ。

○ひが暮れれや坊主が、鐘をごんとついたけな。

○けふつれようた友達は、なごりをしや友達。あーらひがはでこそ文はまゐる。

○（さげ）さーつきには、かーたびらをそーめほいたがなう、（早少女）れんげの花色にそーめほいたよ。

○（さげ）染めるかたびらの御紋は何か。（早少女）めうがの御紋に八重菊に。

○（さげ）ひるま米をとぐさうな、手にしなを入れてなう、（早少女）手にしな入れてのや、こんごめを。

○（さげ）今日つれようたる田友達や、名殘なぐれをしや友達、（早少女）なぐれをしけにや峠茶屋に。

（比婆郡）

上げ歌

○（さげ）京に立つたる御堂はー、（早少女）三十三間の御堂よ。

○（さげ）三十三間の御堂は、（早少女）中の間がひろいよ。

中ら歌

（比婆郡）

○（さげ）總德神ヤレ、（早少女）おりさせ給ふ。ヤレ。
○（さげ）笠の緒の八打ちや、（早少女）我れが殿に參らせる。
○よう歌うた鳥はなう、寶買うて來るものー、朝まの程はなうめづらしきもの。ヤレ。
○霧がはれたらばなう、いさめ早少女よ。
○ヤーアレ、供養には本尊樣を迎へうか、ソリヤ、本尊樣を、ハーハイ、迎へうや、本尊樣を。（比婆郡）

牛若丸

○牛若丸の、四つのときの、次第はいかに。南部にありて、義朝公の、三男なるが、牛若丸は、丑なる年の丑なる月の、丑なる日にち、丑なる刻に、御誕生なさる。牛若丸と、うぶな呼んで、五つや六つまで、あそばせおいて、七つの年より、八つの年まで、手習させて、九つ年より、がくもんなさる。十三歳にて鞍馬山へのぼる。くらまの山で、大天狗や、小天狗に、武藝をならふ。一に散りけん、二にはほうじつよ、三にはしなへ、四つにははがへし、弓矢のけいこも、なぎなたや、あひととなへば、大天狗の、御褒美には、とらきり丸の、刀をゆづる。若君樣は、押しいたゞいて、大天狗や小天狗に、いとまをつける。お山を下る、べんけい殿と、たゞのぶ殿と、つぎのぶ殿と、三人づれで、わか君樣を、迎へと見えて、べんけい殿は、ひたいにときん、いろけさかけて、ほらがひ持ちて、忠信殿は、しらざや刀の、はうけんさいて、繼信殿は、こがねづくりの、負佛負うて、三人連れて、お山へ登る。若君樣を、繼信殿は、おひ佛入れて、脊中に負うて、負うたる紐は、八つ取り合せのしんくのうちを、かのこ形の母衣かけて、お山を下る。べんけい殿は、ほらがひ吹立て、吹立て、お山を下る。はうがん樣は、どれからどれへーゑんと、あづまゑんーの、あづまゑんの御所寺へ。（比婆郡）

酒屋節

○（音頭）ハヤーレ、めでたや、今日や、こーれのわーさーうゑ、ハーソーレソーレ、ハラこんにちや、こーれの、（早少女）ヤーハーハーイ、めでたや、こんにちや、こーれの。（雙三郡）

なんぢやい節

○（音頭）ナーンヂャーイ、この田にやー、いづも、早稲わーせを、ナーンヂャーイ、うゑさせう、いーづも、わーせを、（早少女）ハーハハイ、植ゑさせう、いづもわーせを。（雙三郡）

赤名節

○（音頭）十七が、ヤーレ、かーけたる、たーすきの、ゆーすびだれのーさ、ゆーすびーだれなう、（早少女）ハリヤ、ゆーすびーだれ、ヤーレー、かけたるたーすきのゆーすびーだれ。（雙三郡）

勇み田

○（音頭）ここはー、みーちーばーたー、ゑーにーかーくーほーどーのー、（早少女）サーハー、おーもーへーよー、（音頭）エーヨーオイ、ゑーにーかーくーほーどーのー、（早少女）サーハー、おーもーへーよー。
○（音頭）ひる麥やら八から立て、、（早少女）今つく。
○（音頭）ひるまたべくて大田もおはか、（早少女）よまれな。
○（音頭）代は出來たが、かねをつけるやら、けしやういするやら、家早少女が、（早少女）まだこぬ。
○（音頭）旅の早少女けふこそ見ゆーで、（早少女）手並を。
○（音頭）旅の早少女露さうに立てな、（早少女）地毛人。
○（音頭）今日の田はやしや望みで來たと、（早少女）思ふな。
○（音頭）今日の田囃や望みで來たと、（早少女）思ふよ。
○（音頭）來たか揃うたか、ばらりと笠が、（早少女）はをやれ。
○（音頭）なんほ、いさん（苗ぢ）（ふる）でも、出このは是の、（早少女）田酒よ。
○（音頭）代が出來たよ、烟草の代が、（早少女）出來たよ。
○（音頭）田はえー植ゑーで、御杯を、（早少女）ようとる。
○（音頭）酒に醉うたよ、三拜酒に、（早少女）醉うたよ。
○（音頭）酒によたか、また云ふことも、（早少女）くりこと。

○(音頭)けふの三拜は千石たいて、(早少女)あらうか。
○(音頭)けふの三拜は金のかひで、(早少女)盛りたちふ。(又ほーたちふトモ)
○(音頭)ほーを立てたならの葉に、(早少女)つゝむらう。
○(音頭)つつんでは金のあふこで、(早少女)もたれた。
○(音頭)けふの三拜は千代にもらせよ、千代こそこれの、(早少女)あとしき。
○(音頭)千代が男は千里が沖に、(早少女)鯛をつる。
○(音頭)鯛はつるともれふどはいやと、(早少女)いはれた。
○(音頭)娘にはけきやう花傘、嫁には皿の、(早少女)佐渡笠。
○(音頭)佐渡笠ないと買うてたもれや。(早少女)きていなう。
○(音頭)買うてきせませう、今度三よしの、(早少女)市で。
○(音頭)娘には鯛のはまやき、嫁にはこちの、(早少女)小頭を。
○(音頭)娘千代の笠を裏見れや、藤の花やら見事に、(早少女)さがりた。
○(音頭)しうとん殿の早稻植ゑにや、婿が酒を、(早少女)かひかせ。
○(音頭)むこ殿をなほし置いては、長柄に銚子、(早少女)みつもれ。
○(音頭)むこ殿なら横座(の正面)へ直せ、(早少女)みつもの。
○(音頭)酒の肴によいものはにしの、(早少女)つほやき。
○(音頭)娘にやはたを織れ、嫁には杉山で、(早少女)松をとれ。
○(音頭)あつほからけて胴とる(太鼓)殿、(早女女)わがとの。
○(音頭)五月三十日は、國のよりやひ、茶へかたびらと、(早少女)そめいで。
○(音頭)そめはそめたが、どうさがわるて、(早少女)色わるい。
○(音頭)色がわるくば、おん紅で、(早少女)色あけよー。
○(音頭)あがり歌は人丸さんが、(早少女)よまさる。
○(音頭)人丸さんが前に居られれや、夕日がさいて、女)美事な。
○(音頭)お日の入りやひ、ほさうや、地白の、(早少女)かたびらを。
○(音頭)かたびらをほさうとすれば、(早少女)日が入る。
○(音頭)代かきはあだな骨をりよー、さは米を、(早少女)五兩やる。
○(音頭)お日の入りやひ扇でまねき、(早少女)たよるよ。
○(音頭)けふのせぎこは、啼く子はないか、(早少女)いそがぬ。
○(音頭)けふのせぎこは誰せぐまいと、(早少女)思ふな。
○(音頭)殿が見られる、手元をよけに、(早少女)植ゑよれ。
○(音頭)いとまごへやら笠を川へ、(早少女)ながした。

問の歌

○(音頭)尾道の茶屋の娘は日本で手ききと、(早少女)聞こえた。
○(音頭)手利女が七年麻がせを、(早少女)まだある。
○(音頭)瀬戸の唐橋、番匠からか、(早少女)木からか。
○(音頭)きからではない。ばんじやうからの、(早少女)そりはし。
○(音頭)これ前の楠の木はエンヤラ聲で、(早少女)おろした。
○(音頭)おろしおいてはお寺の内の、(早少女)しよえん木。
○(音頭)しよえんではない。こぜんの前の、(早少女)お障子。
○(音頭)お障子ではない。お寺の橋の、(早少女)らんかよ。
○(音頭)けづり細めてさつきにそめて、(早少女)持たれた。
○(音頭)染めたやうじを今をりもどす、(早少女)すほの木。
○(音頭)栗の花やら白うて山を、(早少女)てらした。
○(音頭)かねをつけたか、さつがた山の、(早少女)早せくり。
○(音頭)わせ栗はわかうてかねを、(早少女)つけたか。
○(音頭)しみせんの枇杷の木はやうじにけづり、(早少女)ほそめた。

(安佐郡)

六調子

○(音頭)今日けふーのひーは八つぢやもの、おー日はやーまばになう、(早少女)れんげーのはーなやーらさーきがこーだれたをんだ。
○(音頭)昨日通つた傘は、誰婿花今日も通り候よ。(早少女)通らば通れー、だれがもーこにとらうにやー。
○(音頭)長者殿の前田の早稻なう、(早少女)かーれどつ

ーきせの、前田の早稲はー。

○(音頭)昨日見て今日見ればー、前の町が高いよー。(早少女)
高いこーそ道理よー、福の神がまします。(安佐郡)

八調子

○(男)けーさたーへおーりーるいうて、うーたのさうしを
おとーしたー、(女)さうとめーがーひらうてー、はーだ
ーにやーそへーてをるーとなー。

○(男)うたーのーさうしはーあさぐさかーりがーひーらう
たー、あさくーさかーりがー、(女)エヘーレヤーレ、あ
さぐさかりがー、さーさうぢや、朝くさーかーりーがー。

○(男)朝寢をせうよりや、起きて髪をとかいせ、(女)今日
の日のおそいに。

○(男)起きて髪をとけ、とのだに太鼓がなりよる、(女)エ
ヘーレヤーレ、とのだに太鼓がなりよる。

○(男)さんーばいーさーまーは、ヤーレー、どーちーかー
らごーざーるやーら、みーやーのはうかーら、(女)みーや
ーのはうから、ヤーレー、あーしゆのこーうまにやたー

づなよい。

○(男)たづなゆりーかーけ、いーまーさんばーいがーごー
ざりたー、いーまーさんーばーいがー、(女)エヘーレヤ
ーレ、いーまさんーばーいがー。

○(男)さんばいのやれ生れをとへばむつの國よ。(女)むつ
のくにから、ヤレ、うまれをとへばしまんばらよ。(男)
しまんばらからしやうひちりきでくだられた。(女)エヘ
ーレヤーレ、しやうひちりきでくだられた。

○(男)さんばいさまの産湯のたらひは何と何でゆはれた
か。(女)ぎんやきんやしろがねで、いーやおかれました、
(男)いーやおかれた。あれよみや、うぶのたらひを、(女)
エヘーレーヤレ、あれよみよ、うぶのたらひを。

○(男)三つさかづきに、すゞに酒をいれての、(女)たぬし
どもまるれや、すずにさけを入れての、(男)すずに酒を
いれ、まづさんばいといはれたよ、(女)エヘーレヤーレ、
まづさんばいとよばれたよ。

○(男)さんばいにやごしをしんでそーろーの、(女)長柄の
銚子でごしをしんでそーろーの、(男)ごしをもれば、砂
田に水をもるほどに、(女)エヘーレヤーレ、砂田へ水を
もるほどに。(以上朝歌)

○(男)おもしろいものは富士のまきがりの、(女)おもだか
そろへて、富士のまきがりの。(男)富士のまきがりや、
おほつのせいのごまんぎ、(女)エヘーレヤーレ、おほつ
のせいのごまんぎ。

○(男)長者殿のやなりをみれば、(女)こがねたるきにひは
だでふかれた。(男)ひはだぶきなら、萬年もてるといは
れたよ、(女)エヘーレヤーレ、萬年もてるといはれたよ。

○(男)忠臣藏では六段目、おかるがよめいりするといの。
(女)おかるさんはかごにのつて、やつこの屋敷にかへら
んす。(男)おかるはかごにのるかごぶは笠きてまちよる
よ。(女)エヘーレヤーレ、かごぶは笠きて待ちよるよ。

○(男)九つはしごをさしあげて、二階の様子をきくとよの。
(女)由良之助の長文を二階でよむといの。(男)おかる文
讀む、讀んでは泪をこほしよる、(女)エヘーレヤーレ、
讀んでは泪をこほしよる。

○(男)大川の中のせでちごが笛をおとした。(女)やないけ
ゝ。やなに笛がとまりたよ。(男)やなはようせけ。や
なには笛がとまるよ、(女)エヘーレヤーレ、やなには笛
がとまるよ。

○(男)さつきのさうとめよ。ここはみちばたでの、(女)見
事に植ゑてたもれ。ここはみちばたでの、(男)こゝはみ
ちばた、繪にかくほどに植ゑよ、(女)エヘーレヤーレ、
繪にかくほどに植ゑよ。

○(男)一の谷のすまでらで、寶物を拜ませう、(女)鎧かぶ
とに青葉の笛を。(女)一の谷では青葉の笛が寶よ、(女)
エヘーレヤーレ、青葉の笛が寶よ。

○(男)ひるまはできたが、旦那殿はどこいか。(女)若狹の
濱にわかめをかひにゆかれたよ、(男)わかめをかふとて、
皆いそばたへゆかれたよ。エヘーレヤーレ、皆いそばた
へゆかれたよ。

○(男)ひるまの口にこそ歌ひにくいもの、ヤレ、(女)聲が
そろはで歌ひにくいもの、ヤレ、(男)歌ひにくいこそ歌
うてたもれ、さうとめよ、(女)エヘレヤレ、歌うてたも
れや、さうとめよ。

○(男)天王寺ののきのかやがたらいで、(女)これをてんぐ〳〵にからいで、何をてんぐ〳〵にかろにや。(男)かやがたらいでもう千日もからうや、(女)エヘレヤレ、もう千日も刈らうや。

○(男)向ひなる青山に鹿がふしそろの、(女)弓そろへ矢そろへ、しかがふしそろの。(男)弓矢そろへて、今日しかうちにゆかれたよ、(女)エヘレヤレ、今日しかうちにゆかれたよ。

○(男)如何にうたうも、青山しかでみえんよ、(女)エヘレヤレ、青山しかで見えんよ。

○(男)三聲半なく、四聲となくが、鹿の王よ、(女)エヘレヤレ、四聲となくが鹿の王よ。(男)しかのこひけをぬいては、筆のぢくにするよ、(女)エヘレヤレ、ぬいては筆のぢくにするよ。(男)しかのまき筆千部のきやうまでかゝれたよ。(以上畫歌)

○(男)今日の日は八ぢやものを、日は山んばに、(女)西やゝとお日はやまんばに、(男)みんな拜みやれ。日のいるかたの嬉しさよ、(女)エヘレヤレ、日のいるかたの嬉しさよ。(男)日輪樣は東からで、西においりなされる。

○(男)二みが浦におかへるよ、(女)エヘレヤレ、二みが浦におかへるよ。(男)天下太平國土安のん、今日は日もよし苗のさごよし、植ゑてくろめて、まづさんばいといははれた、(女)エヘレヤレ、まづさんばいといははれた。

○(男)日ぐらし鳥や笠のはをまはる。(女)まはりたうてはまはりやせの、とまりたうてまはるよ。(男)まこと小鳥は笠ばの裏にとどまるよ、(女)エヘレヤレ、かさばの裏へとまりたよ。

○(男)さうとめのてじやうずが笠のはをそろへたよ、(女)丹後但馬の田どころで、笠のはをそろへたよ、(男)丹後但馬でさらりと笠のはをそろへたよ、(女)エヘレヤレ、さらりと笠のはをそろへたよ。

○(男)日ぐればんけの蛙の聲を聞かいせ、(女)夜はしみぐ〳〵と蛙の聲を聞かいせ。(男)まことかへるは千部の經を讀みよるよ、(女)エヘレヤレ、千部のきやうを讀みよるよ。

○(男)今日のさうとめや、一向名殘をし、ヤレ、(女)みわ

らひがはにと文をまゐらせうやら。(男)名殘をしけれや、あらひの川のやくそくよ、(女)エヘレヤレ、あらひのかはのやくそくよ。(以上夕歌)　(安佐郡)

太鼓田

○起きて髪結へ、せどの田に太鼓が鳴るぞや、早少女衆。

○御田主は朝日、是より唐天竺の豐姫さまよ。

○畝町眺むれば、千町ばかり。千町ござるなら、此田に千石、出來ませう。

○館のかしきの勢は、五萬餘とかぞへた。

○晝飯食へとて、十九の櫓から招いた。　(賀茂郡)

○(音頭)けふーは、ひもよーし、ふーくさわーせの、うゑーぞめ、ヤーハレ、ふーくさわーせの、(早少女)イヘヘヘヘヤレ、ふーくさわーせのうーゑぞめ、(合唱)ヤーハレ、ふーくさわーせの植ゑーぞめ。　(豐田郡)

麥打歌

○つりやのきだはし、金のはし。

廣島縣　麥打歌

○大工さんはどちから。せどの山から。

○麥をたんたくには、には照るがよいもの一、ヤーハレ、照るがよいもの。

○七つの櫓にあけーて、あけてすゞみせう。

○山いきぢーさんの足が、足ーがだいからう。

○さんきやうじびくさんのこーしが、ヤーハレ、腰ねぢれた。

○麥仕にござれや、酒を、ヤーハレ、酒をかひませう。

○なる神樣かや、こーこーは、ヤーハレ、こゝは桑ばらー。

○大船小ぶねは殿の、(下)ヤーレ、殿の御川ぶね。

○とん〳〵斗樽の中は、(下)ヤーレ、中は上酒。

○七つやぐらに上げて、(下)ヤーレ、上げてすべませう。

○ヤーレ、そんよとふいてくれや、ゆーるけー、ヤーハレ、ゆーるけ、こすだれー。

○すだれをあむ絲は、金の、ヤーハレ、金のこま絲。

○ヤーハレ、大名の供やら城を、ヤーレ、城をめくらせう。

○朝日がさいたら起きやれ、起きやれ、嫁んぢよ。

○起きてから何を。ざしきなでませう。

○なで、から何を。お茶をたべませう。
○ぱらりと降つたら、麥仕や麥の手休め。
○大川瀬がうつ早うに、早うに瀬が打つ。
○七つ櫓に上げて、上げて涼ませう。
○ちんちく小林くゞれ、くゞれ、ひよどり。
○吹いて來たらばゆるゆ、ゆるゆ、小簾。
○海田の商人まちやれ、まちやれ帶買ふ。
○連れ合ひませうや、仁賀の、仁賀の堂まで。
○駒が居るなら小艸、小艸刈りませう。
○小艸かりませう、あすは、あすは、道ふまう。
○大工さんはどこ、ならそらの、そらの山から。
○大名のとのさん　知行は、知行はこま知行。
○三京寺びくさん腰が、腰がねぢれた。
○爺さん山行きや、すねが、すねがだいからう。
○春の山打ちやこはや、こはや、ねぶたや。
○山は何山。木山、木山まき山。
○棗の木の根におくは、おくは玉章。
○十七が寺に詣りてよー、アレヤドツコイショ、をがむ聲を聞けばよー、しのべしのけれ、あれこなしよー。
○十七がかけた思ひは、ヨイコラショー、み山のやー奥の、朝の朝霧よ、ヤレ、晴れよゆかぬよー。　（比婆郡）
○宮へ參らうやー、ヨーホイ、ヨイサ〳〵、此の六月にや、（合唱）「この六月にや、」管絃拜みのーよ。（合唱）「しーほーかけにー」。　（安佐郡）

芝取歌

○かれや〳〵、この芝の芽を刈らにや、荷が出來ぬ、飯がない。
○女房のよい人だちや、山行きや早い。人が二に行きや、三に行く。
○今朝の芝取りや、鎌柄が折れて、三把おくれた。（蘆品郡）

雨乞願もどき踊音頭

此踊りは八木村特有の物にして、大昔より炎天續きたる時には、安部山の三社及八幡宮に立願し、庄屋番組等一切の任に當る。洪水を賈受けたる時、願もどきとして一村民此踊をなす。行列等甚嚴しく、音頭出し等は村内の上流者を以てし、其の秘密は他村に授くる事なし。他村より入家せし男子にすら教へざりきと云ふ。左にかゝげたるは吉野屋新兵衛の八木村大踊記を抜書したるものなり。

御庭こひ

○去夏炎天頻りに打續き、田畑こがれ行くにつき、兩八幡宮龍王三社に立願をかけ、神もふびんとおぼし召し、一時の洪水を下され、萬民歡ぶ事限なし。此度躍子わかしをつれ、是迄御禮に參りて候。
○さてあなたへ參り、鳥居がゝりを眺むれば、東のはふは板くらばんじやう、西のはふは京ばんじやう、中はひんだのからくりと打見つと、がくは八幡宮と掛け奉り、さて見事、あら見事に候。
○扨ついぢがゝりをながむれば、立石損石目つめ石、うへからこがねのつたがまひさがりしは見事、あら見事に候。
○扨又きだはしのかゝりをながむれば、一年三百五十四ケ日、此日の數の石を寄せ、十五夜の月をかたどり、十五段をつきならべ、一つのきだはし二のきだはし、十五のきだはしかけ上り、御庭がゝりをながむれば、四方下りに中高に、きんぐゝのいさごを敷きならべしはさて見事、あら見事に候。
○御庭の廻りのかなどうろ、かぢの名所を申すなら、京で國光、大阪でふどう南所のもんじゆがうつたるは、四方かうしに中は菊桐、上は六角ほうーの玉の作りなり。るりの油で光りかゝやぐ。さて見事、あら見事に候。
○扨拜殿のかゝりをながむれば、十六本の柱を立て、東のはふは板くらばんじやう、西のはふは京ばんじやう、中はひんだのからくんだと打見つて、ふいたるかやは何々ぞ。富士が奥のこがねかやを以て、厚さ三尺氏子はんじやうの大棟と包みこみ、四方にかしんの鏡をかけし、扨見事、あら見事に候。
○御殿のかゝりをながむれば、東のはふは板くらばんじやう、西のはふは京ばんじやう、ふいたるかやは何々ぞ。御山のおくの杉や檜の皮をもつて、厚さ三尺にふきなら

べ、前に大ごん竹のみすをたれ、中にかしんの鏡をかけ奉り、扨見事、あら見事に候。

○御山がゝりを眺むれば、檜千本、杉千本、松千本合せ三千のあひに、笹にこふじを植ゑまぜて、風吹きの花のさうじはさて見事、あら見事に候。

○扨太皷のいはれを申すなら、是より天ぢくのすまたの國そうれ川のかこ原に、楠一本御座候。上三尺は日光の惜ませたまふ、下三尺は地神のをしませ給ふ、中で六尺申しおろし、三つの太鼓はつたる皮は、うゑよ末の皮にいたされて、一からは天照皇太神宮の神樂の太鼓と納めたり。又一からは日本六十六ヶ國の、十二の時を知らす爲めの時太鼓と納めたり。又一からは今日氏子に打つて躍れと御下け下されて有がたや〳〵。

○扨杖のいはれを申すなら、是より天笠是も同じくそうれ川のかこ原に、かしの木一本御座候。上三尺は日光のをしませ、下三尺は地神の惜ませ、中を六尺申しおろし、十八本の杖におとし、四角にけづり、八角に角を丸め、ばんどう八本、京六本、つくしに三本、安藝に壹本、およそ承る中にしんのふたちもぎを附けたるは、旅へ行きてのかさをかける爲なり。又我らがついたるつゑは、犬ばらいひゑと申すなり。

○とうざい〳〵今日の役者、脇差のこじり、扇の要じり、わらぢのふみひらき、つゑやり長刀のふりまはし、双方當つた方はとーきに御めみえ、つゑのふわかしからござれ。

（安佐郡）

しかけ太鼓歌

今より二十年ばかり前頃までは、盆の十五日十六日に町内の女の子、十二三歳を頭として多く集り、團扇太鼓をたゝき、町内を連り歩きたり。之をしかけ太鼓と呼ぶ。

○此の邊の小兒衆はしやー、お意地がわりゆうてー、をーどる小兒衆に砂まーきやる、砂まーきやる。すーなも蒔け蒔けー、まかしてーおいてー、あーとでおやごにゆてとーらーす、ゆてとーらーす。

○（誰々）のーかかーはー、どがんしやく持ちーでー、にーえた茶釜へ腰ゆかーける、腰ゆかーける。にーえた茶釜へー、腰ゆかけやーせのーがー、將棋碁盤へ腰ゆかーける、腰ゆかーける。

○こいこいこぢよーらう、しかけてーこい、こいー。あーすは盆のじふーごーんち、十五日、十五日をー祝うてー、おとのさんものーはー、十二のー角ーがー頭へはえーて蛇體ー、頭の心、じやのこーころ、蛇のこーころ。じやーたい三びきやーおそろしゆーはないがー、鬼おーにの五匹がおそろーしや、おそろしや。

○ねーんに一度のー、七夕樣よー、なーにを御馳走にあけまーせうか〳〵、すーずりゆきよめてー、五色のかみーへ、思おーもひおもひの歌をーかく、歌をーかく。うーたのでどこらー横町にちやうめー、つーけてながすがさいこーまち〳〵。

（廣島市）

盆踊歌

○山かづら、まうし〳〵といふことは、まがきぐ〳〵はこちや、いやよ。

（尾道市）

○山かづら、ちぎりてくやしき我思ひ。拍子をそろへて幾千代も、まがき〳〵はこちやいやよ。

（御調郡）

○極樂の門の戸は、又鍵では開かぬ、後生す願の戀で開く。

○ある日鼠の小言には、暗いところにすまひして、食べるもの云うちやくれもせず、ひるは簞笥や米櫃や、かぢれば猫にとがめられ、まだもにくきはまず落し、それほどわたしが憎いなら、十二の支になぜ入れた。

○こなたへ參りしお庭を見れば、せんする櫻がやらみごと。

○ひがしへ向いたる小枝を見れば、しろかねばながつほみそろ。

○にしへ向いたる小枝を見れば黄金のはながよ、つほみそろ、

○せんする櫻の開くを見れば、こなたを長者と皆開く。

○我殿は今年はじめて宮島へ、ながはまで潮かけ清めて、今かいりようへおまるりやる。

○さてもみごとな、おみやたち、百八かけたる燈籠の中の、

すゞきはみな黄金。　（山縣郡）

○あのや、いりえの釣船の、うじなの沖に漕ぎいだし、江波を看に、能美島、あとたが浦を、打ちすぎて、五日二十日の浦づたへ、ぢのごぜんさんも、伏し拜み、われは筑紫の者なるが、ことし、始めて宮島に、へいとへい、さらば參詣申さんが、前のうしほで垢離をとり、兩社にまゐり、心靜に、伏しをがみ、また立ち出でゝ、さても多きな繪馬のかず、驚かすばかりなり。神の意をまち玉柵の、ぶさくの前の一ささや、みちくる潮のありさまは、古へ〳〵異國は知らじ我か朝へ、君萬歳と祈るなり。か、る靈地はよもあらじ。湯立神樂に神子の鈴、そのおん經の、ありがたさ、百八燈籠のひかりなり。下のうしほに、うつろはゞ、澤のほたるか秋の夜の、星の光りとことならず。其の名も高き經堂の、五重の塔の九輪まで、神をおすすめ申さんと、さあらついでに鳥まはり、とりの巣より舟に乗り、ともづなといて漕ぎいだす。艪拍子そろへてはやるこうたで面白や。春は、梅に鶯、夏は卯の花、とぶ螢、秋は紅葉に、鹿の聲、冬は枯木に、つもる雪、ひじの崎を、すぎの浦、ほそにあをのり、沖に小さき海人小舟、つりたれあそぶ、おもしろや。

○清水寺からおきゆながむれば、帆かけた船が三艘見える、あとのは黄金、前のは錢、中のは殿のおござ船、おござ船なら、いそいで濱へお迎へに、おむかへうけて、おうれしや、なんぞや月の九日に。

○三國一の安藝の宮島、如何なる人のお建てやら、清盛ばんじやう、こーたの大工、これ兩人のおたてやら、宮せんけん、相整うて、かいらうまでのお建てやら、沖の漕ぐ船が宮いよる。やれ美しやかけんの、あやきんざんで、まはりをかざり、笙ひちりきの音がする、なかで樂をなされ候。

○やすだい姫御はよいひめご、やすだい姫御の召したる小袖は、綾の小袖に箔の綾、やすだい姫御の召したる帶は、五絲緞むみようではくの帶、やすだい姫御の召したる笠は、こすけで綾の紐、やすだい姫御の召したる足袋は、むみようでつゆの紐。どんどとなるは大竹ざさら、ならのはひに様子、様子かたれば、こはなさけなや、こんなこゝろさんは、馬鹿ではないか。あれはこの世のよをつぐ寶。あんな小石が寶になれば、わしが炭燒く、谷谷に、凡ござるで山ほどござる。あんに見えるが、大判小判、まだも見ゆるが、豆板一歩、岩に腰かけ谷見れば、あなた百までわしや九十九まで、祝ひこめたるすみつぼの丸。

（賀茂郡）

○都内なる名は大納言、獨り娘の玉屋の姫は、廣い世間に添ふ夫がない。夫がない故、我が氏神樣に、七日七夜の大願こめる。云うて振り出す、それや三がでる。又も振り出しや、又一が出る。一と三とで二がないなれば、後にや添ふ夫がないのであろか。こゝにやないない、はる〳〵下に、筑紫豐後臼杵の城下、藥で髪結うた、炭燒こ五郎ごろ。急ぎほたえて、我家に歸り、足に股引うでぬき脚絆、紫竹小竹を杖にとつきて、さんや袋を首に掛け、さーさ出て行く、臼杵の城下、あんに見ゆるが、こごろの城下、わしはあなたの女房でござる。何をいはいしや、こりや旅の姫。獨りすぎさへ、出來ないわしに、二人身過ぎは思ひもそめぬ。みはだつけたる、小判を出して、これでこごろさんやよによこでござる。買ひにやゆきます、ゆくもがさとへ。川原小柳をしの烏一羽。をしをみあてに小判をなげる。をしは舞ひたつ小判はしもる。買ひにや行かれんこごろがてまい、あとに歸りし姫しゆー

なせ踊

○そよれ〳〵、稻葉もそよれ、秋風も立つ。
○秋鹿が友を呼ぶ聲、三聲呼ぶ聲。
○子供參れ、今年も參れ、これが庭に。
○もどせかへせ、もちもどせ、そーでならひ。
○でんばちよ、びよーやと茶屋の娘。
○せけよせけと、もちとせけ、せけ〳〵。　（御調郡）

手踊

○わしが弟の千松は、年より心が發明で、扇のかなめに池を染き、池の土手にと松を植ゑ、松の下にと田を廣め、

千町ばかりの田を廣め、千石ばかりの籾を蒔き、植ゑて育て、草を取り、秋のなる時がきたなれば、三日月鎌をば手に取りて、一鎌かれば千石、二鎌刈れば二千石、三鎌四鎌を刈る中に、石數がつもれば猶よかろ。十七八なる姉さんが、千羽千挺立て据ゑて、ばらり〳〵とこき落す。搗いてはたいて白にして、飯に炊いたら富士の山、酒につくれば出雲酒、出雲酒の其中に、青竹三本生ひ繁り、こまんこだかゞ舞ひ來り、金や小判で巣をくみて、十二の卵を生み揃へ、われが此の家を立つ時は、御家繁昌と祝ふなり。

（御調郡）

山づくし

○先正月は若ば山、かどににぎはふ松葉山、二月は四方のかすみ山、けむりこめたるかむろ山、彌生花の吉野山、心せよかざあらし山、四月はきりにあをば山、かきにめいさもうづら山、五月は端午の兜山、のきにも草もいはう合ふかいあふ、六月ぎをん山、後すゞしきひむろ山、七月からは秋のせつ、蟲もこゑ〳〵つけの山、八月くだりをしか山、月もはる〳〵三笠山、九月はいろよき紅葉山、菊の酒のむにわう山、十月はしぐれ山、ゆきのそらするしでの山、十一月はこほり山、あられもてくるうづら山、十二月は月のみて、月もはる〳〵いらせます。

○松が日の出か東山、さんごてらすが月の山、春は色よき花の山、夏はすゞしき嵐山、秋は色よきもみぢ山、冬はむもけき雪の山、十七八はみだれがみ、とけぬ思ひがふじの山、こよひござらばまちませうと、西をかぎりあひの山、さゝのすぎたるきやくのかほ、あけぬたまがき男山、わしはこなたにほの宇山、かほを見たさに北の山、内の女房にあきの山、……人の娘にこひすれば庭の隅でも鏡山、めつたに酒をのむ人は、やがてあたまがはけの山、めつたにばくちをうつ人は、やがて財布があきの山、めつたに思をする人は、後には癆瘵やむの山、……鬼の岩山すゞか山、田村將軍男山、かのふかくさの少將は小野の小町に通ふ山、あかいかはらけ手にもちて、なけてよろこぶあたご山、こひがつもりてとは山の、今はさくらであひの山。

（蘆品郡）

鹿くどき

○向うの小山に鹿が鳴く、寒て鳴くのか妻ごひか。けつしてさうでは御坐んせの。七谷七山其裾に、五尺三寸ひな男、肩には鐵砲手に火繩、腰には因州彈丸袋、前には黑毛の犬を連れ、後にはむくけの犬を連れ、黑犬行けむく犬行け、逐ひかける。助けておくれや山の神。助けて貰うたら、御禮に立ち山崩して堂を立て、堂の廻りに杉植ゑて、杉の間に松植ゑて、松の間に胡麻植ゑて、萬劫末代胡麻作り、參る御方に作らせて、籠る御方に絞ほらせて、十二の燈明上げませう。

（甲奴郡）

○鹿のくどきと申するは、向うのさゝ山鹿がなく。何がこよして鳴くのか、寒がつらいか妻ごへか。寒がつらうもござんせの。こゝから七峯七谷その奥に、六尺二寸のひな男、肩には鐵砲ふりかたぎ、前には虎毛の犬をつれ、あとにはむく毛の犬をつれ、むくけとらけをほしかける。それがかなしてなくのか。助けておくれや山の神。助けておくれよ。御禮には、石山くゞして堂たてゝ、堂のまはりに、ごま植ゑて、參る男女につくらせて、これを御禮にいたしませう。鹿のくどきは是迄。いまだあるかい。わしや知らん。

（雙三郡）

きりこ踊

安佐郡飯室村地方にて、天保年間以來、豐作の年に、於て、きりこ踊と稱へ、燈籠を冠り、盆踊する時の歌。

庭しめし（始めにうたふ）

○こなたの殿は今よのさかり、八つ棟つくりが、おたてある〳〵。

○八つ棟つくりの棟あけにはの、白銀黃金米をつむ〳〵。

○八つ棟つくりの棟あけ祝ひに、こがねのつながおはへある〳〵。

○八つ棟つくりの番匠はじめ、よからう道理か、おはじめに〳〵。

○八つ棟づくりのはふ口に、千年つたはる鶴がひとつがひ、萬年つたはる龜が一つがひ。

○ことしの稻の穗色のよさよ、蓁毛あしゆけの駒の尾のごとく〳〵。
○かみからくだるめぐろの早稻は、三ばとこけば九をけ〳〵。
○も一はこぎて十桶にたして、こなたのおくらへをさめおく。

本うた

○婿殿〳〵たまの御出に、せき酒つほそこ參らせう〳〵。
○せんすゐの植木なるなら、育たうまでは待たうよ〳〵。
○天竺の〳〵御所のおまへに、日本をてらすから梅〳〵。
○くれなゐ〳〵のつまをひきつれ、こなたへおちよ、から梅〳〵。
○から梅を〳〵、一つたもれや、わがなる里のみやけに〳〵。
○天竺の〳〵御所のお前に、うはなりおちがあるとの〳〵。
○うはなりは〳〵天のなるかみ、音にはきけど、まだ見の一〳〵。
○うつせみは〳〵ことしや十三、うたるゝひめは九つ〳〵。

○九つの〳〵こゝろでさい、ひぜんのたちをかまへて〳〵。
○これほどの〳〵お寺が、よいひやく八だけを見つけた〳〵。
○とりあげて〳〵吹いて見たれば、ことあるふしが四つある〳〵。
○あの宮島にそめぐは何ぞ。ますもと舟がついたやら。
○ますもと舟がつきやするまいが、あの宮島はめんしよか名所や。
○かみから舟が三ぞうくだる。さきなる舟は絲屋が娘、絲たびはいて、絲とる手もとこゆしてひと目、ゆかして一目、いとまごひして又一目。中なる舟は綾屋が娘、あや足袋はいて、綾織る手元こゆして一目、ゆかして一目、いとまごひして又一目。あとなる舟は絹屋が娘、きぬたびはいて、きぬ織る手もとこゆして一目、ゆかして一目、いとまごひして又一目。
○さまは百夜の星ではないが、うせつかくれつ氣毒のろくな。
○花の助戀に迷うたけな、さいた刀を杖につく。

○花の助をほめるちやないが、京で一番、大坂で二ばん、あきの廣島で天下一。
○かみへのぼりて、おくりさまたのみて、笛や太鼓や、小鼓ならうて、うきよのかろやゆめのまに。
○われは酒やのさかばうき、なかをゆはれてかどにたつ。
○われは酒やのひとつ桶、ひるのまのない、よさござけ〳〵。
○われは酒やの酒びしやく〳〵、うからされておもしろい〳〵。
○博多の町を通りて見れば、あらうつくしのしけあみがさ。あれを買うて殿のみやけに。
○博多の町を通りてみれば、あらうつくしのあしゆけ蓁毛のこま。あれを買うてとの、みやけに。
○博多の町を通りてみれば、三げん女郎があやをおる。あれを買うてとの、みやけに。
○庭のやなぎがしけれかし。あいて一字のうたをかく。
○墨と硯と筆たもれ。まてといふ字をかいてやる。
○流る、文をくみあけ見れば、一字の歌が書いてある。
○縁がうすいか、うす墨がうて、散りてよまれぬ、このふみは。
○安田姫御はよい姫御、色はまいろに櫻色。
○安田姫御のめす笠は、菅は京菅からの絲。
○安田姫御のめす小袖、あやの小袖に白のおび。
○安田姫御のめすたびは、むみようにあやのひも。
○ヨーこれのお背戸のくすの木に、鷹がすむやら鈴がなる。
○ヨーけさの夜あけの夜あらせに、たか〻一もとそれてきた。
○ヨーやよにこだかのはねのはね、うらにふみが一ふでそうてきた。
○ふみの上がきなんと見た丹後紬が十五反、つくしほうしが九色。
○丹後紬もいやで候、つくしほうしもいやで候。とのゝおさがり、ヤレめでた。
○今宵はくもりし蚊がくひ候よ。あふいでたもれ、みな若いしゆ。
○空ゆく雲はどちゆく雲。日本へゆけばふみをやろ。

○七月くればかたびらほしや、さつまの國のめおひかたびら。
○よど川の橋の下のこひふなご、袖もぬらさずとるがふしぎよ。
○淀川の橋の下の船にねて、沖はしらなみこまのあしおと。
○雲は白波、月はふね、のりやうかべて、かつら男。
○おびやするがの富士の山、まはりて見てもむすびてもなし。

（安佐郡）

早口踊（宮島八景）

○ヤーレ、矢野の一入江の、つり舟を一、宇品の沖に、こぎいだーし（踊子一同アーソレ〳〵）江波を一看に能美島、（アーソレ〳〵）・あたたが浦をもー打過ぎて、遙か沖を見ながせば（アーソレ〳〵）さてもー、みごとな、つくねが島ー、根からはえーたか、浮き島かー。（アリヤヨイヨーヨイヤナー）
○地の御前さんもふしをがみ、（囃）五日廿日の浦づたへ、我もつくしのものなれば、（囃）今年はじめ宮島へ、（囃）されば參詣申さんと、（囃）まへのうしほで、（囃）垢離を取り、（囃）重社に參り心靜にふしをがみ、（囃）又立ち出でてながむれば、（囃）まことに大きな繪馬の數を見て、目を驚かすばかりなり。（囃）神のいをまつたまがきや、（囃）深きの前の下さきに、（囃）滿ち來る潮の有樣が、（囃）古の異國は知らぬ我朝の、（囃）神かんぜいと所るなり。か、る靈地のよもあらば、（囃）ゆだてかぐらの神子の鈴、（囃）きみがつづみにたいはんじ、（囃）いその沖よの有難さ、（囃）さーらば、島まはり、（囃）鳥居のすより舟にのり、ともづなといてこぎだせば、（囃）春は梅にうぐひす、夏はゆの花とーほたる、（囃）秋はもみぢにしかの聲、（囃）冬は枯木に積る雪、（囃）磯の松風、長濱の、（囃）べんが宮をもふしをがみ、（囃）小浦に酒が有りの浦、飲めや歌へささんざと、（囃）波もしづかに宮人の、（囃）つりたで遊ぶ笛の音や、供へあげたるおとぐひや、三つつれたるこがらすが、（囃）さもうれしさうにはごくんで、（囃）御山をさしてこぎ行けば、（囃）神子舟子に至るまで、（囃）如何なる高神の惠かや。大元大明神と所るなり。（囃）。

太鼓踊

○尾道の鍛冶が娘は一、日本でーきと一聞こえたー。（太鼓）五つでーは一、絲をーよりそめ、六つでは一、こ（機）ろ（織）ばーた、おーられたー。（太鼓）こーろばたーの一布はーできたーがー、かーたをーばーなーにとーかーかーかー。（太鼓）かーたさーきには、梅の一をーりえーだー、裾そトそには一近江のみーづうみー。（太鼓）（安佐郡）

かへり踊

○おちご樣たちいれて、泉水山をなされ候。
○泉水山のうゑ木には、松もとりえとゆかうかうじとたちばな、うちけんかうじがおうゑある、〳〵。（柑子橘）
○泉水山にさく花は、小菊かん菊こがねめん菊、八重紅梅に白梅に、大白もみぢに、うすむらさき、咲きわけなんぞがおうゑある。
○泉水山にすむ蟲は、松蟲、鈴蟲、めう〳〵、機織、蟋蟀、思ひ〳〵に初音をだすが、面白い〳〵。

（安佐郡）

あげ歌

○吉野の山の八重櫻、一枝折りて國のみやけに。
○はかたの町のはしづめで、三軒女郎があやをおる。どれが目につく。うつくしさよやひめ〳〵。
○上はたき、下は清水にひやされて、すゞやかに咲く梅の花。
○鶯が〳〵梅の小枝に巣をかけて、花をまくらに月をながむる。
○千つばき萬つばき、枝は吉野に葉は伊勢に、花は都にいその小町に。
○宮島まゐりのお下向に、御福もらうて持つがめれたい。
○何藏鳥が庭なれて、みくらのかきをさしくはへ、こなたを長者と三度さへづる。
○黄金小鳥が庭なれて、こなたを長者と三度さへづる。
○やらめれた〳〵、お庭の小草に露うけて、つゆかとみれば白け米ふる。
○こなたのおせどの絲柳、一なる枝は白がねよ、又二の枝

（安佐郡）

に黄金花咲く。　（安佐郡）

道行歌

○二條庫裏から三條殿の嫁入。扨も見事な嫁入ぢや。扨一番のねり物が、白塗長持七十二、黒塗長持七十二、扨其次のねり物は、黒塗籠が七十二、白塗籠も七十二。扨其中の化粧道具、ひろみの鏡が七おもて、ひろみの鋏も七つまい、眞鍮毛抜が七くはひ、百の髪が七下り、金襴緞子の油單掛、後前かゝしてねらしたり。この程仕立ててやる程に、打つな敲くな去るな婿。私は去るとは思はねど、天下輝く星樣も、空が曇れば雪となる、西が曇れば雨となるぞいな。アー追ひかけて綱の衆。ハーエーヤラサー、ハーエンヤーラサーノ、エーエーコラサー、ニーノーエー。　（豐田郡）

庭借歌

○東西〳〵、どーなたも、大に靜まりなされ。麓に木あり。寺の名は天下太平國土安穩、彼の寺の木の名はなんと申し候。あれは栴檀と申し候。一の枝はおそれよと、二の枝は三つつにおろせ。三つの太鼓に張る。張りたる皮は何の皮。虎の皮、まつた片皮豹の皮。しめたるは眞紅の絲、四十白髮、唐の絲。扨一つの太鼓は是より天竺へなげさせ候。まつた一つの太鼓は津の國や、鼓が瀑にもなげさせ候。まつた一つの太鼓は、とーとーひち八ちやうへもなげさせ候。大庭のほどを見てやれば、扨密な大庭か。はんどー石に苔生えて四方下りや中高や、南下りや北上り、四つの柱が皆黄金、蒼いた萱は鷹の羽根、上には錦を張らせ給ふ、下には金銀を敷かし。西の妻戸を見てやれば竹千本植ゑ挿し候。竹千本は千年の齡を知らすもの。東の妻戸を見てやれば、松萬本植ゑ挿し候。松萬本は萬年の齡を知らすもの。先、お蛭子樣の御中庭も、借り受けました樣にございます。僧侶樣へ御斷り申上げます。お蛭子樣や、お氏神樣に、三年一度の願解き、立てましたる幟のついでに、濱村小若い者が、ばんはら踊を致します。杖、棒、振り廻し、脇差の小柄、頭少々當りましたら、しつかと御勘忍なされませい。踊、狂言言葉の抑子ぬけ、さや詰ござりましたら、どつと場の濟めきに、やつて下されませい。踊狂言程よく出來ましたら、どつと一つ譽めて下されませい。どなた方も御退屈にはござりませうが、御悠に御見物下されませい。（豐田郡）

千早踊

○千早振る、四方もーしーづーかーに、をさーむれば、豐かに、さむらふすなーみむーら、白神ーのねがーひの、をーどーりーをば、なうホホデン、デコデン、勢をーつらねて、エーサー、踊りさう。ホホデンデコデンシンヨー。　（豐田郡）

御伊勢踊

○皆一同にはならべや。おいせ踊りを御目にかけう。おいせ踊りがいつか立たう。三月三日が吉い日とて、日取りをめされて氣を直す。御伊勢の踊りがいーつかたつ。六月六日が吉い日とて、金ばんちやうが集りて、すみかね當て、木を倒る。御伊勢踊りをーどーらうや。はーをんどろやいー。ヤエー、〳〵、デコデン、ハーイーヤエーノ〳〵、デコデン、デコデン、デコデン、デコデン。

○おいせ踊りはいつかーたつ。八月七日が立てをさめ。あぜんのつなには何かゝる。あやが千駄、木がせんだ、一萬の寶が皆かゝる。秋田の丸の棹樹を、御舟に造りてあら見事。皆愛宕樣の舟遊び。おいせ踊りを踊ろや。サーデコデン〳〵〳〵〳〵。　（豐田郡）

鎗踊

○國も豐かに一踊り、ヤーイ、ふじがーそーら山からもらうたるかしを、此鎗につけたる十文字たーて、ならーべてなー、ハーハハドツコイ、なけーしをよけーて、此のござんがかりで、サーまゐる。あー一だん〳〵ひや、ヤートートー、二だん三だーんだんだん、揃へていしづき、此のー手なみをくだんせ。あーよーする〳〵よーする。右には熊谷な。御代も豐かに御目出たい。（豐田郡）

笠踊歌

○御代も目出度や、サー先づうぢーこーこーどーもー、産土神ー參るー。このーりしやう、ねがひや冬籠り。初春のー、ねがひーにはー、のちよーどりーやー花笠、夏は川瀬の網代笠、秋は踊をどーりんにし、菅笠をー、揃へてー、ソーリャーソーリャー、子供、イヤをんどりだーせーやー、こーどーも。てんてびやうしが、そんそろうた、ハーそーろうた、てんてびやうしが、そんそろうた、ハーそーろうた、いろ〳〵そろた。こまんが、ななや十四がすーる、とん〳〵とんと其身がつきの忍がほに、ハでたーれや、もみぢーがーさー、冬はーゆーきんにー、かーづーく、ひぢーがさー、はなーのみーやーこーのー、ごしよーぬーりーがさーよー。なにーがーようて、さてさて、ドーツコイ、ようござーるー。（豊田郡）

宮島踊歌

○己斐といはれて廿日市、人目忍んで宮島へ、玖波の顔して大竹に、つもる話は岩國で、藤生をこらへて油布へ行く。大畠の意見を聽かずして、田布施するのも島田まで、主の仰を聽かずして、末は德山苦勞する。

○宮島名所で見せたいものは長の廊下に百八燈籠、海の華表か七浦惠比須、外にないのは紅葉谷。

○わたしや筑紫の者なるが、今年始めて宮島に、さらば參詣まうすなり。矢野の入江の釣舟を、宇品の沖に漕ぎ出だし、江波をさかなに能美島、遙に沖を眺むれば、阿多田に鵜島甲島　見ても美事な筑根島、地から生えたか浮島か。五日二十日の舟づたひ、地御前さまを伏し拜み、彌山の景色を眺むれば、聞きしに優る嚴島、前のお潮で垢離をとり、心靜にお前に參り伏し拜み、又立ち寄りて眺むれば、誠に大きな繪馬の數、目を驚かすばかりなり。舞樂の前や火燒前に、滿ち來る潮の有り難や。異國にあらで我が朝に、斯かる名地がよもあらじ。神の威を增す玉垣や、きねが鼓や大般若、その御經の有り難や。百八の燈籠が水に映ろへば、澤の螢か秋の夜の、星の光もこれならで、その名も高き經堂の、五重の塔の九輪まで、名所古蹟は多けれど、さらば下向をいたすなり。

○われは筑紫のものなるぞ。ことし始めて宮島へ、山の景色を見わたせば、聞きしに勝る嚴島、されば參詣申すべし。前の潮で垢離をとり、お前に參る身となれば、心靜かに伏し拜み、また立ち寄りて眺むれば、まことに多き繪馬の數、目を驚かすばかりにて、舞樂の前の火燒先きに、みち來る潮の有樣は、異國はしらず吾が國に、斯かる靈地はよもあらじ。神の威をます玉垣の、湯立神樂に巫子の鈴、きねが鼓に大般若、その御經のありがたや。百八の燈籠が水にうつろへば、澤の螢か秋の夜の、星の光りもこれならで、其の名も高き經堂の、五重の塔の九輪まで、心ことばに及ばれず。さればこれより島廻り、鳥居の洲より船に乘り、纜ときて押出し、艪拍子揃へてはやる小歌でおもしろや。春は梅に鶯、夏は卯の花飛ぶほたる、秋は楓に鹿のこゑ、小浦をさきに有の浦、いその松風長濱の、蛭子の宮を伏し拜み、飲めや歌へやざんざと、聖崎をも杉の浦、はなは鼓が浦なれば、鷹の巣すぎて申すなら、浪腰細や青のりの、沖に小さきあま小舟、釣垂れ遊ぶ面白や。浪も靜かに宮人の、お鴉招く笛の音に、養父崎見ればありがたや。供へおいたる粢をば、二つ連れたる御鴉が、さも嬉しげにかいはみて、彌山をさして飛び行けば、願主舟子に至るまで、諸願成就と壽ぎて、船を早めて押す程に、革籠崎をも押廻り、山城濱も過行きて、これより須賀へ程遠し。間で慰み給へやと、名所古跡を語るまに、ひらねを過ぎて須やの浦、なけうつ餅の謂れをば、御床にありし古への、由來を聞けばありがたや、内子岩をも過行きて、これより直に大元の、大明神と伏拜む、もはや下向も致すべし。（佐伯郡）

大踊歌

座めき

○にんにはしゆめんさいや、おんにはしゆうめさい、インヤンラ、にはしゆうめさいや、おにはしゆしゆめさい、いやしゆうめさの、にはのさんあびしさんあーをーヤレさーびしさに。アヨン。

○今年の年を見て候へば、源氏の御よーにさもにたり。

○今年の年の草木よさよ。そらふる雨も米となる。

○今年の稍の葉色のよさよ。こがねの玉が露にふる。

○今年の稻のほさまのよさよ。なはてーをゆりさはぐ。

○（あげ）なはてのいねはあぜによりすがる、おかたはとのによりすがる。

○三國一の安藝の宮島、いかなる人のおたてかや。きよもりばんじやうこうたの大工、此兩人のおたてなり。宮千（廻廊）けんあひととのうて、かいらうまでもおたてある。宮島樣に大鼓がなれば、沖こぐ船も宮へよる。やらうつくし（綾金禰）管絃きかけんの船は、あやきんだんでまはりをかざり、中で（樂）はがくをなされ候。

○（あげ）やらうつくしや、かけの船は。笙ひちりきの音（ねと）がする。

○こなたへ參りきり（切岸）きしう見れば、いまよさかりのゆずみ（泉）涌く。今よさかりのゆずみのそらに、黃金（こがね）の花がつほみよる。こがねの花のひらかうをりは、こなたの殿（との）のよざかりよ。こなたの殿のよざかりなれば、きどばしまでに錢をふむ。きどばしまでに錢をふむならば、ふいたるかやはいたがねよ。

○（あげ）いたがねをぬべて、たすきにかけて、こがねのますでよねはかる。

○わかさの船が湯野津について、荷（ぴ）をあけなされよ、かな山へ。金山町で荷を賣りさばき、天秤で金をかけて取る。金山町の若い衆を見れば、よう朝（あさ）ばんはみ立てをなさる、ひ日一日（ぴち）は金をゆる。金山町の大工を見れば、白銀山をこがねでふいて、日本で一とほめられう。

○（あげ）かな山町にあるとはきけど、まだ見ぬものは百合の花。

○かみから下るめくろのわせは、三ばとこけば九のをけ。三ばとこいで九をけならば、來年つくりくらをたてう。來年わが藏を立ておいて十三日を藏びらき。お藏のかぎはわしからうちませうよ。

○（あげ）お藏の前の植木を見れば、松原かきでやら見事。

○長者殿はもこ（嬉選）えらめしよ。長者のもこは京そだち。長者殿のおひきの駒は千貫、ひたるをにくるけ、轡（くつわ）が五貫、あぶみが五貫、おめしのくらが十五貫、長者殿は今が世（よ）のさかり、きどばしまでにぜにをふむ、きどばしまでに錢をふむならば、ふいたるかやはいた金よー。

○（あげ）板金ぬべてたすきにかけて、こがねのますで米はかる。

○東初の町に金山でけて、みな若い衆は金山へ。金山なれば、わしやまだしらぬ。をせへてたもれ、大工殿（どの）。金山町の大工の庭（にわ）に、金銀ぬべておには有る。金銀ぬべた御庭には白銀山のおつきある。

○（あげ）黃金花さく殘花さくよ。空うち見れば米がふる。

○清水寺でおきう（沖）ながむれば、ほかけた船や見えて候。ほかけた船が見えては候が、にしきのやはで風をまつ。風まつ船はどなたへ參る。きづき參るさつま船。さつまをおりて上人なりて、いのや加賀しらいとへ。さつまの國にさいづる鳥は、さつまの國へ歸らいで。

○きつきの沖にあらせがふいて、花がさめしたしやろやつす。おきの船はどなたへ參る。きつきへ參るさつま船。薩摩へおりてかみ人となりて、よろやかがとの白絲へ。さつまの國にさいづる戀し。薩摩の國へかへらいで。

○十七八は殿見てはしるか、すきの袖をひら〳〵と。とーたふとい寺のもんから見れば、ほかけた船は見えて候。

○（あげ）しうていかさをそろへて、めしよせきじやて花ををやるかよに。

ゆき

○川中いい七日七夜さとまるとも、ふたみちかけるとのはいや、エンその〳〵とのはいや。ちかかろいけばあひもしよぞい、もしよ川をへだてゝをるほどに。また川中い竹のまるばしわたるとも、ふたみちかけるとのはいや、エンその〳〵殿はいや。ちかかろいけばあひもしよぞい、もしよ川をへだてゝをるほどに。また川中いかなわをすゑてひをたくとも、ふたみちかける殿はいや、エンその〳〵殿はいや。ちかかろいけばあひもしよぞい、もしよ川をへだてをるほどに。

○まつはこで、いわいせ參り、いせのこでいのおには黃金の臼をやからたて、やからたて、エン〳〵やからたて、

それひく姫のおなかには、どれがめにつく、御目につく。からのかみさしかなてまき、それでまいたがめについて、めにつかーん〳〵。つれておかいれ、たびのとの。つれていぬるはやすけれど、われにやいの妻がある。

○ひとつとえ、比叡のお山の櫻花、咲いてこだれておもしろや。二つとえ、ふたせが山の山奥に鹿のしのぶもおもしろや。三つとえ、三島の沖にこぐ船は、こがねのしぶきおもしろや。四つとえ、夜のほどをえ知らいでうちひとばかりあてにして。

○そも〳〵富士のよせまきがりと申するものより、三日前から五日のかれいとふれをなし、その日の勢子の大將は、安藝で對島のにたんの四郎と申するもの、その日の勢子のよせふうは、四萬三千四人づゝ、その日のやりの立てやうは四萬三千四つたて、その日は弓の立てやうは、四萬三千四つたて、その日のししの取れ樣は、四萬三千四疋とれ。

ふ　み

○やすだひめごはよい姫御、いろはまいろで櫻色、やすだ姫御のめすかさは、かさはこふすけあやのひも、やすだ姫御のめすこそで、綾の小袖にはくのおび、やすだ姫御のめす足袋は、足袋はむりようでつゆのひも。

○こひにこがれるおせんぢよーろ、天で浮雲ほしのかず、まだもこがれるおせん女郎、山で木の數草の數、まだもこがれるおせん女郎、三里海路の砂の數、まだもこひするおせん女郎、川はせの數なみの數、まだもこひするおせん女郎、八反畑けしの數。

○安藝で高野の福王寺、お山が〻りをながむれば、すぎやひのきやもみなへや、かすみか〻りかやら見事。御門がかりをながむれば、四方さがりに中高に、背戸は松山小松山、前は林のかんこでら、八つのたにから清水わく。清水ではないゆすみ涌く。きんわけ桶わけびしやく、向小山にひがとぼる、もえてながれるやれ見ごと。

ゆ　り

○京やまぶしのめしたる兜巾、をはゐちぜんしらが絲。京山伏のがけたるけさは、あさぎ染に墨染、紫染に色やまさる、そんでほす。ヤレやまぶしをどりはおん面白や。

○京山伏のさしたる刀は、九寸五分に三尺、さけをが二尺こんたちまさる。そてほす、ヤレ山伏をどりはおん面白や。京やまぶしのふいたる貝は一つ二つ三つ四つ五つ五つとふけばねこそまさる。そてほす、ヤレ山伏をどりはおん面白や。

○十七八はあさかは渡る。わがつまならば、おんおひわたす。わがつまなことわたさばわたせ、あの山かげがあるほどに。あの山かげによ、もし人をらば、ヤンおん身とわがと緣がない。おん身とわんしと緣がないならば、藥の實を植ゑてえんとせう。

○はかたのまちの絲屋の娘、親にもとはずぬけさんぐ。もししうていよもとひませう。十七八のよぢやろ。じゆうんれいをみどものせんのかをたこたないか。それこそ見ました、あひまんあした。白ぎぬきやはんに、さかひがさめして、くまののくににつれをまつ。

○御門のわきのや、ほす女、あれこそ人の殿とりよ。あしもと手もと十二の手草。十二の手草にやをもこのかがみ、それをだすとも殿をなださぬ。柳はよりこまいこといやる。御身の殿はそれやすまい。

○若狹の浦に石たきやうござる、しんしてめしよ皮足袋を。若狹の浦に石なをつめば、こんらい山のなみおそろしき、若狹の嫁にえなるまい。若狹の嫁にえならぬならば、いのんや、安藝の宮島へ。宮島樣は名所で御ざる。諸國の人がみな參る。

○（あげ）一の宮かさ二の宮かさ、いのやかしやのゐちごがさ。

ゆき、ふみかへり

○大山御山の楠に。鷹がすむやらすずがなる。紫竹かんちくからの竹、もとはしやくはち中は笛、つぎは歌かく筆の軸。

（安佐郡）

大奇本大踊歌

御庭入

○テンカコカ〳〵、あなたの御庭へどし〴〵参る。テンテコテン、おにはよが、りをながむれば、テンテコテン、さてもよ見事な御庭かな。テンテコテン、四方よさがりに中高に、テンテコテン、まれなよ御庭と打見えて、テンテコテン、テンツク〳〵ツクテン〳〵、テンツク〳〵ツクテン〳〵スツテコテンテン〳〵〳〵。

一番　右ねぢ

○テンカカカ〳〵、十五夜の月にあさ日がさしそうて、日本かゞやく有りがたや、シヤン〳〵〳〵。

○シヤンカコカ〳〵、鶯が梅の小枝に羽を休め、そこで鶯音を出す。デン〴〵カコカデンカコカ、デン〳〵カコカ、デンカコ〳〵〳〵カ、スツテコデンデン〳〵〳〵。

○テンカカカ〳〵、上はまつ山、前ははやしのかんきよ寺〳〵、ほたんしやくやくうゑおいて、花を詠むる住持かな。シヤン〳〵〳〵。

○テンカカカ〳〵、我心鳥になりたやつぼくらに〳〵、一のやなかへすをかけて、おもふひめぎみしたにみて。シヤン〳〵〳〵。

○デン〴〵カコカ〳〵、小草に駒をつなけよとおしやる。小草はよわし、こまを引く。テンツク〳〵、ツクテン〳〵テンツク〳〵、ツクテン〳〵、スツテコテンテン〳〵〳〵。

二番　内かむき

○テンカコカ〳〵、池の菖蒲に草蓬〳〵、つれてひらくはほんばなよ。アイヤ、シヤン〳〵シヤンシヤシヤ、シヤンシヤシヤ。

○テンカコカ〳〵、三日月、いづるみか月。

○岩にいは松、岩躑躅〳〵、つれてひらくいふじの花。アイヤ、シヤン〳〵シヤンシヤシヤ、シヤンシヤシヤ。

○テンカコカ〳〵、三日月、いづる三日月。

○彼岸櫻に一重櫻〳〵、まだもこざるよ絲櫻、アイヤ、シヤン〳〵シヤンシヤシヤ、シヤンシヤシヤ。

○テンカコカ〳〵、三日月、いづる三日月、テンツク〳〵ツクテン〳〵、テンツク〳〵、ツクテン〳〵、スツテコテンテン〳〵〳〵。

○テン〳〵カコカ〳〵、をどれやれ、こまよはねやれ、こまばくちのさいにこまを引く。テンツク〳〵、ツクテン〳〵、テンツク〳〵、ツクテン〳〵、スツテコテンテン〳〵〳〵。

三番　外かむき

○テンカコカ〳〵、これの御庭のせんのふのはなよ。テンテコテン、あの色もちたよ君がほしうござる。テンテコテン。

○テンカコカ〳〵、うたひばやしであそびある。テンテンテンテン、われらが心もつれあそぶ。シツカラ〳〵、シツカラ〳〵、シツカラ〳〵、シヤン〳〵、シヤンシヤシヤ、シヤン〳〵〳〵、シヤシヤスツテコテンテコテン。

○テンカコカ〳〵、これのよ御背戸の、ヤンレ、しなのだけ、テンテコ、みゆきにおされて、ヤンレ、葉がおちるよ。テンテコテン。

○テン〳〵カコカ〳〵、繼しかござれ、ゆかしかござれ。總紅のおびしんぜう。テンツク〳〵、ツクテンツク〳〵、テンテンスツテコテンテン〳〵〳〵。

四番　左りねぢ

○テンカカカ〳〵、福榎〳〵、これのよ御背戸の福榎、もとは白銀中黄金、おうのよこ枝にぜにがなる。シヤン〳〵〳〵。

○テンカカカ〳〵、我きみは〳〵ことしよ始めて上のぼる。ひよりもよかれや、御下りに。シヤン〳〵〳〵。

○テンカコカ〳〵、かなひ、イヤわが戀、ヤラうつゝなのよ、歌のこゝろえ。テンツク〳〵、ツクテン〳〵、テンツク〳〵、ツクテン〳〵、スツテコテンテンテン。

○テン〳〵カコカ〳〵、むかひの山をこれから見れば、さいたる花の見ごとさよ。テンツク〳〵、ツクテン〳〵、テンツク〳〵、ツクテン〳〵、スツテコテンテン〳〵〳〵。

（安佐郡）

萬能倉村八幡社秋季大祭の節、太鼓鐘に合せて踊る事あり。其傳來甚だ古からざるべく、今より六十餘年前、沼隈郡邊より傳習したるものならん。

○ソレヤ、目出度えなー、イナー、とのーさんのー、エーヨー、前のー池すにやー、アーオイ、鯉が居りますぞ。尾ーあーはーえーいなー。

○目出度いな。七倉建てゝ七から立てゝ、七日七夜さひきつめる。

○目出度いな。御代が目出度い、若松が。枝が榮えれや葉が茂る。枝が榮えれや御庭が茂る。おろさう、小松の一の枝。一の枝より二の枝へ、三の小枝が又茂る。（盧品郡）

はね踊（一名沼隈踊）

はね踊の起原は詳ならざれども、元和年間水野日向守備後國を領せしより一層盛になりしものなり。水野氏此はね踊の風致を愛し、沼隈諸村に太鼓を與へ、藩命を以つて雨乞若しくは還願をなさしむ。故に庶民神社に新禱する時は、此はね踊を以つて恒例とせり。以來此風俗續きて今日に至るも、舊例を變ぜしことなし。

その打扮は白地に模樣ある單物を著し、菅笠を冠り、一人は入れ鼓と名附くる小形の太鼓を頸にし、一人は小なる鉦を持ち、一人は扇を手にして終始の規律を紊さず。此四人を以て一組と云ふ。先づ踊りを始むるときは、扇を持てる者中間に立ち、其四方を圍み踊りをはじむ。扇を持てるもの扇を翳し、「エーノヽオーサーまるらう〳〵」と唱ふれば、鉦鼓を持てるもの同音に「ヤーサーまるらう」と應じて、鉦太鼓を打ち合せて拍子を取り、打鳴すとき、扇を翳せる一人先歌ひ始む。他の者從ひて歌ひ、從ひて踊る。鉦鼓を持てるもの之に和して旋りながらはね踊るなり。

○（音頭）あら芽出度や、地からも涌いて、（同音）空からもふる。

○（音頭）地からも涌いて、空からもふらば、（同音）五穀もみのる。

○（音頭）五穀みのりて豐の御代や。（同音）これも世ざかり。

○（音頭）これの世ざかりに七からたてゝ、（同音）貢納めて

かし付もする。

○（音頭）目出度い御代のはじまりに、（同音）雨も程よく、風とゝのうて。

○（音頭）君の惠にあふ人草の、（同音）枝が榮えれや、葉もしける。（沼隈郡）

祭禮太鼓歌

○四十二、四十二、四十二、四十二や、四十二や。ザンザン、ザゴザゴザン、ザンザゴザー、ザンザゴザン。

○ザゴザイヤー、ザンカラかけーた、ザンザゴザイニー、ザンザゴザー、エーサーカツコー、カツコー、テーンテー、トツテー、トテンノショー。

○たーなの團子取つてー食うて、しつかれても、だいじがない、だいじがない、だいじがない。だいじがないと云うて、まいとこ取つて、スツテコデンのーデンカラかーけた。エーササ、カツコー、カツコー、デンテー、トツテー、トテンノショー。

○こつといかけたー、ちつかけたー、こつといかけたー、ちつかけたー、ちつかけこつとい、ちつかけこい、ちつちつかけたー、かつかけたー、ちつかけたー、エーサーカツコー、テーンテー、トツテートコテンノーショー。

○かんこーしよーとー、ふる雀、てーにもやーにも、（折返）あーさら、こーもりてんとー、ざぎ〳〵やー、ざんざんざぎやー、ざぎ〳〵やー、ノーテントテテン。

○備中肴ー、肴がない〳〵、まつさか肴、肴がない。ないと云うて、まーたまーいとこ。ステントー。

○一士のー、けんないのー、（折返）男云うーて、けよーて（折返）まいとことつてー。スツテコテンノーテン。（比婆郡）

祭禮奴歌

氏神社祭禮の日、神輿渡御に當り、御供の奴の歌ふ歌なり。

○（蓋傘音頭獨唱）エー今日殿の宿入り。（立傘以下合唱）宿入り道具は何々よ。（一同）つゆの道具は目付け道具に挾み箱、（足拍子合唱）イヤーヨーユワーシー、エーハールーハーナトーシー。（三回）（蓋傘音頭獨唱）エー朝日にさす

のは日照傘、（立傘以下合唱）エー落ちると疊むは提灯よ。（足拍子合唱）イヤーヨーユワーシー、エーハールーハーナトーシー。（三回）

○（臺傘音頭獨唱）エー是からお江戸へ何百里。（立傘以下合唱）エー是から江戸へ三百里。エー冱寒の冬に裸足で道中なるものか。エー草鞋一足やつてくれ。（足拍子）イヤーヨーユワーシー、エーハールーハーナトーシー。（三回）

○（一同）エー是からお江戸立ちては箱根の關所。（足拍子）同上。（立傘以下合唱）エー昨夜のお宿でした枕、エーしたれば濡れ込む辷り込む。（足拍子）同上。

○（臺傘音頭獨唱）エー晩の泊りは何處だんべー。（立傘以下合唱）エー奴は長崎か。だんべー行列そろへて振り込もよー。（足拍子）同上。

（賀茂郡）

神歌

俗に「いひたて」といひ神樂に歌ふ。秋の末より冬季中男子壯幼の常に口にするもの。

○八雲たつ出雲八重がきつまごみに、八重がきつくるその

な八重がき。

○高き屋に登りて見れば烟たつ、民のかまどはにぎはひにけり。

○立ちのぼるしほやの烟もはまかぜの、風の心はのどかなるもの。

○荒神はいつまで守る千代かけて、かどなる石がよねになるまで。

○闇の夜になかん鳥の聲きかば、生れぬさきの父ぞこひしき。

○世の中に要らざるものが三つある、馬鹿に借錢、焙烙のめけ（破片）。

○にこ〳〵と笑ふ娘の懐に、入れてやりたや、柿や饅頭。

○ちよいと出て目につくものは棚の餅、一つくれたら誰か喜ばん。

○ちよいと立ち雲で頭をこんとうち、かすみで額を横なでにする。

○日はまなこ虚空は心風はいき、海山かけて我身なりけり。

（蘆品郡）

○さーかーきばもー、ィョーとりすて、ー、くもーきりもー、雲にーもーきりもー、くもー霧もなえー。

○甲申神はいつ迄守る、ちよかけて、かどまる石がよねになるまで。

○立ち登る鹽屋の烟が、濱風も、よこぜーやのこゝろが、なだやかなるものー。

○吹けば行くー、吹かねばいかのー、菊もーよ、風にーまかせて、御國やすけれー。

○年寄は、つるし柿にも譬へたり。しばは寄りても味はたがはない。

○はだいに、結ぶ岩田帶、大阪山葉のもみぢ花となる。

○あくまを拂ふは、刀とたち、災難を拂ふは弓と矢よ。

○おんまいに、進め出でたるそれがしやのー、如何なるものとて、ごーらん、コレハじめす。

○御前に進め出でたるやつがれは、如何なるものと、おほしめす。之れはそも、甲申神社に、仕へ奉る、猿田彦の神とは、そも、やつがれのことなり。

○天が下助けたり、助けられたり、人といふ字は、すがり相なり。

○劍程じやけんのものが世にあれば、骨身を碎いて、かへしなるもの。

○やんぶしが、腰にさけたるほらの貝、ひと吹きすれば千里聞ゆる。

○吹けばちる、吹かねばちらぬ、かんなくづ、風にまかせて、尊びやすけれ。

○御まいに、まかり出でたる、唐辛、一ッ食うたらからかつた。

○朝起きて東の山邊を眺むれば、明星ほしの光りなるもの。

○正月は祝とて、皆人が千代のため二分積む。

○二月には牛野邊の草も木も、草木とて共にしかれがもなし。

○三月入るか、思へば精料の絲くりもどせよ、春のしめしに。春三月は柳櫻に桃の花、鶯、きゞす、いはゆるさへづる。

○四月には、たなに、掛け置くふぢごろも、縫ひ目の前に

ほころびくる。

○五月には、こすげ笠を傾けて聞けど、聞かねど五月の雨。

○六月には年祝へども、寢れども、蚊といふ蟲に、おどむかれる。

○夏三日森のこずゑは、高けれど、空にはせみの、さをじ歌聲ぞする。

○七月には小屋に掛け置く白ま弓、末はりてありあけの月。

○八月にはこまもませぬ、絲又ぬきなび、こかたをかちかためませぬ。

○九月には、先づ切りしめしなき倉の花、うい色いやすき花の色香なり。

○冬過ぎて春の節になりぬれば、先づ初聲はせみの歌聲。

○夏過ぎて秋の景色に趣けば、先づ初聲は鹿の聲。

○一寸と出て目につくものは、棚の餅、一ッくれ給へ、やまひおもふなり。

○世にいらざるもの三ッあり。ばかに、しやくせん、はうろくのめけ。

○中央の東を拜すれば、春とーたんぎよーの星ぞ見分る。

○同じく南の山端を拜すれば、南さんを星ぞ見よける。

○同じく西の山端を拜すれば、北端行の、星ぞ見よける。

○同じく北の山端を拜すれば、白連行の星ぞ見よける。

○同じく中央の方を拜すれば、大連行の星ぞ見よける。

○青に青土、青しやぐま、峯の若松谷のひめざゝ。

○赤に赤土赤しやぐま、赤きさかづきに、えびのもり物。

○白に白土、白しやぐま、越後の雪に、瀧〳〵の栗。

○黒に黒土、黒しやぐま、冬の燒け山に、同じ黒雲。

○黄蘗、山梔、おこんぞめ。

○夏の夜に、すげの小笠を傾けて、せみの鳴く聲。

○すむは空、にごるは其の古は神ぞ知るらん。

○神の子が、笛とみすゞに、はやされて、神の前に遊ぶ。

○皆人の玉をみがく時は、曇りけもない。サー。

○象だち御古を、天下る五穀土の、じゆーのまいをまむ。

○かしまだち、雲切りはけに行く折には、向ふ敵は、鹿と思はのー。

○たづね行く、たづね相では歸らん。

○十月神無い月は、皆人の備後の宮内にや、神ぞ祭る。

○さかきば、まひもそめぬ折、風さく神もあらじとどまる。

○新殿にさかきの枝は茂れども、茂りを分けて參る神氏子。

○夏の夜にいらざるもの三ッあり。蚤、蚊、夜づめの蠅の朝起き。

○みて倉高原にをさめて、下し給へる天地の神。

○太郎奴が脊に、ちばやら着る折には、敵は鹿と思はのう。

○冬至りて去り、春の節に入る折には、先づ鶯の初音か。

○先づ二月に入るや、其の村に春燒山に、ひばりさへづる。

○太郎奴が心の内が急がれて、千里道を一飛にする。

○立つ時も入る時も、神樂にまかする。我身を祈らん神ぞ祈らん。

○鶯の幽谷を出て、梅枝に初音かな。

○鶯の梅枝に晝寢して、梅の實をまくらに、梅花をながめる。

○喜びあると聞く此の村に、幸こそ祝がある。喜び參る見阪の梅花。

○喜びに尙喜びあれば、咲きける花はうどん屋の花。

○神殿に參り拜すれば神下る。何如なる氏子いまし神樂。

廣島縣　こたいじ

○次郎奴が彼のひもを、結ぶ折には、三千世界一結にする。

○此の劍、親のいずりにや、更にない。幼い育ちのしやうぶ刀。

○十月に我家出でて山見れば、嵐あらせに枯葉の散らぬもない。

○朝早く起きて東の山端を拜すれば、みやうじやう星の光りなるもの。

（蘆品郡）

こだいじ

神樂の際若い者の歌ふもの。

○なんと太夫さんよー。こはいせにやよーいぬるー。あとでこーかいよー、なさョーるーまいー。イエー。

○伊勢の太夫ーさんよー。神の守やめてーお杉お玉の、ョーもりよーなされなう。エー。

○押してくれいや、若衆たのむ。後にや子持や年寄りや。

○押せば押せ、なんほーなりと、作木港のはてまでも。

○しんほこだいじ山に寺たてゝ、だれがまるろにや山寺に。

（雙三郡）

○猫どの〳〵、なして此方の眼は、あの樣に光るのか。あの樣に光らにや屋の裏ちよろ〳〵ちよろづく、鼠がとられやせぬ。（比婆郡）

嚴島御島廻歌

正月や（嚴島神社の沖）

○芽出度いは、エーなによりもつて芽出度いな。（附）エー芽出度いや。正月お祝ひ松竹に、鶴亀千歳も萬歳も、さてその外は限りなし。橙々祝ふゆづり葉を、しめかざる御鏡。エーくもらで向ふ面影を、エーヤヨエーヤヨヤ、いつも常磐の若緑。（附）榮え榮ゆる國々の、島も一つに豐なる、民のかまどもにぎはひ、とさゝの御代ぞ芽出度いな。うれし。

端　歌（杉浦神社）

○高き屋に上りて見れば烟立つ、民のかまどは賑ひにけり。

櫻づくし（櫻細浦神社）

○ヤーヤンレ、鶯が聲に引かれて見れば、（附）エー花なりけりや初櫻、くる〳〵春に又咲き出づる絲櫻、彼岸櫻に八重櫻、花の數にもあらねども、エー散るにももれぬ山櫻。老をなぐさむ花見のくんりふ、うたへば心もわか木の櫻、吉野の山を、コレノー、（附）ハヽ雪かと見れば、雪ではあらいで〳〵、ウヽコレノ、花の散る浮世の。エトサンデ花は折りたしノ、（附）木はたかし、離れがたなの、エンササンサ、木のもと。

端　歌（青海苔浦神社）

○九州〳〵やごとうひろとの灘べを見れば、そへつねらへつ鯛を釣る。下は御座船が、エーソレ艪ではやらいで、歌でやる。

ながし（養父崎神社）

○あのや宮島だすの泉水櫻木に、鳥がとまりて、ことの響に花が散る。

かすり（須屋浦神社）

○エー岡山がよひ六挺小ばやに、艪を八挺立てゝ、朝のお參りなんほが瀬戸の小黑しやら浪堂々と、名乘り歌うておこぎやるは、サラエーコノエー〳〵〳〵、サラ〳〵〳〵おーしんど、こーさいかがりか、こーぐる松か、こーぢよろか、つがずにつがはがずに、ヨイホンホロホロデ、艪ではやらずに歌でやるー。

端　歌（御床浦神社）

○我は谷水、出ることは出たが、岩にせかれて落ちる、岩にせかれて沖の、ヨーこのあわをへ。

ざんべい（御床浦神社）

○鹽濱は、（附）赤穗のその鹽濱、一里沖なるとりやけから、下を見ては、ヤレー、すそおゝなの、ホヽヨイ、ホン〳〵、ほしよそううん、（附）なれて、ソレヤ〳〵、エー〳〵エー、うみいしもおうなの、ヨホ鹽濱やい。（佐伯郡）

猪子歌

○ゐーのこ、ゐーのこ、ゐーのこもーちゆーついて、いはゝん者は鬼産めじやんめ、角のはーえたこんめ。やつさのしりを煎え湯でたでで、またヤツサーヤツサーヨー。

○こーれの、これのー誰々さんによーめうとつて祝ははん者は、おにうめじやんめ、つのゝはーえたこんめ。やつさの尻をにえゆでたでゝ、また。ヤツサーヤツサーヨー。

○ふつきせい、はんじやうせい。

○へうとんだー、へうとんだー、牡丹に唐獅子へうとんだー。

最後の歌は猪子石を他所に運ぶときに唱ふ。（廣島市）

○一つひよ鳥や、くひの實を祝へ、二つふなだまさんは、ふなのりが祝ふ、三つみつばちや花のかず祝へ、四つよばひ星や星のかず祝へ、五つ醫者どんにや藥箱祝へ、六つむこんどにや、しうとの神祝へ、七つなんどにや車ひつ祝へ、八つやまゆきやほごの數祝へ、九つ紺屋にや藍の神祝へ、十で豆腐屋にや豆腐の數祝へ。（安藝郡）

臼挽歌

○暑や、ほけるや、六月の土用。さまのゆかたや、そでをしや。

○十七が髪をさばいて、あのいそばたに。

○十七はやぶれ小障子で紙をしや。（藍島郡）

○神の初まりや出雲できづき、あきの宮島。

○是れの籾倉東に立てゝ、西に切りまど。

○これの女子（やなこ）は横田で見たが、これにござるか。（比婆郡）

餅搗歌

○ヤーレ、高山こかげの、山ほとゝぎす、只一度のこゑなりと。

○ヤーレ、くるかくるかと濱にでゝみたら、只雲に松風やふくばかり。（吳　市）

○テツポ、カツポ、隣に餅搗く、やつて置かねば、くれなゐの花。（賀茂郡）

節季候歌

十二月朔日より後は、藺編笠に齒朶を刺したるを冠りて、穢多二人在家の門に來り、節季候歌を唱へて、米錢などを貰ひ受く。

○（音頭）「大和の國からござりた節季候。」（ツレ）「御家の掛りをあら〳〵申せば、」（合唱）「四方の堀には水を堪へ、」「八ツ棟造りの檜の無節。」「先年飛驒の匠が建てたる御家か。さても見事や。」「せきぞろ。」（賀茂郡）

地搗歌

○朝の六（むつ）から暮（くれ）もつまでも、鳴るは芝居のよせ太鼓。さんよーづきは、なんぼーついても、おへんよー。さんよーづきと石づきや、横着ものがようわかる。

○ヨーホイ、谷の清水がそねをこすならば、つまの別をすまいもの。ネンヤソレヤー。

○ようさして、いもうつくのうなかたさまは、なんでもあのやうについたなら、地獄の釜でもつきぬくよー。

○さんよーづきも小鳥は聲について、あーがるよー。ソレヤエントコサ。

○ヨーホイ、地づき石と申するは、歌についてあがるよー。トコエンヤ、ソレヤエントコサンサノエ。

○さんよーづきの石の下には、卵なんどはをーらんよー。

○ヨーホイ、大國柱の大の字は、代々傳はる大の字よー。エーエンヤソラエンヤトコサノーエン。

○ヨーホイ、是の御家の床の間の柱は、中は白銀其次は黃金、そらのほそは金や銀のともゑほそよー。エーエンヤソレヤ、エンヤトコサノーエン。

○下へ、ヤーレ下へと枯木を流すよー、エンエンヤ。下で枯木の花がさくよー。エンエンヤ。

○ヨーホイ、そろた、ヤーレ、そろたぞ、つなどりがそーろたよ。エーン、エンヤ、ソーレヤ、ヨーイトーコ、サンサイエン。

○ヨーホイ、この池と申するは、おんとのさまの水庫よ。（嬢同上）

○ヨーホイ、おんとのさまの水庫、百姓どものたからよ。

（嬢同上）

木遣歌

○（音頭）イーエー、京で名高い井筒屋のおくま、ちいさい時から神信心で、あたり近所の友達だそうで。（囃）ソレヤーヤートコセー、ヨーヨーイヤナー、コレワイセー、ソレワイセー、サーナンデーモセー。

○そのたにやーそのたにやー、その谷、谷からうさぎが三匹とんでで た。エンヤラエー。（廣島市）

○奥山のーえんじ木ーよう引くなう、も一つぢやー。アーヨンヤショー。

○奥山のー雪がごう中へ降り出た。雪かついたなら御主人もー御機嫌かえー。

○若いし聲がない。めん鳥かー。聲をして、がんくびをうなづかせー。

○何としたやら、きのふよりけふは。

○アーエートコショー、アー綱方（つなかた）よー、やーしこうだせ、

（比婆郡）

つなかたもー、ようじんせい、此次にやーこけるぞよー。
アーエートコショー。
○大物が、いたならー、のませると云うてぞよー。しこだいてー、ひつばれよー。アーヨイトコショー。
○ハーも少しよー。ハーエンヤショー、ハーも今ひといきー。ハーエンショー、ハーのりあげたー。ハーエンヤショー、ハーしこを出せ。ハー十分に、
○奥山のづらぐ〳〵とー、もひといきー、えんざのきー、アーヨンヤショー、アー引いてくれい、どし〳〵と。アーよう引くのーも、今一いきー。
○綱方よー、覺えたかー、こな引き。ハレヤー、こな大物が、ついたならー、のませると云うでぞよー。
○奥山のー茅刈りがー、アずるをみー、ハーずる〳〵とー。
ハーヨイサー。

（比婆郡）

○是より上の川上の、ヨイ十七八のねいさんが、青菜摘むやら、洗ふやら、したみが損じて名を流す。エンヤサー。

（佐伯郡）

○ハー此木は大木ぢや。大木のことなら、やたきにやいくまい。うともちしつかり、綱うらさんたちや腕には腕こぶ、足には足こぶ、蹈みよ出したり。ひきぬけ、まきとれ。ひきさへするなら、どうでもこうでも、此木はずるぞへ。
○ヤー奥山の、油木がどろ〳〵とぬりだした。ようやるなう、ヤーチョイサ、ようやるなう、もうひといき。
○（音頭）ハヨーイサ、どーならこれは、（囃ハーヨイコラセ）こーのやとめは、（囃同上）このやまぢゆうの、（囃）やまいちなんどで、（囃）でることときらふぞ。（囃）まだ〳〵申さば、（囃）山の神なる、（囃）をしみ木なんだか、（囃）でることときらふ。（囃）それでもかんまん、（囃）丈夫のうろいで、（囃）うでがもげるか、（囃）たづながつるか、（囃）二つに一つで、（囃）やらねばならんぞ。（囃）エンヤーエンヤー〳〵〳〵。

（山縣郡）

○とく若に御萬歳申すには、お家もさかえーましまする。あいきやうあいけるあらたまの、としとるひめのあしたには、せいりゆーではこのたにたゝせ、作りけかうを

見てやれば、大工はたけだがばんじやう飛驒のたくみにつもらせたまひけり。一本の柱は、いち佛やくし、いづみの金銀、つかへどつきせぬまもり神。二本の柱は、錦のまきもの、きれどつきせぬ守り神。三本の柱は、三方權現、酒のいづみ、飲めどつきせぬ守り神。四本の柱は、しみのしてん、士農工商のまもりがみ。五本の柱は、午頭の天皇五穀じやうじゆ、くへどつきせぬ守り神。六本の柱は、六地藏ろくをかためるまもり神。七本の柱は、七福神のかんでほん、福を授ける守り神。八本の柱は、はせの觀音、神にとりては八百萬神おはしします守り神。九本の柱は、熊野權現、倉に荷物は出船入船守り神。十本の柱は、じゆーらいせつりゆーぐんだつての子孫繁昌の守り神。十一本の柱は、十一めんのかんぜおん、種を授ける守り神。十二本の柱は、十二しやう、十二月のあくまを拂ふ守り神。

（安佐郡）

○西行が初めて、修行に出た時に、淺黄の小ゆうたん肩にかけ、しやら〳〵川を渡る時、くらけの骨をふみたてゝ、

廣島縣　元摺歌　酒造歌

連木でこねてもぬけません、杓子でこねてもぬけません、其處を御醫者が通りかけ。御醫者さんや、醫者さんや。是が全快る藥はないかいな。隨分ない事ありません。しはす筍、冬茹子、不產の乳をしほりかけ、冬ふる雪を手にためて、水であぶつて火でといて、其れをぬつたら直ります。エンヤラヤ〳〵。

（賀茂郡）

元摺歌（なんよえ節）

○若きをりには、重ね着て、年寄れば、一重づゝ、ぬくぞ竹の子、ナンヨエ。

（比婆郡）

酒造歌

○さーかーやーのーさかやのーとーじーは、エーろくしやくーをとこが、エー ひーるーはなー、ひるはなーはおーびエーヨ、ホ、エヤーレー、サマなーはだすーきーよー、ばんにやエー、ばんにやーりんずのーよー、ヤーレ、サマみへめぐりよ。アレハヨイヨイヨーイ。

○雨がふりやねる、日がてりや休む。空がくもれば酒を飲む。

（安佐郡）

鍛冶歌

○十や七がな、今朝のさむさに淺瀬を渡る。わしが妻なら負ひ渡す。

○なーる神がな、光るがなー〳〵、テンヤチンガラリンとなる神が、雲のあひから顔を出す。

（比婆郡）

蹈鞴歌

○金をまうけたよー、この山で。五段畑のけしの數おろか、山で木の數かやの數、川で瀬の數、波の數、天に響へて星の數、今朝こもりの程よささ、小砂花さく八重にさく。千駄萬駄の金ぬきわけて、村木樣とも云はれたや。四本柱の左座に居らうが、ままよ千駄萬駄の金ふきわける。

（神石郡）

ぼんこ節

○たゝらうちたや、このふろやぶへ、しほとこへいできよめておいて、いはひこめたや、かないごじんを。是は昔たゝらに歌ひしもの。

（雙三郡）

馬喰歌

○石州馬喰の牛見る目もとは、しつとおひかけひきかへし、左の角にも耳をそへ、右の角にも耳をそへ、角のあひから頸おさへ、三枚あばらをなでおろし、うしろにまはりて、尾をとりて、ちんちくちく〳〵、きんをひく。この牛やよい牛、直段はいくらでくだしやんす。小判五十兩であけませう。ハーノーエー、追ひこめ〳〵。

○一の谷の敦盛が、十六歳になる時に、始めていくさがはじまりて、若しや戰に負けたなら、鎧冑は父親に、青葉の笛をば一の谷、又は須磨寺に、寶物にと殘し置く。ハーノーエー、追ひこめ〳〵。

○七つなる子にやおひずり著せて、巡禮報謝と門に立つ。盆には精げの米を入れ、巡禮どこかと問うたなら、わたしや阿波地でござんすると、とさんかゝさんないのかや。とゝさんかゝさんございます。かゝさんお名はなんと云ふ。かゝさんおゆみと申します。とゝさんお名はなんといふ。阿波の德島十郎兵衛。語れや、我が子か懐かしや。ハーノエー、追ひこめ〳〵。

○牛が來た來た、四歳の牛が。棕梠綱たくりて孤を著せ、孤の上には油單かけ、油單の模樣をながむれば、からや唐獅子、から牡丹。どこの市でも四十と五兩。ハーノーエー、追ひこめ〳〵。

（山縣郡）

御馬揃ひ

馬の繁昌を祝する場合等に歌ふらし。

○御馬にや御祈禱の其の爲に、奥州育ちは黑の小馬に、千匹かせて御所へぞろりや。千匹が此數へ毛色毛數が品々御座る。信濃の國では白毛や白の小馬や。甲斐の國では鹿毛や糟毛や川原毛や、四つ白白足額白、柑子栗毛や蛭栗毛、大坂で摺つたる明神轡や、奥齒にがんじと嵌めさせて、彼處からこれへもシヤラランヤ、これからあれへもシヤラランヤ、シヤンギリシヤンと曳きや納める。さてこそ芽出度いな御祝ひ。

（甲奴郡）

廣島縣　御馬揃ひ　船頭歌　漁人歌

船頭歌

○せんどうさんどこなら、大屋の沖ぢやよ。章魚ども居らんか。烏賊ばかり。

（奥市）

漁人歌

○十七が十七が、しやくに出るさへ耻づかしや。さかなさかなと好まれて、何を肴に、はそもかや。これのおせどのせん水小池、まだ鯉鮒はじやくわいな。前のさゑんの小畑に、なすびが千本うゑてある。おそまきだねやら花さかり、花をさかなに、御酒あがれ。ヨイトナ。

○これのおいへを、ほめるなら、ぬきもたるきも、皆こがね、東にきりまど、でにすだれ、でにの門から朝日をうけて、朝日長者とよばれたい。ヨイトナ。

○さかづきは、一つなる、さしべき御方はあまたなり。どなたにささうかと思へども、ふすひのもみぢが八重櫻、樣むさしならさはちでなりと、なんのをりめのふすもみぢ。ヨイトナ。

（奥市）

綱引歌

○もちの十四日にー、かみいちしもいちがまーけてよ。まけた、腹のだーち綱をーきるよ。ハラドン〳〵〳〵、コリヤドンドンドン。（上市　下市　吳市）

平句歌

多く慶事の宴席にて歌ふ。一種特殊の音曲に伴ひ、他の地方にては多く聞かず。特に阿字平句と稱すれば、阿字村を中心として行はるゝが如し。

○父はぼたん、母はしやくやく、兄やつゞじ、妹は白菊、弟は卯の花。

○ゆる〳〵と受けてまゐれや、中に辨財の福がまします。

○皿のだいに菊植ゑて、一つまゐれや奈良の菊酒。

○皿にいき魚入れて、口にぞ入れる。

○受けたりや〳〵、渡りに舟なら、ひきや受けたり。

○酒のみは如何なる花の蕾かや。櫻の木を打ち割り見れば、何もない。花の種には何がなるやら。

○愛らしや金柑程のせいをして、何をたよりに音をめすやら。

○新玉の年の初めの筆とりて、よろづの寶書き合せるなり。

○秋鹿は身をばもみぢとかくせども、友呼ぶ音を惜まざるもの。

○十七が朝河渡るのが可愛さよ。我が妻なら負ひや渡さん。

○十七が親にかくれて齒を染めて、笹に降る雪はをかくさん。

○酒を飲みたい酒手は持たぬ。長い町と云うて通る。

○酒手は持たぬ酒ぞ飲みたや。酒を貸しやれ二合五勺。

○ゆる〳〵とうけておあがれ、この酒を。中にや辨財の福がまします。

○杯の臺のめぐりに菊うゑて、ひとつおあがれ、奈良の菊酒。

○酒はたゞ飲まねばすまの須磨うらさびし。飲めばをかしの明石カ顏になみたつ。

○白さぎか門のとびらにすをかけて、いかなるやみでも月とかゞやく。

○酒飲みはいかなる花の蕾やら、行くさき毎でさけさけと

いふ。

○鶯が梅の小枝にひるねして、花のちるのをゆめにみてゐる。

○十七が朝川わたる、可愛さよ。我子つまならおうてわたさん。

○はらはらとなくやこがねの雞が、十二のたまごをうみや育てる。

○何時見てと變らぬものは松の葉よ、公の心は松とみよける。（廳品郡）

祝ひ詞（一名褒め口上）

今宵

○こよひーはまーことに目出たい御普請（或は婚禮）、何に譬へてー御祝ひ申さうか。數あるなかーにて、長半盡しでお褒め申さん。一に一鶴、二に二鶴、三に三龜や、四五一や、六に六鶴、七福神が集つて、長や半との樂遊び、七つこんとの曲げ重箱に、豆入れて、色よき返事とございます。まーだございますれど、お席の妨げ故、これにて御免〳〵。（廳品郡）

廣島縣　祝ひ詞　大名行列　松坂　さい〳〵節

大名行列

○下にろー〳〵と、あの行列がさ、大坂でさー、カンチロリン、大坂でさー坂でさー、木村長門の守どん〳〵ど城址〳〵。

○下にろー〳〵と。あの行列がさ、廣島でさー、カンチロリン、廣島でさー島でさー、淺野安藝の守どん〳〵ど城址〳〵。（神石郡）

松　坂

○松風や音だにしけし、夜はしみ〴〵と、人を待つ夜は身のつらさ。（比婆郡）

さい〳〵節

○サイー〳〵クルーオーテー、デラおわらーいなさるな。御最負受けたるーその恩は、にしーきーのなだーよーりまだーふかーい。だいせんやまーより猶ーたかーいー。ご最負たのみまーす。アラサイ〳〵、諸君がーたー。

さんや

（雙三郡）

○目出度き物は芋の莖、莖立ち延びては葉をひろげ、葉には黃金の露を持ち、ねとにはあまたの子を持ちて、まんの藏より子は寶。

○高砂やゝ尾上の松をば白にして、其の木の枝をば杵にして、ヤンサ、つけゝ伊勢の米、伊勢の山田のせちの米。

（佐伯郡）

流行唄

○あねさんほんじよかえー。たそがれにさつてもぬつたるうどんのこ。三十ふりそで四十島田、つとめがつらいよ、土手の川風、柴の露さぞおさむからう。

○とのさーん御國いり行列で、さつてもそろうたともまはり、あとのおさへに問うたれば、松平殿のさいしよ。やつこさんのおしりは寒ざらし、さぞおさむからう。

○きーなものでー中さうならば、大判小判に二分金に、二朱金にー、まーだーもきーなーが栄種の花さかりー。

○これはこれはご領主さーま、みーぐるしきあーばらやへ、ようこそ御入來した事の、これはかさいのないしよ事、おかもいなくばおあがりあつて、お茶おたばこどもめしあがれー。

（廣島市）

雜歌

○朝起きてヤーハレ、細戸にあけて沖見れば、ヤーハレ、ゝゝ、沖見れば、ヤーハレ、沖なる繩手に鷺が立つ。

（比婆郡）

地方特有歌

敦盛

○さつてめでたうましまする。ましら萬石よね千石、あなたのお家はさかえたりゝ。二條おんでん大なごんすけかたこうのひめぎみも、いつぞや三井寺お室の御所、月見（管絃）かけんのありし其時に、あつもりさんは笛の役、その姫君のうちよりも、琴をたんずるおんすがた、一日ごらんじあつもりさん、深きおおもひが戀となり、文をかよはせ玉づさを、つひに夫婦となりたまふ。あつもりみだい御中を、物によくゝたとふれば、天にありしひよくの鳥、地にてれんりのえだまでも、まだあさからぬ御かたらひ、ちぎりあはんとのたまへば、けふ西國の合戰に、ゆかいでならぬ道なれど、往くはいとはずまだ年ゆかぬ。若武者でうたれし事はちしやうなり。若はうたれて候はゞ、後生弔うてたび給へ。御いたはしや姫君さん。殊に御身と申せしは、たゞなる身にて候はゞ、十一めんの觀世音、はだの守りに文がかたみにさあらのにのこしおく。名殘をしくは候へど、名殘のたもとふりわけて、御一門打連れて、一の谷に急がるゝ。一の谷になりぬれば、內裡を建てゝおはします。建りやく二年二月六日と申せしは、はう官たけき弓とりし、きういかうらいひやくさい國、しんら國までせめおとし、せめおとさんとのたまへば、運のつきにか敦盛さん、けさ一の谷の陣所にて、青葉の笛を忘れおき、すてゝかへらうものなれど、御一門の名をれなり。御一門はさて置いて文つねもりの御なけき、さもじなことはあるまじか。其笛とりにかへらず御しまに、御一門なる御座船は、はるか沖に漕ぎ出す。あつもりさんの御座ぶねは、ひはだが沖にうかんだり。あの船とうとまねきよせ、のらうぞものとおほしめし、いそをかなたにあそばせば、こい紅の扇をば、骨七本とひろめられ、ひらりゝとさあらのに殘しおく。招けど船はよらずして、そこに平家の御座船に、あまたの人は多けれど、惡七兵衛かけきよは、いづくへどつといふまもなし。白柄の長刀馬手の小脇にかいこんで、ふなばりよりにつつとたち、あれゝごらん候へ。未だ相國おとゝに、經盛公の三男に、むかんの大夫敦盛ぎみとみえて、きたる御馬の毛色鎧具足に至るまで、まがう所は候や。かこかんどり申付け、ろかいをともにたてなほし、船は漕げども急げども、けふ三日の惡こうに、風のあまりに強ければ、めん浪をん波さゝら波、こゝをしきりとさあらのにのこしおく。つゞきかしまをみながせば、能登の守敎經手勢漸く三百よき、八島が方におちらるゝ。ゆきなみしほやにこゝろがけ、ゆなみしほやになりぬれば、ひーのー黨の旗がしら、むさしの國の住人、さんぬるいぜんのいくさにて、我子小次郎平家方にて打取られ、

それをむねんさあまり無念にたがひはなけれども、時によれば是非もなし。よき大將と見受けたり。おつかけ〳〵具足をひしと取る。かぶとのひもとき見たまへば、もう〳〵かほにうすげしやう、こは又なんしの身にて候はゞ、いけどりにてもましませる。女武者とよく存じ、また人の御子もいたはしや。うつと申すはあわなる（哀カ）次第なり〳〵。一たびたすけ參らせん。駒の上にてとつてふせぐ。そらのちりをうちはらひ、はんだんばかりもおとさるゝ。それを源氏の味方にせし、龜井片岡伊勢するが、べんけい坊を先とせし、やー〳〵熊谷ふた心、二心にてまぎれなき、熊谷ともにはいとれと、後の山の武者所、七百餘人が一度にどつと聲をあげ、さいをふり〳〵、それを聞くより熊谷は、打つてほんまう得させんと、黒こま引きよせひらりとのり、白駒戻せ歸せと呼ばはれば、御いたはしやあつもりさん、こまの手綱を取りかへし、互につるぎ抜きかざし、えー〳〵とりきみあひ、てう〳〵はつしと切りむすび、朝日にかやゞく劒の稻妻に打物からりとなけすてゝ、こはしほらしやと熊谷は、太刀なけすてゝ、こまをよせ、兩馬があひだにどうとふし、さむらひよろひの下よりも、抜かぬ太刀のこうみやうや、はなさぬ弓矢太刀の合戰に、御年つもりて十六歳、いくさは是がはじめかや。ゆくはいとはねど、打たれし死骸（しがい）は必ず父に送れよ。玉の樣なる御よそほひ、今奉らば父經盛の御なけき、左程の事はあるまじく、こはありがたき次第なり〳〵。たび〳〵進めに熊谷は、せきくるなみだおしとゞめ、腰の御太刀すらりと抜き、ふりあげては又おろし、南無と一聲うちおとし、太刀のさきにてさしあけて、御大將の御目にかけ、よく大將はごらんじて、こはあつもりの首なれば、急き都にさしのぼせ、いそにふしたる玉おり姫、夫をしたふねんりきで、耳にいりしがむつくりと、やー〳〵敦盛さまをうつたとは、如何なる人かうらめしや。せめてなごりに御顏を、お首はどこにとなでまはし、御目が見えぬかいたはしや、おん首こゝにと手に渡し、玉おりひめの手にすゑて、やー〳〵はかない姿になりたまひ、よひの管絃の笛の時、のちにとありしお言葉は、今生後生のわかれぞや。この世で緣はうすけれ

ど、永き未來は末ながう、すゑとけてたべ、わがつまと、なく目は須磨の浦千鳥、むら〳〵ぱつと引くしほに、熊谷次郎直實は、ほろをほどいて一の谷のすま寺に、をさめおきるあはれなるかや次第なり〳〵。（廣島市）

山口縣

苗取歌

○苗をとるなら、ほとり苗をとりてたんまれ、ほとり苗にこんそー、ほけきやうの、ばんじやうかけ。

○苗をとるなら、もとへ手をいんれて、うらのかたへなびけて、もとへ手をいんれて。

○せらんのーぼの平先き、段平（だんぴら）畠に粟を三合蒔いたらばー、三十と三把はかーらんにー、三石三斗はあつたれぞ。

○奥山の小兎は何を逐うてこれまで、おうぎやーゆたらめの露をさしてこれまで。

○笠のはたの揃うた。どこ笠が揃うた。すずきすんほー笠よりやー、はりま笠が揃うた。

○田主どんの酒部屋には善い酒にすがたたら、たたけほしも荒らやれ。

○（音頭）一石入る臼に麥を九斗、（囃）エンテイ、おうとは

しれ、嫁の戀ひし。(囃)サンヨー。

○あんがりはかそや、たいこの音頭、どんとらどんどー、うち上げ大鼓の音頭。

○酒の肴に雉の雌鳥、尾も無い鳥、羽も無い鳥。

○雉の雌鳥小松の下で、親を待つやらほろゝつく。

○山田に田を作れば、けうとい物を見たといなう。猴が三疋さんさがり引けや、狸が鼓をうつといなう。

○今朝の殿の朝狩に、弦卷落した。弦卷ばかりかよめと、ゆみがき落した。

○晝飯どころで箸の臺を忘れた。問うてたもれ、お膳どころ、箸の臺を。(午後)

○やまぐちのをしやうらが、けいせい招くてあひは衣の袖をなであけ、晩にもひよん、ひよと。(暮)

○木の苗は、何とよむやら、木の苗は、大工こそよむ。あれや天竺のもみの木。

○姑の今朝のあて役、夫から水を七桶、七桶の露か涙。

○菅笠に文字をならべて順禮せう、ヤレ友達。

○沖の野の親爺どのはへこのたれが長いの。引き上げてはみんだら、道が早からうにの。

○神の御前にみかゞみたて、暗も月夜もみるかゞみ。

○今日は殿御樣のおも田が植わる。苗を小わけに元さし上げて、植ゑて上げませう、あら〳〵〳〵。(阿武郡)

田植歌

○朝はかにつぼ(植ゑ場所、恰も潭の如くなりたるをつぼと云ふ)に落ちなよ。しうとどんの田のうわるになぜもこ遲いよ。

今こそまゐり大將、どこがおそいよ。(朝)

○晝間(晝飯)おまはせ(副食)に何か買うてきたよ。若狹の沖のわかめ買うてきたよ。(晝)

○晝ま持ちをば何處まで送りた。なさけ(地名)の田にとてならまで。

○晝まは出來たが、箸を倒れ、とのばら、たらり〳〵と箸を倒れ、とのばら。

○苗代のすまの水、眞實からの鏡よー。

○代かきが、しろにおはれて、切り蹴なんどでならした。

○筑前岡山市太郎さんが、易者に女房をとーられた。さすが士きかんと云うて野原でかたきを取るといなう。

○ヤーレ、せんなや、せせりや、せんなや。せんないなかの泣く子や。泣く子もあれば泣かぬ子もある。泣かずにそだつ稻の子。

○けふの田主は七福神やら、降りよる雨がてりいだす。

○奥山の草刈に栗の花も咲いたり、藤の花も咲いたり。

○苗ようて、代ようて、おどしよければ、此田にやよい稻が萬石。

○さつきには、夜は夜まで朝はまた、じんでうの鐘といちど。じんでうの鐘は誰がついたか、つらにくや。

○可愛とのごと臼を挽きや、臼がてんぐるまで、中まはる。

○臼はじせん〳〵挽けやこそまはる。ひかずまはるは風車。

○これが今年の初の臼よ。ちぎやう增します五萬石。

○岩國の算盤橋は、百間敷石錦の流れ、三國一のよい橋。

○臼を挽くのに、しよさ引きやいらん。腰をたるめて、まるましやれ。(大島郡)

山口縣　田植歌

揃　端揃

○そーろうたーやー、笠かーさーのはがそーろうた。どーこ(何處)がさーが。やーまーとがーさに、大和笠なーらがさー。奈良身

○笠の端の揃うたは、筑紫笠に、京笠に、大和笠が揃うた。

○代かきが代に追はれて、きり蹴ではやめた。

○けふの田の田主樣のお屋敷が、ゝりを眺むれば、七町五反の御屋敷が、ゝり、お倉の戸前が七戸前。

○音に名高い算盤橋見やれ。百間敷石錦の流れ、橋が五そりあるといの。

○こびるまに炊いたる米やー千石。千度でもどろよ千石。千度は物の端よ。萬石むくろでもどろよ。

○うゑい小早少女。みのと笠とを買うてやるから植ゑ。みのと笠とをたまはるならば、はつたんなりとも植ゑまする。

○苗代の隅には粮がようみのるとい。京から番匠よび下し、藏を建てやう、どーてやら。

○今日の代かきは三人ぢやが、どれが内の嬌やら。地白の襦袢に、地紫のこーがい穿いたそであらう。

○田主殿の前田には、錢で塔を組まれたら、黄金橋をかけうや。

○しうとどの（舅殿）の朝植にや、なして婿が遅いか。袴をはくぢやとて、それで婿が遅いの。

○宮嶋の御廻廊はどなたが建設なされた。ひんだのたくみに、竹田の番匠、清盛さまの御建立。

○おひるまのごさいにはなにを献立なされた。ふきにめう（蕗）がに竹の子に、これを献立なされた。

○西の底の暗いのは明日の雨の基やら。もしも自然雨なれば、みのと笠とをたのまうや。

○田うゑかうゑて、ばんにやー庄屋へよばれ（招待）ぢやが、折へなにゆー（何）積んでいかう。

○ひる前の早少女と船の梶とりやふりあけよ。そらに心あるぞいの。

（玖珂郡）

○田主さんの娘のかけたる襷（たすき）、おんつきまぜのよいたすき、躑躅（つゝじ）に椿（つばき）葵の花におつきまぜのよい襷。

○今朝鳴（なき）いた鳥の聲、よい鳥の聲なう。けふの田を千石（ごく）というてないた鳥のこゑー。

○小晝間にたきたる米は千石、餘りに戻るらう、千石餘りにもどらねば、出雲のお倉にもどるらう。

○晝前と呼ぶなれば、もどれや小まん小女郎。誰も彼れも引連れてもどれ、こまん小女郎。

○笠をさせ八つの鐘がなるなれば、八つにさしたる笠はまことの日笠。

○朝うたのー神樣は東の方からおいでるなう、龍のたづなに春の駒、東の方からおいでるなう。

○笠のはのそろうたのは、どこ笠（がさ）がそろうた。つーくしつほみ京笠にや、大和がさがそろうた。

○田ぬしさんの花庭にや、金の鶴が舞ひさがる、金根ばら〳〵兩はがひで、其家繁昌と舞ひさがる。

○田主さんの山には栗の花が咲いたけな、七重花が八重に咲いたけな。

○筑前高山市郎兵衞さんは、易者に女房取られた。さすが士、聞かぬと云うて戸中で仇を打つた〳〵。

○三丘で名高い大浪さんは、小島で切腹なされた。

○畑の中の櫻木はようてわるいもの、。ヤレ花を折るというて、豆の腰ををらした。

○今の田の田守屋敷のおかゝりをお見やれ。お屋敷ばかりが七町五反、お倉の戸前が七戸前。

○田守の屋敷の花嫁は、見事かすりを織るといの。大の字八の字だいべのかすり、鶴龜松まで織るといの。

○太閤記（たいかうき）の十段目にやー、泣く〳〵ひき出す鎧櫃、かはいや夫十次郎さんが、別れの盃するといの。

○宮嶋さんの御建立はどなたが細工をめされた。ひんだがたくみと、竹田のばんじやう、和泉の大工めされた。

○音に名高い岩國の算盤橋は五そりよー。百間敷石錦の川で、三國一でのそり橋。

○今はいそがし田植時、こゝでは馬に田をすかせ、そこでは苗を植ゑる。すかせる植ゑるいそがしや。それから度々田草取り、次第手數がふえて行く。どーぞ秋まで都合よく、天氣もつゞけ、雨もふれ。

○わせ植ゑ出どて水つればー、こがねのお箸玉のうよーぎ。

（熊毛郡）

○朝起きて手水（てうづ）をつかひ參らせう、御前のまへに。

○あさはかに前田をうゑて、千石づみの倉をたてうに。

○あさ歌は七里ひゞく。八里もひゞく人はさとーなれ。

○あさ起きてしづめて聞けば鳥なく、しなだの森よ。

○ほんさん〳〵。豆の錢はらやーれ〳〵、夜など質において。

○朝露に花かごさけて花つみに、御前のまへに。（以上朝）

○ちゆーじんまいの今日、棟どこをてらしします。八萬四千の大光明、しうーごくてらしましますなう。

○おひるまのおさいには何を献立（こんたて）なされて、一に蕗、二にめうが、三に栗や松だけ。

○田主樣のわさ植（早稻）ゑにや、牛が千疋そろうた。牛が千疋そろうたら、人は萬も居らうなう。

○今朝の殿の引馬に何けが揃うた。かーけ、かす毛、こくろけの者、馬がそろうた。

○山口のおぎをん樣の御祭、其日の山ひきは、もみの鉢卷千人揃へ、エンヤラヤッサで引くといの。（以上日中）

○（出し）朝おきてしづめて、（附け）聞けば鳥なく。しなだが（取り）もりに鳥なく。しなだが。（朝）

○（出し）たいかふさま書のやすみ、なによかしをめされた。（附け）しろがのぬりのほんでなんまんがしを。（取り）めされた。たいかふ。（晝）

○（出し）ひはくれる、ヤ、よにかゝる、こまはどこへ。（附け）尾越え谷こえ、たにたに川の下り松へ、（取り）つないだ。ひはくれる。（夕）

○忠臣藏の七段目に、ヤー、おかるが嫁入を、するといなう、やつこがやつしてかくといなう。

○宮嶋の廻廊はどなたがとうりや、めされた。あなたがとうりやめされた。ひだのたくみに、たけだがばんしやう、あなたがとうりやめされた。

○昨日まではよい友達よ。けふは殿御をそしれた。上の山の青芝が萠立つ樣に思ふのに。

○しろかきは、あがられたが、なりはどこへ行かれた。大きなふねにとびのりて、わかめとりに行かれた。

○日のくれのはやか子は、親も子もよしらんてせーいき、はしゆき。

○狹い小路の傘はさしやうがござる。中をりんとさしあけて、さして通るものやの。

○川のはしを架けうや、かねのはしがんがらめく、板ばしをかけうや。可愛とのごがわたるによい。

○こびるまに、たいたる米は、千石四方てもどらねば、泉のみくろでもどるなう。

○吉川きんもち、岩國さんの算盤ばしや五そりそりた。お國で名高いそりはし。

○はたけの中のさくら木は、ようてわるいものや。花ををるというて、豆のこしを折られた。

○小石小川のうの鳥を見やれ。小鮎くはへて瀨をのぼる。

○田主の娘のかけたるたすき、縫ひ目しるしをお見やれ。つゝじにつばきにあふひの花、梅の折枝。

○田ぬしどのせどやまに、栗の花が咲いたとな。七色八色にも、九つ十いろと咲いたとな。

○今日の田の三寶樣はどちらの方からお出るの、く〳〵。龍の駒に錦の手綱に、南の方からお出るの〳〵。

○田主殿の前の田には、錢で塔を組むといの〳〵、錢で塔を組みやまた、黃金の花が咲くといの〳〵。

○苗代の水はまた唐の鏡買ふといの〳〵。かはいとのごに影を見せ、唐の鏡買ふといの〳〵。

○朝はかのーさんばうさまー、どつちの方ーからおいでなう。栗毛のこーまで、錦の手綱で、東の方ーからおいでるなう。（午前）

○わかひるのー、お日はわかやぎにおくよりつけはよちるみちは、よしなぐさみにならうなう。（正午）

○日はくれるー、ヤ、よにやかゝる、こーまーどこへつなだー。（暮）

○けふの田の農神さまー、どちらの方からお出でるなう、綾の鞍おき錦の手綱で東の方からお出でるなう。（中間）

○こゝは道ばたよく植ゑておきやれ。あすは殿御さの水まはり。ヨイヨーサー。

○今日の野神樣はどつちの方からお出るなう、綾の鞍置き錦の手綱で、東の方からお出るなう。

○あーさーはかーの三寶さまどちらの方からお出でたなう。其の馬に錦の手綱で、どつちの方からお出るなう。

○晝飯が出來たとや。膳を配れ殿原。猫足に鉤足に、膳を配れ、殿原。（晝）

○苗代水は、鏡かや。思ふ人の影に寫す、からの鏡かや。

○日暮の千鳥やら笠のへりよまはるの、あがれよと、まはらいで、植ゑよとまはるなう。（暮）（都濃郡）

舊時の田植歌

○笠のはの、そろうたは何處笠がそろうた。つくしつほみ、京笠に、大和笠がそろうた。（てへんうた）（朝）

○田主の娘が品よく化しやうて、おじよいの柱によりそうた、よりそうた、よりそうた、く〳〵、ソレおじよいの柱によりそうた。（てへんうた）（四ツ時）

○晝飯前の村女と、舟のかぢとりは、ふりあけて〳〵、空に心があるといなう。（晝前）

○晝飯のごさいには沖でさだえひくとなう、沖でさだえひくなれば、内では米をとぎよれ。（てへんうた）

○お晝飯が出來たぞや。あがれ、こまんこ女郎。誰れもかれもひきつれて、あがれ、こまん小女郎。（てへんうた）（晝飯）

○宮島さまのごふしんには、どなたが棟梁、なされた。ひだの匠に竹田のばんしやう、兩所が棟梁なされた。（書後）

（都濃郡）

田植節

○笠の端のそろうたは、何所笠が揃うたー。筑紫筑後に京笠に、大和笠がそろうた。

○田主樣のせど山には、栗の花が咲きたとなう。七花八花さく、九の十花咲いたとなう。

○名馬の駒に錦の手綱で、東の方からおでるなう。

○お國で名高き岩國の錦帶橋は、五そり百間敷石、錦の門に三國一の大橋の。

○山口のおん祭りはおもしろひおん祭り、敵に大鼓をうたせたり、おのにすゞをから〳〵。

○けさの殿の引馬に、何毛がそろうた。かけ、かすけ、京くるけに、青い馬そろた。

○たのしのそらに、さす花、いきの花、酒の花、咲いちや德の花、たのしの。

○傘をさせ、八つの鐘。八つにさいた傘こそ、まことな日傘なう。

○京から下りた前手斧、何をけづる前手斧。とーたい、たいとー船のともをけづる前手斧。

○あとの月の二十四日の觀音參り、おんもどりいいしやしうもん、くまな權現、いしきり、住吉、天王寺、高野聖ひーでり、おほかの松へかけをく、刀にとゞめをさいたら、暇といふ字はごいせんなう。

○もとの殿御を出るときは、まきはたかねりて出たら、それでも女のかいけふなら、よい馬によい鞍に、こーがいつめの、金鞍置いて、乘りながら、けんどーしよー。

（以上田植節）　（都濃郡）

○だせば早うにだせ、降松船を、かさどがゝりで物思ひ。

○笠戸よいところで、みやのす磯うけて、島田あらしがそよ〳〵と。

○今日の田の田主どのおかみさま、おいそがしうーござるの。緋縮緬の帷子に、たもと襷かけてなう。

○田主殿の、おかみさまは、物の祝ひにおほじやうず、一にふき二にあうが、さんにーや、くりやまつだけ。（大上手、苗代、栗、松茸）

○なましろのすみ〳〵にや、もみがよりきちそろー。

○けふも毎日つぼたを植ゑて、晩にや殿御に叱られる。サーヨーイヨサ。

○此處は道ばた、よう植ゑておきやれ、あすは殿ごの水まはり。サーヨーイヨサ。

○植ゑて下され、一かぶなりと。千疊敷とも思ひます。サーヨーイヨサ。

○兵庫の沖のかざり舟、どこのとのの舟やら。金の幕をうたしたは、越後さんの舟やら。

○今日の田の三寶樣どちらの方からおいでるといの。龍の小馬で、錦の手綱で、東の方からおいでるといの。

○田主の娘のかけたる襷の縫ひぢらし、菊に巴に葵の花に、櫻のをり枝。

○田主殿のせど山にや、栗の花が咲いたといなう、七花八花咲いて、九の十花咲いたいなう。

○宮島樣の御ふしんは、どなたが棟梁なされた。ひんぢや（飛驒）

○今日の田の田主殿は祝事が上手ぢやの。一にや若苗、二にや蕗、三にや栗や松簟。

○太閤樣の晝の休みに、何ゆーかし召された。玉蜀黍菓子召された。

○代搔きは上りたが、うなりや何處に行かれた。沖の御舟にとび乘りて、若布を引きに行かれた。

○代かき上りたが、うなりはどうか。あれは早船に飛び乘つて、若布買ひに行かれた。

（佐波郡）

○婿殿はござりたが、何を菜にもろか。前の畑のちしや葉をひきみしり、しほをこんならこんならよ。

○一石入る臼へ麥を九斗入れて、かどへ走り、せどへ走り、嫁の戀しさよ。

○天王寺の御堂で、ォヤ御棟のかやがたらいで、それを、てんでにからいで、なにうてんでにかろよ。

○植ゑて三尺穗に出て五尺、鎌で刈る時やひろやぶき。

○田植ゑ〳〵早少女あ手もとをいそけ、蛙はしめてなけたくみに、たけたがばんじやう、兩者が棟梁なされた。

〳〵。

○天王寺の溝に御棟の萱が足らで、手傳に刈る樣な。

○一石入る臼に麥を五斗入れ、背戸へ走りかどへ出、嫁の戀しさ。

○早少女は五十人、麥は二升五合、其れはまだ多いなう、麥を五合殘せよー。

○廣い狹いはあせなり田なり、ヨねーさ植ゑておじやれや、ヤーレーノー、ましを入れて。（吉敷郡）

○婿殿の御出には何をもてくる、升と斗かけと、俵もて來た。

○かどにやきて待つ、十夜はみてん、庭にしの箱二度なけた。（返し）あやる人なら出てあやれ。（美禰郡）

麥つき

○石入る臼へ麥を九斗入れて、せどへはしり、かどへで、嫁の戀しさよ。（朝）（美禰郡）

書まもち

○ひるまもちが來るやら、おきのおんぶねほばしらゆりたて、風をまつから。（午前）（美禰郡）

袴たて

○京の町のやーさごや、袴たちの、じよんすよー、やをやたつ、やをやのひだをとるよー。（午後）（美禰郡）

○苗代の早少女が、豆のかぎゆー落して、歌うたり、舞うたり、頭たゝいたり。

○おほつぎの西びらに、狐がこんと泣いたよー。

○正月の年男、斗ますとかけて、俵を持つておいでるの。

○五月雨ほどこへこかれても、今は秋田のおとし水。

○舅どのの御田植に婿の遲いはー、今こそ參りた田裝束で。

○奥山の椰の葉は、昨日刈か今日刈か。昨日刈はしなばへて、さんさ今日刈よ。

○この畝町よく植ゑて、婿に取らせう。婿も婿、乙婿にとらせう。（阿武郡）

端歌

○今日の田主は（大名）威德だーみやうよー、こーがねー楊枝を、くーはーへた。

○朝はかに植ゑた田を見れや幾らに、ざらりなびいた。

○上の町から下の町まで、うら廣かれや苗の葉。

○代かきが代に追はれて、切鍬を速めた。

○十七が寺へ參れば、御經の聲もしどろな。

○苗よし代よしうるいつぎよし。北田にや米が千石かへし、千石は播いた種、又萬石も出來ませう。（阿武郡）

大歌

○なへしろ（苗代）ーの、すーもーわにや、もみー（籾）はーよーりきー（寄）たーいーなう、京の番匠（ばんしやう）をー呼び下し、くーらを立ちよーもとゐ（基）ーなう。

○田主どんの酒部屋にやよい酒に酢糞がたとう〳〵糞がたとうはよい事しやたゞみ御酒もあらうの。

○晝間のおさえにや、沖にやさゞえ引くやら、沖にやさゞえ引くなら、内にや米を積まうの。

○今年この田に黑鳥が巢をかけて、何を持ちて廻る。斗にますかけに、俵もちてまはる。

○今朝またごよに出て、駒はどこへ繫いだ。尾こし谷を越し、さんがり松へつないだ。

○あんさ日さす、雲（朝）くんもーはかりにかけごのれんひよーこかねにきんさに。

○おんなり衆はお出る道は、赤い帷子でびんなりしやんなりあすんだ。

○紺屋の垣見れば、染めほしたんりー、萩の花色に染めほしたんりー。

○京の町の乙姫は袴たちに上手なう。ヤ袴たつて八針ぬふ。ヤひだ〳〵もとる。ヤレ。

○かんさをさせ。かさらがしんたにでんでもよい、さもてるけんなよ。

○ひるまは出來たが、箸を倒れ、殿原、さんらりさらりと箸を倒れ。

○代かきはあがりたが、おんなり衆は何處へなう。前の船

へ飛び乘つて、若布刈りに行かれたー。

○太閤のひるねには、何をかしにだされたー、白銀の塗りの盆、なんがんがしを出されたー。

○ゆんだのゆめ、ゆけたのひんくつ、ひんだりやつ、みぎはの、こんこのつ。

○代をかく殿原、著たるかたびらんねー、ともへにはへつまる(又まつ)、袖にさゝのまる。ヤレー。

○今日の日を御覽じよ。山の端にかんかりた。ヤレ名殘惜し、ヤレついてなんごり。

○あえ川の中の瀬に、ちごが笛をおとしたー。やなをせけ、やなをせけ。やなに笛はかゝるなう。（阿武郡）

小歌

○大歌歌うて、小歌うたはにやー、尾の無い鳥がたつやうな。尾もない、羽も無い鳥、今朝立つ鳥の羽音え、たつ鳥は羽でこそなう、けさたつ鳥の羽音よ。

○ひよ〳〵と鳴くはひよどり、小池に住むはをし鳥。をし鳥の思ひ羽をなう、一羽ほしやゝたのみに一羽根が千兩するとも、羽根をば頼みにはいや〳〵。（阿武郡）

○朝まゝたくよりや、一石入る臼に、麥九斗入れて、せどへさり、かどへ出、嫁が戀し。サンヨーエ。

○山越し谷越し、晩の宿がどこかえなう。疊は狹し、夜は長し、日は長し、曉起きて空きけば、空にかん〳〵鐘の音、せどにはどん〳〵どろの音、何が不足で言はれうか。

○可愛らしい二つ三つなる初子が、楓の樣な手をついて、とゝさん戰爭においでるか。辛抱しなされ國の爲め。（大津郡）

草取歌

○わせ植ゑうとて水くめば、水もともに黃金つる。

○ヤーレ、けんき心か枕をなけたよー。なけたまくらにやとがはないよー。ヨイヨー。（熊毛郡）

麥扱歌

○京から、からはし下つたか。なにうこぐからはし、麥こぐからはし、小麥こぐからはし。（阿武郡）

盆踊歌

○お寺の門口に蜂が巢をかけて、ほんさ出れやさす、はいれやさす。（都濃郡）

○お寺の門口にや蜂が巢をかけた。ほんさん出れやさす、はいれやさす。（佐波郡）

數へくどき

○一に神明神代の事よ、三度の淨土や安樂世界、三で災難もしある時は、死出の山にも往生申す。五位の如來の方便よりも、六しりんでんあやかりたまへ、七ししょーぐん佛のことよ、八くろいすい神代のことよ、九まん淨土にそなはる時は、十よ萬よのさとりをひらく。

○一に稻作萬石滿ちる、二にはにつこりお笑ひ顏よ、三に榮えるこのおん館、四つよろこび數限りなし、五ついつでも祝の座敷、六つ昔も萬代つゞく、七つ七福はや窓に來て、八に八方八つ倉立てゝ、九まん菩薩に守らせ給ふ、十で德あるこの御館。（阿武郡）

南條踊

南條元續嘗て踏舞を好む。吉川元春も亦之を翫ぶ。元春の元續を伐つや、陰に踏舞の壯者を擇び、踏舞子に擬し、羽衣石城に遣し、期を約し、急に掩擊して元續を走らす。後世舊岩國藩士の子弟踏舞の古裝を傳へ、南條躍と稱せり。

入端の起り

太鼓

テゴデゴデン、サー、テゴデコテン、サー、(地)テツトーテンカラカツカラカ、サー。

入端

○(拔ヨリ三ツ目)目出度き御代の御庭の懸り(附)黃金の蔦が舞ひ掛る〳〵。

間の太鼓

トーテゴン、テゴン。テゴデツトー、テンテコ、テンテコ。テツトー、テツトー、テンテコ、テンテコ。テ

山口艇　南候踊

ツトー、テツトー、テゴデゴテンテコ。テツトー、テツトー、テゴデゴテンテコ。テツトー、テツトー。テーン、トーン、(地)テンテコテー。

座免喜

○(三下ヲチハヨリ)ヤー十七八がん淺川渡ら。(附)我妻なるなら、負ひ渡さう〳〵。

間の太鼓

テツトー、テンテコ、テツトーテンテコ、テツトーテンテコ、テンテコテー。

又テツトーテンテコ、テツトーテンテコ、テツトーテンテコ、テンテコテー。テーン、トーン。(地)テンテコテー。

○(三下同前)ヤー先づ負ひ渡せん〳〵、(附)あの山蔭がん有る程になう。

間の太鼓(前に同じ)

○(三下同前)ヤー山蔭にんもし人あらば、(附)そなたと我とは緣まかせ〳〵。

間の太鼓(前に同じ)

五二八

間の歌

○(二上ヲチハヨリ)ヤーあらめでた。(附)天に黃金の花咲いて、地に白銀の實こそ生りけれ。

○(二上同前)ヤー淀川の、(附)深き底なる鯉鮒を、袖を濕さで、拂ひがが不思議や〳〵。

走り踊に移る太鼓

テツトー、テツトー。テゴデツトー、テゴデツトー、チヤン、チヤン、チヤン、(衆)ハリ、エーエーエー。

走　踊

○(三開ヨリ)ヤー音に聞こえし吉野の櫻、(附)イザヤ諷うて花を見て行かう〳〵。(衆)エーサー。

間の太鼓

(一)テンテコ、(二)テンテコ、(三)テンテコ、(四)テンテコ、(五)テンテコ、(六)テンテコ、(七)テンテコテー、サー。

(一)テンテコ、(二)テンテコ、(三)テンテコ、(四)テンテコ、サー。スツテコテンテコ、テンテコテンサー。テンテコテンツトーテンサー。チツカシコ。テンテコテー、サー。チツカシコ、テンテコテー、サー。テンテコ、テンテコ、テンテコ、テー、サー。テンテコ、テツトー、(衆)エー。(地)チヤン、チヤン、チヤン、(衆)ハリエーエーエー

○(三開)ヤー音に聞こえし難波の梅を、(附)いざや諷うて、花を見て行かう〳〵。

間の太鼓(前に同じ)

○(三開)ヤー音に聞こえし大坂の大藤、(附)いざや諷うて、花を見て行かう〳〵。

間の太鼓(前に同じ)

○(三開)ヤー音に聞えし千本の櫻、(附)いざや諷うて花を見て行かう〳〵。

間の太鼓(前に同じ)

間の歌の太鼓は間の太鼓の末を(テンテコテツトーテーン、トーン(地)テンテコテー)と打つ。

間の歌

○(二ノ上圖扇ヨリ)ヤー浮雲を、(附)帶に駿河の富士の山、廻りて見れば結び目もなや。

山口艇　南候踊

○(二ノ上同前)ヤー宮島の、(附)彌山の空の晴れ時雨、濡れて、や鹿がひとり行くらむ〳〵。

由利踊へ移る太鼓

テツトーテツトー、テゴデツトー、テゴデン、(地)トーテンカラカ。

由利踊

○(三頭)ヤー淀の川瀨の水車、(附)水車、誰を待つやら來る〳〵と、來る〳〵と。

附歌の太鼓

カラカチツテゴデン。

附　歌

○ヤー鄙蹲椿は山照らす、(附)花の千松、ヤレ御所照す。(衆)エーサー、トーテントー。

間の太鼓

テンテコ、テンテコ、テンテコ、テツトー(衆)サー。

テンテコ、テンテコ、テンテコ、テツトー(衆)サー。

スツテゴテンテコ、テンテコ、テツトー(聲)サー。
スツテゴテンテコ、テンテコ、テツトー(聲)サー。
テンカラ、カツカラ、カツカラ、カツトー(聲)サー。
テンカラ、カツカラ、カツカラ、カツトー(聲)サー。

前より大返しにうつ。

テゴデン、(地)トーテン、カラカ。

○(三頭)ヤー掛けて好いのは玉簾、(附)玉簾、掛けて惡いは〳〵、薄なさけ〳〵。

太鼓附歌上に同じ

○(三頭)ヤー何とさいたる枕やら、(附)枕やら、夜中〳〵に目を覺ます〳〵。

右に同じ

○(三頭)ヤー伊勢の山田の力石、(附)力石、締めた斗りで〳〵、夜を明かす〳〵。

右に同じ

○(三頭)ヤー君も夜舟に召すならば、(附)召すならば、我も車で〳〵、都まで〳〵。

右に同じ

○(三頭)ヤーいかな山にも霧が降る、(附)霧が降る、御身思ひに〳〵、霧がない〳〵。

右に同じ。但し間の歌へのうつりは、間の太鼓(テンカラカツカラカツカラカツトーテゴデントー)、間の地(テンテコテー)と打つ。

間の歌

○(二ノ上ウチハヨリ)ヤー浮雲を、(附)帶に駿河の富士の山、廻りて見れど結目もなや。

○(二ノ上同前)ヤー宮島の、(附)彌山の空の宵時雨、濡れてや鹿がひとり行くらむ〳〵。

芋踏へ移る太鼓

テツトー、テツトー、テゴテツトー、テゴテツトー、(地)チヤンチキチヤンチキ、デンテン。

芋踏

○(三頭)ヤー播磨の書寫の、(附)ヤ書寫山寺の、(出)ヤ御兒童の出立ヤ、(附)今朝こそ見たれヤ、(出)京編笠にヤ、(附)四手切り掛けてヤ、(附)御顏の月のんヤ、ほのほのと、ハンヤサー、(附)御顏に月のんヤ、ほのほのと。

間の太鼓

テン、テートーテー、(聲)ハンヤサー。
テートーテートー、テンテコテー、(聲)サー。
テートーテートー、テンテコテー、(聲)サー。
テンテコテコテコテコテコテー、(聲)サー。
テンテコテコテコテコテコテー、(聲)サー。
テンテコテートーテートーテー、(聲)サー。
テンテコテートーテートーテー、(聲)サー。
テン、テートーテートーテートーテー、(聲)サー。
テンテコテートーテン、(聲)エー。
(地)チヤンチキ、チヤンチキ、テンテン。

○(二の頭)ヤー乾の隅の、ヤ(附)三本榎、榎の實は生らでんヤ錢が生る、ハンヤサー、榎の實は生らでんヤ錢が生る。

間の太鼓(上に同じ)

○(二ノ頭)ヤー長者ん殿は、ヤ(附)今世の盛りヤ眞砂に錢をんヤ踏交ぜて、ハンヤサー、眞砂に錢をんヤ踏交ぜて。

間の太鼓(上に同じ)

山口縣　南條踊

○(二ノ頭)ヤー御身は己を、ヤ(附)細いとおしやるヤ。(出)細谷川の、(附)小椿を御覽ぜ。(出)細けれど花はアンヤ咲き候よ、ハンヤサー、細けれど花はアンヤ咲き候よ。

間の太鼓(上に同じ)

○(一ノ頭ヨリ)ヤー白銀延べて、(附)襷に掛けて黃金の舛でんヤ米量る、ハンヤサー、黃金の舛でんヤ米量る。

間の太鼓(上に同じ)

間の歌へ移る太鼓は間の太鼓の末(テンテコテツトーテン)を(テンテコテツトー、テーン、トーン、(地)テンテコテー)と打つ。

間の歌

○(二ノ上ウチハヨリ)ヤー浮雲を、(附)帶に駿河の富士の山、廻りて見れば結目もなや。

○(二ノ上同前)ヤー宮島の、(附)彌山の空の宵時雨、濡れてや鹿がひとり行くらむ〳〵。

中引

太鼓は間の歌よりザメキの地にうつす。

○ヤーおんじやれ、若衆ヤ、（付）御暇申す。明年参らう又参らう、〳〵〳〵〳〵。

戻し

太鼓前に同じ。

○（三下）ヤー笠立つ烏もん、（附）戻せば戻らん。今一度戻せ、押戻せ〳〵。

問の太鼓（座免喜に同じ）

○（三下）ヤーおんじやれん、（附）花見を始めん、吉野は今がん、花盛り〳〵。

問の太鼓（上に同じ）

○（三下）ヤー袂に硯ん、（附）短冊入れてん、皆花々にん、歌を掛け〳〵。（傘）エーサー。

問の太鼓上に同じくし、末々（テートンチャン）と留る。中休み。

起

太鼓

チーン、トーン、テンテコテン。

五三二

○（三ノ頭ヨリ）ヤー皆花々は、咲きこそ下れん、菱の花は咲きの上はる〳〵。

問の太鼓（座免喜に同じ）

問の歌

○（二ノ上サチハヨリ）ヤーあら目出度、天に金の花咲いて、地に銀の貨こそ生りけれ。

○（二ノ上同前）ヤ我戀は、深山隠れの埋れ木の、朽果てぬれど、人に知られじ〳〵。

由利踊に移る太鼓

テツトー、テツトー、テゴテツトー、テゴテン、（地）トーテン、カラカ。

由利踊

○（二頭）ヤー喜藏、花壇に付植ゑて、（附）本は八八、中は皆、うらは、（傘）ソーレヤ、歌書く筆の軸〳〵。イヨサー。（太鼓）カラカ。

太鼓　チツテゴテン。

附歌

○（二頭）ヤー庭の中ゑら綾笹、（附）ヤよれて掛らは、ヤレ縁で候。

問の太鼓（前の由利踊に同じ）

○（二頭）ヤー喜藏殿こそ伊達人よ。（附）長い刀に鍔掛けて、何處へ、（傘）ソーレヤー、御座るか喜藏殿〳〵。オイヨサー。

太鼓附歌（上に同じ）

○（二頭）ヤー喜藏殿こそ伊達人よ。（附）榎の葉くしの小袖著て、何處へ、（傘）ソーレヤー、御座るか、喜藏殿〳〵。オイヨサー。

右に同じ

○（二頭）ヤー喜藏見たさに花植ゑて、（附）花の、（傘）ソーレヤー、木蔭に日を暮す〳〵。ウイヨサー。

右に同じ

○（二頭）ヤー喜藏見たさに濱へ出て、（附）濱の柳に腰掛けて、花の、（傘）ソーレヤー、喜藏を夢に見た〳〵。アイヨサー。

右に同じ。又問の歌へ移る太鼓も前の由利踊に同じ

○（二ノ頭ヨリ）ヤー宮島の、（附）彌山の笠の春時雨、濡れてや鹿がひとり行くらむ。

○ヤー住吉の、（附）御前の沖の潮路に、浮ん出でたる淡路島山〳〵。

走踊に移る太鼓

テツトー、テツトー。テゴテツトー、テゴテツトー、（地）チヤン、チヤン、チヤン（傘）ハリエーエーエー。

走踊

○（三開）ヤー住吉の〳〵、（付）四社の御前の反橋は、誰がかけつる、中反に〳〵〳〵。ヤエーサー。

問の太鼓（前の走踊に同じ）

○（三開）ヤー住吉の〳〵、（附）松の木の間に月見れば、しばし曇りて、又さゆら〳〵〳〵。

右に同じ

○（三開）ヤー鹿の音を聞き、山越せば、（附）山越せば、繼の道連面白や〳〵〳〵。

右に同じ

○（三開）ヤー我戀は〳〵、（附）細谷川の丸木橋、ふみかへ

されて、濡るる袖かな／＼。

右に同じ

○（三開）ヤー秋鹿が／＼、（附）身をば紅葉に隱せども、戀路になれば、顯れぞする／＼。

右に同じ

○（三開）ヤー清水の／＼、（附）橋の欄干に腰かけて、瀧のかゝりを眺むれば、やーら見事／＼。

右に同じ又問の歌へ移る、太鼓も前の走踊に同じ

問の歌

○（二ノ上ヨリ）ヤー宮島の、（附）彌山の空の宵時雨、濡れてや鹿がひとり行くらん。

○（二ノ上同前）ヤー住吉の、（附）御前の沖の潮合に、浮み出でたる淡路島山／＼。

返踊へ移る太鼓

テツトー、テツトー。

テゴデツトー、デゴデツトー、（地）チヤン、チヤン、テゴデン。

返踊

○（三頭）ヤー近江の國の六角殿から、眞正坊への引出物には何々ぞヤ。（附）獨鈷三鈷鈴鍋杖にヤ、（出）花瓶香爐燭臺天目見臺、硯や墨紙筆にヤ、（附）雜紙薄葉杉原なんどを引合してはヤ、（出）唐の掛繪を三幅一對御引きある、（附）御引きある。ヤーサーサ。

問の太鼓

テゴデツトーテン、（聲）エー。

テートーテンテコ、テートーテンテコ、（聲）サー。

テゴデコデン、テゴデゴテン、（聲）サー。

テゴデコデン、テゴデゴテン、（聲）サー。

テゴデートーテトントー、（聲）サー。

テゴデートーテトントー、（聲）サー。

テンテコ、テンテコ、テンテコ、テツトー、（聲）サー。

テンテコ、テンテコ、テンテコ、テツトー、（聲）サー。

テツテゴテンテコ、テンテコ、テツトー、（聲）サー。

テツテゴテンテコ、テンテコ、テツトー、（聲）サー。

スツテゴデゴデゴ、テンテコテツトー、（聲）サー。

スツテゴデゴデゴ、テンテコテツトー、（聲）サー。

テートーテートー、テンテコテツトー、（聲）サー。

テートーテートー、テンテコテツトー、（聲）サー。

テンテコテツトーテン、（聲）サー。

テゴデン、（聲）サー、（地）チヤン、チヤン、テゴテン（聲）エー。

テゴデン、（聲）サー。

○（二逸頭）ヤー眞正坊から、六角殿への引出物には何々ぞヤ。（附）先づ一番に鹿毛栗毛ヤ、（出）糟毛、河原毛、雲雀毛、月毛、眞黑、蹈雪馬、額星ヤ、（附）名馬揃へて御引きある／＼。ヤーサーサ。

問の太鼓（前に同じ）

○（二右同）ヤーさて其外に總鞦に鞍鐙ヤ、（附）太刀長刀眞羽の征矢、絃卷、半弓、籠手、脛當にヤ、（附）鎧、腹卷、敷皮共に御引きある／＼。ヤーサーサ。

問の太鼓（前に同じ）

○（二右同）ヤー坂東名馬に金覆輪の鞍投け掛けてヤ、（附）逸散出しては馬手の手綱を搔操り廻しヤ、（出）井澤の鞭を御遣ひあれば、さらりと出るが、さらりと留るヤ、（附）偖も見事な名馬かな／＼。ヤーサーサ。

問の太鼓（前に同じ）

○（二右同）ヤー大山ヤ、（附）につゞく嶽が三頭あるヤ。（出）一つの嶽の御名をばヤ、（附）生死が嶽とは申候。ヤ（出）生死が嶽には毘首羯磨を作られてヤ、（附）千仞萬丈に、萬巖巖嶽が威敵とは申候／＼。ヤーサーサ。

問の太鼓（前に同じ）

○（一頭）ヤー淡路島ヤ、（附）國の始と聞く時はヤ、磐戸の鏡、曇る間もなや／＼。ヤーサーサ。

問の太鼓（前に同じ）問の太鼓より問の歌となる。太鼓は問の太鼓の末（テンテコテツトーテン）を（テンテコテツトー、テーン、トーン、（地）テンテコテー）と地に移す。

問の歌

○（二ノ頭ヨリ）ヤー宮島の、（附）彌山の空の宵時雨、濡れてや鹿がひとり行くらむ。

○（二右同）ヤー住吉の、（附）御前の沖の潮合に、浮み出でた

る淡路島山〳〵。

引　場

太鼓は間の歌の地を少し延べて座免喜の地に移す。

○おんじやれ若衆ヤ（附）御暇申す。明年參らう、又參らう〳〵〳〵。

踊込の上打止めの太鼓

テゴン、テゴン、テコテー、サー。

テゴデゴデン、テゴデゴデンサーテンテン。（玖珂郡）

舞　歌

秋祭に演ぜらるゝ舞にともなふ歌なり。

○下り給へ、をりの宮には綾をはえ、錦を並べ、御座を蹈ませうや。

○下り給へ、おりの御簾まき上げて、神樂の聲を聞こし召せ神。

○千早振るこゝが高天の原なるぞ。集り給へ四方の神々。

○榊葉を御舟にさして沖になば、舟楫そろへさして沖になば。

○土蜘の住みし岩地も里の子の、遊びし所になりにけるかな。

○榊葉のそだちはいづこ、日の本の瑞穗の國のそだちなりけり。

○敷島のやまと錦は染めてこそ、からくれなゐの色もあいまい。

○八雲立つ出雲八重がき妻ごめて、八重垣つくるその八重垣を。

○久かたの天の八重雲押し分けて、降りし神は我ぞ待つべし。

○岩戸山前の戸山は臺るとも、我住む山にくもりかけまい。

○萬代を浪は寄せ來て洗へども、變らじものは磯の色かな。

○大元の社はひはだ葺、黄金のたる木これで入れませう。

○入ましを今日とぞ知らさば、七坂や八坂を越えて今日ぞ入ります。

○八橋を七つならべて八つかけて、中なる道は神の入道。

○沖の瀬に立つる白浪磯に寄る、我身を清め神に詣ろや。

○日の本の本つ御國と御國はし、も、八十國のほぐにおや國。

○峯は八つ谷は九つ音に聞く、鬼の住む地はあらちきの里。（阿武郡）

萩住吉祭船歌

○目出たの又のエンヨーホ、ンホン〳〵ホ、、若枝は〳〵〳〵も、エヨエエンコノ〳〵〳〵エ、、さかハ、ゆーる、ノンヨーホ〳〵〳〵ホホ、ハハ、はもー、ホ、ホ、ホ、ホ、ン、茂る。

○ヤー志賀のからささきなる一つの松わからこ洛だんがいすじり、もじり、よんごーざる。マーつんづるきんづる、チリタラリン、すじり、たらはんもじり、たらおん。チリツルテレテン。

○きけひと、ホ、リヤレ、じよろや〳〵〳〵、じゆんれがなう、エンヨーホ、ン〳〵〳〵ホホ、、わし。

○わし、イヒ〳〵〳〵も、エヨエエンコノ〳〵〳〵エ、ヤラハ、イ、デ、ノンヨーウホ〳〵〳〵ホ、ホ、つーれーをまつ。

山口縣　萩住吉祭船歌　天神島歌

○ヤー皆も御ぞんじぞんさりまーせうがなう、うらのしよいんの小松の小枝に、もずがとまりて、あすの夜あけにはなわきりんや〳〵やえきりんきりんきともなう、扨鳴くよー鳥エ、なくまいか、又のエンヨーホ、ン〳〵〳〵ホ、鳥。なくーは〳〵〳〵も、エヨエエンコノ〳〵〳〵エ、、みやハ、まーの、ノンよー、ウホ〳〵〳〵〳〵ホホ、ほとー、ホ、ホーホ、ホ、ト、とぎす。

○ヤーわれがすみかは、たん〳〵〳〵丹波の山の谷合、たにぞこのー、扨しば、ハ、のヤレ、いをりの又の、エンヨーホ、ン〳〵〳〵ホ、なーつ、みやウハ〳〵〳〵こ、エヨエエンコノ〳〵〳〵エ、なれーどーも、ノンヨーウホ〳〵〳〵ホホ、ほたー、ハ、ピーヒ、ヒ、ア、わるい。目出たいーヤー若、枝ーはーもー。ヤヨイ。（阿武郡）

天神島歌

天神島は須佐港の灣口にあり。此歌は當地舊領主谷田半庵の作なりといひ傳ふ。

○抑天神島といふことは、昔都五郎といふ漁師あり。我こ

の島に宿らんと、筑紫の海のはるゝ〳〵といふかと見えて失せにけり。あまりふしぎといふしでにあまつみ神といはうたり。大慈大悲のかん世音、袖はぬれつゝかくや海苔石、高麗べりのたゝみ島、空にひとしき高山の、賴朝公の御時に、牧駒のゐしあととかや。東の山は野原とせ、西山はさこんとせ、二人仰を蒙りて數多名馬……鎌倉さして召すとかや。されば宇治川の先陣を、梶原とあらそひし、先をかけたる佐々木が乘りし池月も、此の牧より出るなりといふしでに、ひけやあづさの弓なれや。早島又よろひ島、をどしの絲は白石の、黑瀨の瀨をこぎ渡る。世も長磯月の出るをまちかたの、淨藏貴所（鰹）渡（どう）そきそにみはかあり。さりては宇佐のいのらせたまひ、さがり松とはなりたやなりたや。きうせきごんござる。蜑（あま）のよぶ聲々、ひん〳〵隙もまもなく、しほきとるのか賴冠（ほいかぶ）り、手拭三尺濱、浪のあや織る青浦ばま、浦島太郎ぜふかきや、うしもの浪の底なるみなとぐり、雨は降らねど笠松の、山にあらかみ大としや、さてはたつときひじき岩、神と君とのみちすぐに、朝からかゆる和田の原、やそしまかけて波もつゞみも打ちをさめ、うれしめでたいや。（阿武郡）

粉挽歌

○姉と妹とならべて見れば、姉は吉野の八重櫻、妹は小庭（たには）のこごめの花、母は小池のゐるじの水、父は大和のこぶし花、風にふかれてゆら〳〵と。（佐波郡）

餅搗歌

○鶴と龜とがどーいうて遊ぶ。お家ご繁昌というて遊ぶ。あれ御らんそこぢや。そこ見てなかぢや。エーゴモヤツサノサ。

○佐賀の丸山秀がたうせ、秀を馬鹿にさんすな。昔の花よ。ふろのふたとるせつもある。あれ御らんそこぢや。そこみてなかぢや。エーゴモヤツサノサ。

○わしが出します藪からさゝを、附けて、ドツコイサー、下されたんじやくを。ソリヤアリハラレ、底を底見てなかぢや。ヤツコラサーノサ。

○歌はさんせきところで變る、ところかはれば節かはる。

處々で歌のふしは變る、いつも變らぬ竹の節。（熊毛郡）

○えいこもえーや、たのもえやー、太郎兵衛がー、へこーかいたー、たてにかいたー、よこにかいたー。

○ゐーのこ、ゐのこ、ゐのこもちを、つかんものは、おにをうめ、じやをうめ、つのゝはいたこーうめ。（佐波郡）

地搗歌

○東西〳〵をさまり給へ、どーぞどなたもしづまりたまへ。さー〳〵これからもんくにかゝる。わしがもんくはだいこん畑、少しこゝらにぬけ目がござる。ぬけ目どころはひやうしをたのむ。

○總體地搗きと云ふものは、乾のすまよりつき始め、ぐるり〳〵とつきまはり、大黑柱がつきをさめ、大黑柱の其下にや、金銀黃金をつきこんで、其家や御繁昌。

○搗いてかためし地づきの祝、幾千代までも動きなき。

○さいとりや上（うへ）みりやれ、なはとりや下見やれ、雲井が見えるほどとりやぎやれ。

○これほど纖手がそろうたに胴木がみそする筈はない。（玖珂郡）

○ヤーエー、今日は吉日、ヨイ〳〵、日がらがようて、ハーリセーハーリーセー、やぐら取り立てぢをしめまする。アレワイセー、コレワイセー、ヤーエー、さてもなー目出たし、ヨイ〳〵、この御やしきは、ハーリワイセーハーリワイセー、下から龜をば、コレ浮き上り、ハリヤヨーイヨーイヨーイヨセー、アレワイセーコレワイセー、ヤートセー、セーエー、上から鶴をば、コレまひ下るー。ハリヤーヨーイヨーイヨーイセー、アレワイセーコレワイセー、ヤートセーサンヨーエー。（熊毛郡）

○今日はてんしやで、よは萬よし。地つきはじめが乾のすみよ。いぬゐすみより地をしめかくる。大工集（あつ）めてきしづをいたす。さしづいたして地繩（たなは）をひきて、四本ばしらが天地のやぐら、上でつくのが十六羅漢、下でつくのが四天王さま、右は春日の大明神、左は八幡の八幡宮、中は天照太神宮さま。一ぶ小玉をしき石にして、きんのへ

いこねごをはこがね、ひがら改めおむねあけ、たてる其日のおん棟梁さま、おふくあらため廡上下、つるに朝日の扇子を持ちて金の盃銚子をそへて、亭主のんでは大工にさしやれ、大工のんでは亭主にさしやれ、さしつさゝれつさかもりすまし、やなかやつなは琴の絲、むねのかやをはおんたかのはね、さても目出度い萬歳樂。エントーナー、ヤエントーナーヤ、地がしまらんどヤ、地がしまらんどヤ。

○(出し)だれもどなたも、手につなとりやれ。(附け)ヨーイヨイ。(出し)手につなとりて、どーづきよーあけやれ。(附け)ヨーイヨイヨイヤサー、(附け)ナンデモサンヨノセー。

○大石小石を、ソレヤつきまぜて、ヨイ〳〵、地盤をしつかり、ソレヤつきかためう。ハーヨイヨイヤナ、アーリヤリヤ、コーリヤリヤ、ナンデモセー。

○家の柱を、ソレヤ動きなく、ヨイ〳〵、礎しつかり、ソレヤかためうぞ。ハーヨイヨイヨイヤナ、アーリヤリヤ、コーリヤリヤ、ナンデモセー。

○御家の繁昌、ソレヤかぎりなく、ヨイ〳〵、柱をしつかり、ソレヤたてませう。ハーヨイヨイヨイヤナ、アーリヤリヤ、コーリヤリヤ、ナンデモセー。

○孫子の末まで、ソレヤゆるぎなく、ヨイ〳〵、柱のどだいを、ソレヤつきかためう。ハーヨイヨイヨイヤナ、アーリヤリヤ、コーリヤリヤ、ナンデモセー。

○御酒にお飯を、ソレヤ腹一杯、ヨイ〳〵、たべてやりませう、ソレヤこの地搗。ハーヨイヨイヨイヤナ、アーリヤリヤ、コーリヤリヤ、ナンデモセー。

○今日は吉日このやの地づき、たれもどなたもごくろでござる。どきはひやうしでもてる。なにかやります、ソレヤさんばそに。これの御家をながめて見れば、これの御家は金銀造り、一ににをもつこがねの柱、のこるざいもはみな銀づくめ、たるきなにとたづねて見れば、たるき殘らず眞鍮たるき、たるき揃へて、かないたうちて、あけるつちをば、きんづちあけて、瓦のこらず銅瓦、窓はきりまど黄金の窓よ。鶴は千年龜は萬年よ。これの御家は萬々年も、末が末まで動きはすまい。あまれ日出まや千鶴萬龜、またもつやいてよみたいけれど、これはさんそでながいのが御ぶれい、しばしやすんでまたくどきます。あとの音頭は若い衆に賴むぞ。その名ふれたるしもづけの國よ。なすの與市はほまれのしだい。與市おんとし十九やはたち、なりはこひやうに御座候へど、四國讃岐の屋島の磯で、源氏平家のおんたゝかひよ。平家がたより沖なる船に、的に扇を立てたるよしを、九郎判官義經ごらん、與市ごぜんにまねかれ給ふ。與市あれ見よ沖なる船に、的に扇を立てたちやないか。あれを一と矢で射落すならば、褒美望みに、ソレ得さすべし。敵と味方に見物させよ。與市御前にお受けを申し與市いそいでわがやへかへり、與市その日のいで裝束はかぢん赤地のにしきをめさる。鎧、緋縅、同じ毛の五枚、五枚かぶとに鍬形うたせ、弓は重籐切斑のすけ矢、右と左のおん手にもちて、駒は三歳名馬のこまよ。手綱ひきよせゆらりと乘りて、屋島磯邊とはや急がれる。風がはげしき波高ければ、的に扇もソレ定まらず。與市しばらく眼を塞ぎ、なむや八幡那須明神よ。力あはしてあの扇をば、射させ給へときがんをこめる。そこで氏神おつけがつゞる。たつみまはりていぬゐにたちて、東さがりと射おとしやおちる。ひいてはなせば扇の的よ。要ぎはからふつとりた。波にもまれし海にてしづま、沖の平家はふなばたたゝく、いくさなかばで與市に褒美、そこで義經御よろこびよ。めでためでたの若松樣よ。

（都濃郡）

○イーヤーかほどめでたきみよにてござる。アーヨイ〳〵。二本の柱は女神男神、神々をがみを表すなり。三本の柱はさんわうごんけん、四本の柱は四天王、五本の柱は牛頭天皇、六本の柱はろくはちまん大ほさつ、七本の柱は七なんそくめつ、そくしやう七尾の天神、八本の柱はやはた山にて弓矢のおん神で、八幡大菩薩、九本の柱はくほんのれんだいしやくわーの宮のみたちなり。十本の柱はじふぜんのくらゐ、高倉大明神、十一本の柱は十一面かんぜおん、十二本の柱は十二やくしのおんきやうもん、十三本の柱と三十六本の柱と、いぬゐのすみにとおしたて、のみとつちとをおつとつて、千秋萬歳萬々歳。アラ

ヨーイ〳〵ヨーイヤナー、アララツコララ、アラナーンデモヨ。

○かほどめでたき御代にてござる。かゝるめでたきをりからなれば、ばんじやうめされつゝ、ばんじやうにとつて、いつちしんりきけん、四こく王のばんじやうにても候はず。ヤ昔漢のめんていのおん時にばつとーとそーらんと二人の御僧、かんおんせいしのさうだんなれば、てうのはじめのことぶきは、春はひんがしに立てそむる、こればんもの、はじめなり。夏は南にめぐる日の、あやめがのきをかよふらん。さてまた秋は西の空、つきせぬ契をかたどりて、天の川原の橋柱しけりたつるやつきがんな、冬は北にて、つゝ井筒水こそごいへの寶なれ。寶をみくらにみつめぎり、まはれやあぐれや車井戸、かまどにぎあふこれ陰陽のふたばしら。アラヨイヨーイヤナ、アララコララ、アラナンデモセ。

○エエー一にやーめんだる(赤樽)二にやー油樽、ヨイヨイ、三にやー酒屋の六尺まるよ。アリヤヨイヨイ、ヨイーヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ヤーレナンデモセー。エエー四にはー鹽屋の鹽俵のまるよ、ヨイ〳〵、五にはー呉服屋の反物まるよ。アリヤーヨイヨイ、ヨイーヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ヤーレナンデモセー、六にやー蠟燭提燈のまるよ、ヨイ〳〵、七にやーしちとー備後まるよ。アラヨイヨイ、ヨイーヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ヤーレナンデモセー。エエー八にやー葉煙草國府のまるよ、ヨイ〳〵、九にやー櫛屋のべつかふまるよ。アリヤーヨイヨイ、ヨイーヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ヤーレナンデモセー。エエー十でをさまる重箱のまるよ、ヨイ〳〵、中ーを、あくれば餡餅まるよ。アリヤーヨイヨイ、ヨイーヤナ、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ヤーレナンデモセー。エエー十でをさまる餡餅まるよ、ハツト喰い付いたら三ケ月様よ。ヤレサンヨーエー。

（佐波郡）

○ヤーこれの御春戸の茗荷と蕗、めうがめでたのふきはんじやう。ヨイ〳〵ヨイトーナー。

○ヤー申し上げます棟梁様よ。オイ〳〵、永の世請で氣を、つかひ、オイ〳〵、ふしん程よく成就した。ヨイ〳〵ヨイトーナー。

○亭主喜ぶ家内迄、オイ〳〵、それにはつき〳〵人々も、オイ〳〵、常には少しもあがらねど、オイ〳〵、今宵は一つすごして、くださんせ。ヨイ〳〵ヨイトーナー。

搗き初め

○祝ひ目出度い扨御芽出度い。東西南北治りたまへ。四方四面の惡魔を拂ひ、今年しやきのとのえとよ。月は福月きさらぎ下旬、今日は吉日龍神定め、屋敷固めの祝ひをなして、天下開闢始めの神は、國常尊と申す。次ぎは大國主神さまをば守らせ給へ。御幣揃へて地神の祭り、御酒に洗米くもつみがしに、種々に供へた草々物を、感をんましまし諸の神の、黄の御幣を中にと立てゝ、地主御神又はやずの御神、青の御幣を東に立てゝ、祭る神をばくずぬちの神、赤い御幣を南に立てゝ、祭る神をばかこづみの神、白の御幣を西にと立てゝ、祭る神をば金山彦よ、黑の御幣を地にと立てゝ、祭る神をば水穗の尊、神を納めてやぐらに上り、東の方より地搗をはじめ、土地も堅固に固まりぬれば、昔し神代のそれやその始め、造りたてたるやし地の御殿、天津兒屋根の春日の神の、援けおかれし此の小屋作り、作りたてたる此の家なれば、扨も見事な千歳の松よ。家も屋敷も繁昌すると、こゝに御主人御年主様の、御武運長久御壽命長久、御家繁昌と守らせ給へ。

搗き上げ

○東西南北治りたまへ。四方皆の衆靜りたまへ。これがこの家のしまへの玉よ。どなた様にも御苦勞ありて、平一面固まりぬれば、敷の玉にて石据ゑなされ、銀の柱を立ちならべさせ、金を鴨居にけたはりかけて、命なが木を引きわたけさせ、水の垂る木の棟木を立てゝ、御幣三神様へ御酒洗米祝ひをいてなへ眞綿麻をやはりや熨斗昆布をかけ見かざりまして、末のひろがる扇をかけて、弓矢を立てゝ惡魔を拂ひ、中に天より鶴舞ひ下り、沖の津よりは龜這ひ來り、鶴も千年龜萬年、年も芽出度い世も目

出度いに、天下太平國家安全を、こゝに御家に御年主様よ。御武運長久御壽命長久、家も屋敷も繁昌すると、あとは目出度く納りたまへ。

（吉敷郡）

○ヤーヤー一合蒔いた其種が、一萬一千一百石、一斗一升一合一勺一撮で、はかりをさめて隣に渡すー。

○是のお家は八つむねづくり、黄金きり窓錢すだれ。

○一にめんたし錦の丸よ、二には庭屋の庭木の丸よ、三に酒屋の五尺の丸よ、四には鹽屋の大俵丸よ、五にはごき屋のいとじき丸よ、六に蠟燭半夜の丸よ、七に質屋の簞笥の丸よ、八にはぶとり煙草の丸よ、九には櫛屋鼈甲丸よ、十に扇の要の丸よ。開けて見たなら丸物盡し。

○一人目の早少女が、一合まいた其のたねに、一萬なー一千な、一石一斗一升一合一才まで、だん〳〵にはかりつほめて、二人目にや渡す。ハーリショイ〳〵。二人目の早少女がうけ取つたと云ふならば、二合まいたその種に、二萬なー二千なー、二石二斗二升二合二勺二才まで、はかりつほめて三人目に渡す。ヨイ〳〵ヨイヤナ、アーリヤン、コリヤリヤン、ナンデモセー〳〵。

（斯くして十人目に至りて止む）

（阿武郡）

えーとこなー節

○今日は吉日日柄がよいぞや。日柄がよいから天氣もよいぞや。天氣がよいから地搗のはじまり、綱うら三尺お互びきぞや。ゐのこ石には天井がない。青雲さかひに引いて見よ。

○こんど大黒天が社の細工をなされたり。わかやくにはきちじやうてん、銚子を持ちて出でられた。ごしゆてんの心配、恵方よりとさゝれたり。かほを傾く辨天が、扉の内からよつと出て、どつこいやらんと抱き留めたが、おもひの外よお腹の太いがほていさん、あたま長いがふくろく神、ぎりよう骨柄蛭子の笑顔、ごじゆみやう長いのを釣りさほたてゝ、たやすみたやみたや。君に忠孝する人、我はたからやるとの、この大黒様が。

○（かゝり）そも〳〵地搗と申するは、天神七代地神五代のみことなり。あとは申せど程はない。いぬゐの隅からつき初め、巽の隅にとつき納む。（多人數）ハリサエヤ〳〵。

柱立て

○一本目に立つのが大黒柱とつきをさめ、ハリサエヤ〳〵。

○二本目に立つのが恵比須柱と、ハリサエヤ〳〵。

○三本目に立つのが三方たいこーじん、ハリサエヤ〳〵。

○四本目に立つ柱がししやのおんかみ、ハリサエヤ〳〵。

○五本目に立つ柱が五ずゐてんわう様とし、ハリサエヤ〳〵。

○六本目に立つ柱が六社の御神、ハリサエヤ〳〵。

○七本目に立つ柱が七福神、ハリサエヤ〳〵。

○八本目に立つ柱が八ふく大菩薩、ハリサエヤ〳〵。

○九本目に立つ柱が熊野大權現、ハリサエヤ〳〵。

○十本目に立つ柱がじいう自在天滿宮、ハリサエヤ〳〵。

○十一本目に立つ柱が十一面觀世音、ハリサエヤ〳〵。

○十二本目に立つ柱が十二社大權現、ハリサエヤ〳〵。

（十三のから船からは略す）

どつとしめ上げ、さーいきづゐの今朝からの初物で、ゐのこのしゆうがういて來た。さーいきづゐなう。ハリエーハーエーヨーヤレコナアリハーノエー。（阿武郡）

木遣歌

○エーイヤ、そろたかえ、ハエー、ヤデナ、ソーラサ、ひたのしゆもー、アーラ、にしのかた、ハエーヤラ、ソーラ、そろたかやー、ソーラ、そろたならー、ソーラ、にしのこゐを、ソーラ、しつかりとー、ソーラ、てこのしゆもー、アーラ、そろたかや、ハーラ、そろたならー、ソーラしつかりとー、ソーラかいこんでー、ソーラ、つなうちもー、ソーラ、しつかりとー、ソーラ、ひいてとれー。ハエーヤデナ。

○なんばがりきやで、ヤーハハエーヤットセーヨーイナ、なんばがりきやで、はしらがおかるさんで、ヨイトコセーヨーイヤナ、アリヤリヤンリヤリヤンヨイトコセ、ヤーシトセー、アリヤリヤンノヨイトコセーヨイトコセ、

○（音頭）こゝはの、（はやし）インヤレショ、（音頭）すこしの、（はやし）インヤレショ、（音頭）こーだかで、（はやし）インヤレショ、（音頭）皆さんもえらかろが、山寺の和尚がに

うめんを、はしなしですくる樣に、すんすると、ひきとりやれ、さうすれやの、かんもとがおたばこて申します。

○(甲)おくやまのー、(乙)ハーエンヤラショー、(甲)大木が、(乙)同上、(甲)ぬつてでた。(乙)同上。

○(甲)うぐひすの、(乙)ハーエンヤラショー、(甲)ハ谷わたり、(乙)同上、(甲)其ひやうし。(乙)同上。

○ヨーイこの木はのー、ソーレヤ油木で、ソーレヤつる〳〵と、ソーレヤ造作ない。エンヤ〳〵〳〵。

○ヨーイこの木はのー、ソーレヤ天竺に、ソーレヤのぼる木ぢや、ソーレヤ辨慶の、ソーレヤ二番子が、ソーレヤひつぱるぞ。エンヤ〳〵〳〵。　(阿武郡)

舟歌

○月の九日に船乘り出して、出すも〳〵氣にかゝる。風はまじ西雪がふる。次第に浪は強くなる。柱や帆げたは折れてとぶ。手なはは切れる、艪かいは折れこむ。かぢやきかぬ。二十と四人がしてをる鉢卷手にとりて、西に向いては南無阿彌陀佛と手を合し、東にむかひては金比羅

樣へと願かけて、たすけたまへよ金比羅樣。内には兩親親ござる。つれそふによんほにや子もござる。それよりせんと衆が立ち上り、白木の三寶に九寸五分、頭の黑髪をそりおとし、白木の三寶にそなへおき、西に向ひては南無阿彌陀佛と手を合し、東に向いては金比羅樣へと願かけて、をがむ間にや、神の利益や風がなぐ。西風にまぎる其夜の其身のつらさ、いもやめまするぞ船乘りを。

○板一枚の船の底より、まだおそろしいこはいが、しよけんの人の口、人の口には戸がたてられん。

○艫も櫂も波にとられてわしや沖の灘、どこぞとりつく島がない。　(佐波郡)

○今津山から下ながむれば、深溝開作目の下に、少しくだれば藤尾山、多々から沖をながむれば、だるぜのせをばこん〳〵と、みはしにはたくが臼石の、中の石をばさび刀、遠石にかけて錆おとす。きはうつ波も丸尾崎、丸尾ぢや、三社三神社、三神樣に御禮して、はとのはなまでこぎ出して、へびのねとほど帆をまいて、ひの山あらし

を帆にうけて、はしりいくのが岬まで。

○西は西方、みだ釋迦如來、をがもとすれば雲がでる。雲にじやけんはなけれども、わがみの鬼が身をせめる。

○ヤーレー、おもてかよへーばーせんりがーいちりよー。ヤレ、あはずもどればー、ノーヤレ、またせーんりよー。

○やんさ押せ押せ船頭も水手も、ヨー押せば港が、ノーヤレ、近くなるよー。　(吉敷郡)

○やんさ目出たいな御祝。これの御歌の六つだから、白き鼠が三つつれて、又三つ連れてこばんくはへて運び來る。これが御家の六つ寶、これの御倉に納め置き、ふきの御世は目出たいな御祝。

○山口縣の越ヶ濱、上に木猿や池にほら、ちん鯛くろや、やじめ魚、外の小魚は大口の、めうと島には辨財天、奥の院には、嚴島、氏子はんじやう漁はんじやう、漁はんじやう守らせ給ふは、いつく島、ふきの御世は目出たいな御祝。

○舟に舟玉大明神、一の間天照太神宮、二の間は矢取の八幡宮、三の間春日大明神、舵は有馬の水天宮、帆は法華經八の卷、おも舵とり舵大天宮に小天宮、錨は金比羅大權現、積込む寶は七福神、金のなる木を植ゑどころ、ごゆい。

○やんさ目出度い正月初夢、きさらぎ山なる楠を、板にわかして船として、船は造りし寶船、白銀の檣を押し立て、、綾や錦を帆にまいて、鐵の板を舵にさす。白銀のなんばに、いくくまーて、みなはととのひて、ともには大黑、おもてには蛭子中には七福神乘合で、寶が島へ走り込む。中には萬を積み置いて、七福神の藏へをさめ置く。御世が目出度い、富貴繁昌、末は鶴龜五葉の松、これ程目出度いことはない。

○新造おろして浮きなりよ見れば、ともに大黑表にえびす、中に船玉福の神、エー七福神の乘り遊び、上から鶴が舞ひさがる、下から龜が舞ひ上る。鶴と龜との舞ひ遊び、何を舞ふかとながむれば、おふね繁昌と舞ひ遊ぶ。鶴は千年龜は萬年、末代までも御祝ひなー。　(阿武郡)

舟おろし歌

○(甲)めーでーたーいーなう、エーソーレ、わーかー、(乙)えーだーもーさーかーゆーるなう、エーはーもーエー。

(甲)木更木山の楠を、舟に造つて今おろす。ハーエー、白銀柱を押立てゝ、ハーエー、黄金のせみをふくませて、みなは手繩を調へて、綾や錦の帆を卷いて、ハーエー、寶が島へ乘りこんで、數の寶を積みうけて、ハーエー、旦那の倉に納めおく。うれしいな。(甲)めーでーたーいーなう、エーソーレ、わーかー、(乙)えーだーもーさーかーゆーるなう、エーはーもーエー。

(阿武郡)

木挽歌

○われは山鳥子にやこそまよふ。たちもかねてやこの山は。

(都濃郡)

機織歌

○ヤレサ大工さんお賴みが、私の部屋の窓、ちよいとあけて、しやんとたつやうになりーやせんかいのー、大工さん。

○飛脚さんお賴みがごんす。ちよいと持つていつて、しやんともどる樣にならせんかいの。

(大島郡)

鯨歌

初め歌

○祝ひめでたの若松樣よ。枝も榮える葉も茂る。竹になりたやみ山の竹に旦那榮えるしるし竹。納屋のろくろに、つなくりかけて、大背美卷くのにや、ひまもない。子持卷くのにやひまもない。兎角川尻仕合せよ。三國一ぢや。あみにあーたいあさかけしよ。ハヨカオイ。

中歌

○戀しくば尋ね御座れよ、川尻に。打ち見ればむかし人かやなつかしや。姿こそ島の蛭子に似たるとも、心は花の都なり。

○思ふとも心に出すな山櫻、思はぬ振りして末まで屆け。

○鈴蟲が秋の稻葉に巢を込めて穀物枕に月日を送る。

○常にはめさすとも、この御酒は一つは引き受け〳〵て、上れよ旦那樣。サーヨイヤサー。

○賤が身は茲に、戀しくば尋ね來る、背美の子持はまだ沖に。サーヨイヤサー。

○沖より寄せて來る大背美樣は、川尻組に行く末までも祝ひをこめて。サーヨイヤサー。

○松竹千代とやら、サー千代とやら、松竹千代とやら、めぐる盃親仁樣。

積り歌

○年の始めの門の松、(合)年の始めの門の松、鶴は千年歳老いて、(合)鶴は千年歳老いて、(合)鶴は千年歳老いて、(合)年は老いても、わかの浦、(合)さゞれ岩間の松影に新網代によせ來る大背美樣は、川尻組よの。父父母母早う〳〵朝かけ取ろぞよ、重ねてかけせうよ。川尻にさゞれ岩間の松影に、大神山によせ來る大背美樣も川尻組よな。父父母母早う朝かけ取らうよー。大漁族けよ川尻に。三國一ぢや綱にぞ年も仕合せよからうよ。ハヨカオイ。

○三國一ぢや綱にかけとらうよ。出かした、出かした。あすは出來さうよ、サー大きな大背美を、大背美を。大背美は川尻組、子持ちも川尻組に注進な注進な。川尻の旦那樣へよりかゝる、褒美んな〳〵親仁の樣の刃刺榮によりかゝる。ハヨカオイ。

(大津郡)

徳島縣

船乘初歌（正月二日）

○ヨイサマカセチヨイトマカセ、あららぎ山の楠を、船に造りて今朝おろし、柱くろがねけたこがね、帆は錦の卷物よ。手繩み繩は琴の絲、ともに大黒へに蛭子、中に十二の船玉よ。艫のらんかに松植ゑて、松の嵐を帆に受けて、思ふ港に入りにけれ。ヤツチヤ〳〵ボーヤツチヤ、マチニトツビヨルショーカク、とんほはねをきつたら、とんがらし。（海部郡）

ほめら（一名春駒）

是は舊藩時代に乞丐の徒、米錢を乞ふ爲め、毎正月各戸に就き謠ひたるものにて、今尙民間に行はる。

○アーラエー。春の始に春駒參る。館見かけて乘り來る駒子。駒が勇めば館は繁昌、猶又御館御繁昌なさる。お館さまには正月御ざれば、かどに門松、脊戸には脊戸松、雄松雌松車を揃へて、御飾りなさる。おふてのかゝりを概略賞める。周圍はねり塀、四方白壁、三階楢は八つ棟造り、數多の御門は欅の玉木理、三間扉は開きの御門。御門の内には、つく棒、さす股、雄棒、雌棒、六尺棒まで御飾りなさる。御殿の搆へも概略まづさば、唐で名木、朱檀に黑檀、眞木の柱に打ち込む釘、一に太子か、二に天神よ、三に三社に、四所大權現、五社には無事とかけたる鉋は、昔にとりては飛驒の匠か武田が番匠。是等が建てたる館の事なら、如何なる惡魔も怖れをなさる。女關の方には弓矢を始め、鎗長刀は申すに及ばず、大砲小銃も筒先揃へて、御飾りなさる。八疊の廣間に三方ずゑ。三方の中の祝ひの物は、榧や乾栗、伊勢海老、橙、ほんだわらに、精の米まで、脚高三方に、どんどと積ます。次の廣間の惠方の棚にや、七五三の長注連かせ、掛の魚には大鰤小鰤や、大鯛小鯛、雉子鴨雁鶴鶏の鳥まで、飛び立つ如くに、羽を揃へて御供へなさる。御表座敷の大廣間には、疊の表は備後の兩面、綾で緣とり、錦で緣とり、金襴緞子の褥を敷かせ、且那樣奥樣御見さま方まで、車坐なされて、御揃ひなさる。御前すわりの御鏡餅は申すに及ばず、見事な御肴海山つくして、小山の如くに、お盛らせなされ、長柄の銚子にごとうの土器、ぐる〳〵廻し、皆樣揃うてにつこりほやりとお蛭子顔で、幾千代までもお祝ひなさる。これまで賞めたら御家は代々御富貴繁昌、治まる御代こそ目出度けれ。（徳島市）

やんれ節（一名ほめ）

○（枕）ハーイー榮えます住みよの春に、黃金花さくお館さまが、これが何ぞとおたづねあれば、私師匠にかゝりたでなし。そこな辻では一口おほえ、こゝな辻では二口おほえ、拾ひあつめしほめぢやによりて、絶句にかたこと假名まちがひは、かれはかれだけ、こらこちだけと、あなごの處はきすごにねがひ、さらばこれからちよつと、いひだこの、どぜう聞きわけほどこひねがふ。

（本文）（高野くづし）エー實にも其名も高きが峯の、高野くどきの其元きけば、加藤左衞門重氏公は國は九州筑前博多、あたり四か國領せし殿よ。氏をやしなふ慈悲心ふかく、さても御前のその奥方は、器量すぐれしねざめの前と、申す方にて發明なるが、あまた家中のあるその中で、川島賴母と名にきこえたる、それが妹に名はなでしこと、いふは國での美人の噂、いまだ是ぞと緣付きもせず、花のあでやか重氏樣が、いつか見そめてやかたへ迎へ、お伽ぎ寵愛こまやかなるを、ねざめ御前は心にかけず、殿のおめかけおかるゝ事は、いづれ大守にあるならひとて、つひにしつとの色さへなくて、くらす月日に建仁三とせ、ころは彌生の花うつくしく、御庭先なる春うらゝかに、家中呼びよせ花見の酒宴、ねざめ御前になでしこどのは、われはもの云ふ此花くらべ、殿はさゞめくあそびにつれて、ゑひもしだいに築山づたひ、そゞろあるきに時うつるまに、桃と櫻の二人の女性、常のごてんで双六あそび、いつかうつゝねむけがさして、盤にもたれて夢むすぶまに、殿はこゝへとお入りになりて、そばへ近づき何心なく、見れば身の毛もたつありさまは、さしも美麗の奥方妾、外面如菩薩内心如夜叉、たけにのび

たるその黒髪の、ふたりひとしく火炎をはいて、にらみあらそふ物すさまじさ。殿はながめてたゞばうぜんと、心こゝにもあらおそろしや。こゝに直ちに重氏公は、心悟りてはや發心の、道に心をかたむけ給ひ、實には榮花はさだまる者か。人のよはひも五十路にあれば、かゝる女の愛着心に、蛇の地ごくにおちもやせんと、厭離淨土を願はんことゝ、こゝに發心書置なして、さしもたつとき大守のお身を、うすきすがたのそのいでたちに、城をぬけいでさて行く空は、たづね紀の國影あらたなる、高野弘法大師の峯へ、夜半にまぎれて向はせたまふ。お心根こそ殊勝でござる。妾なでしこ我身の罪と、人のそしりを我身一つに、はぢてあはれや自害をなして、花のすがたを夕べにちらす。はかなかりけるしだいでござる。

ヤンレー。

○親方さまの、乾の隅の御寶藏へ、七福神がより集りて、黄金枕に御子歳、御目覺めたら早や元日で、最早二日ののりぞめなさる。明方の湊の寶の御舟、千兩箱のねあけをいたす。大八車や又四ツ車、先へひきくるこれ丑の歳、

金銀寶は皆寅の歳、金は世上へ貸附けまする、節季がきたら親方さんの、七十五人の庭番頭が、貸家先へと掛取りに行く。金は利足ではいさう致し、利足元金殘らずよりて、富貴繁昌と相成ることを、水の上にて、たとへたならば、飛ぶが如くや是れ卯の歳、親方さんの乾の隅は、並び〳〵て藏辰の歳、福德そのふる御巳の歳、門にりん〳〵轡の音する早や午の歳、内に聞きつけ大黒神が、馬の手綱にしつかとすがり、外へはやらじと未の歳、水難火難八九の難は御屋敷離れて皆申の歳、萬の寶は皆酉の歳、惡魔外道の申すよには、黄金花咲く此屋形に、我等如きは、すみかはならん。屋敷離れて皆戌の歳、殿の御威勢や七福神は末世末代御亥の歳。

○はや東雲の街道筋、木やり囃して地車の、轟く音ぞいさましや。和歌浦には名所がござる。一に權現、二に玉津島、三に下り松、四に鹽釜に、むざんなるか稚き者は、母の柳を都へ送る。元は熊野の柳の露に、育て上げたる其緣丸。柳や柳とちぎりたる、連理返りや揚枝村、夫婦坂とて今も猶、云ひ傳へたる物語り、うきを深山や三熊野の、柳の棟木はけに此因緣ぞしられけり。（那賀郡）

すつたらばう

陰暦正月物貰ひの男裸體にて歌ふ歌。

○すつたらばうが、くるときは、世の中ようて世がようて、お家が繁昌、村繁昌、あたまにかけたる、しめなはは、一五三かい、五五三かい、いとさんほんさんはうそはしかが、おかるいな〳〵。

（阿波郡）

お　福

陰暦正月物貰ひの女、お福の假面を被りて歌ふ歌。

○ヤレ奥さん御免なされ。西の宮のお福女郎でござります。とうに、ごねんとうに參りませうと思うたれど、福は方々門數で、やう〳〵今日、ごねんとうに、參りました。西宮のお恵比須さん大黒さん、さぞ、ごねんごろの、おことづけ。春は早々いぬゐの隅から、一分や小判がわいてくる。旦那さんには斗りこむ、奥さんにははきよせる、お子供衆の事なら、めつたやたらに、つかみこむ。ヤレ奥さん、此のおせはしのに、手取り足取りひけとり豆とり、おかもひなしてつかはるな。福はとなり、とち平、とんないさんところの、御馳走は、大石橋のれんがく、針金のにうめん、火吹竹のかばほこ、福のお腹もほゞりほつてり、ふくれてゐます。甘又ふくれた勢に、お庭ならしに一踊り、トコマカシテシワリトナ。麥よし、米よし、みののりよし、今年は明けての福の年。ホー〳〵。

（阿波郡）

田植歌

○朝咲く花は朝がほの、昼さく花はひぐるまの、晩にさくのは雪のした。

○三井寺の夜明のかねに出たれども、これへ來るまに暮のかね。

○お舘へくる道すぢのじるたんぼ、すべつてこけて又起きて、とんぼからげて來たわいな。

○此ごろ地獄に博徒が徘徊、一から六まで五ぬけとはつたら、因果と五がでゝ、けさも衣も、獨鈷鎖杖、水晶

の珠數から、鐵鉢迄も皆とられ、可愛い地藏さん丸裸。

此歌は草取、稻刈、臼搗、米蹈、茶搗、茶もみ、絲繰、絲引、絲績、麥搗、籾摺、麥打、地搗等にも用ふ。

（那賀郡）

○奥山の庄屋のかみさん、たてれば、ほん〳〵、すわれば、ほん〳〵、さつても、ようなる、おかみさん。（板野郡）

○お心やすいは常のこと、おあがりなされよ、たかだなへ。

○京極内匠は戀故に、可愛やお菊は返り討。

○殿御がなにやらさゝやいた。つほねに入るなとさゝやいた。

○奥山の草刈り子供よ。栗の花が咲いたか。咲いたとも〳〵、九つ小枝に皆咲いた。

○奥さん杓子はどこにある。うーらのはしりの棚にある。

○さゝげ山のしづくで、傘十六流いた。（阿波郡）

○栗の木の一の枝に、猿が腰を休めた。

○お上りなされよ、高棚へ。お心安いは常のこと。

○隣で粉喰うて茶飲んで、重箱枕で休んだは。（麻植郡）

○奥山の栗の木に、栗の花が、よう咲いた。咲いたとも〳〵、九つ小枝に、みな咲いた。

○奥山の草かりよ。栗のとーがさいたかなう。さいたいなう、ぼつくらぼつたと、さいたとなう。（美馬郡）

麥打歌

○阿波で一番（附）「エーイエー、」名を揚げたのが、（附）「ヨイナーヨイナー、」五百羅漢に川田の一本、矢上の楠、新居の百貫手印、苦が島。（附）「ションガエー。」（那賀郡）

麥搗歌

○み山の奥の、その奥のきんだん鳥といふとりは、はがへは雪にたゝまれて、あしは氷につめられて、この雪氷とけるなら、おとのゝそばへはなしどり。ヤットサノサ。

（勝浦郡）

○父桔梗、母芍藥に姉牡丹、妹菊、賤雞頭。

○あんなきれいな、姫さんが、うちらのあたりにあるなれば、（合唱）「ヨーヨーヨイトナ、」繪かきやとうて繪にかいて、肌の守りと、するわいな。（合唱）「ヨーヨーヨイトナ。」

（那賀郡）

○月にむらくも花に風、ヨーイヤヨイナ、おじやまになるかはしらねども、すこしおさまのおてやーすーけ、ヨーイヤ、おてやーすーけ。（海部郡）

おすがた節

○アーもんでちらりとーうめのはなー、アヨイヨイ、おはいりなされといふの花、あとはおへんじなしのはーな、ヤットサノサ。

○さまさんよ、くわんすは、りん〳〵りんきする、ちやびしやくちやかごは、ちわをする、下でわりきが、みをもやす。

○ごしやめんなされ頬冠、取らぬは不禮か知らねども、坊主あたまに露がうく。

○一番そーや、二番そーや、三番そーで來た故に、屋形は繁昌と踏みまする。

○深山の奥の其奥の、まだ其奥の岩つゝじ、芽を出し、葉を出し、蕾だし、何をたよりに咲く花ぞ。（勝浦郡）

○朝顔やー、（合唱）「ハヨーヨーナ、」雲はしほれて夜はーまた、ハヨイ、露をふくんで色にでる。（合唱）「ハーヤットサノサ。」

○お姿吉野の（合唱）「ハーヨイヨイナ、」絲櫻一枝折らうと思へども、ハーヨイヨイナ、殿の物なら折られまい、（合唱）「あれさうぢや折られまい。」

○イエー、さらぐわんーす（新鑵子）君に濃い茶と思へどーも、（合唱）「ヨーヨーナ、」憎くや、かなけが、邪魔をーすーる、ヤットサノサ。（合唱）「邪魔をーすーる。ヤットサノサ。」

○イエー、殿さんーの、お壁閉くより走り出ーで、亂れた髪に氣も付かーず、（合唱）「ヨーヨーナ、」殿のお出での、

ごあいさーつ、ヤットサノサ。（合唱）「ごあいさつ。ヤットサノサ。」

○イエー、はじめて、おいでた殿様ーに襷も外さず、手も下けず。（合唱）「ヨーヨーナ、」そこの所は、御量見、ヤットサノサ、（合唱）「ごりやうけん。ヤットサノサ。」

○イエー、お姫（お殿或はお様）は表の床のはーな、私は小溝の燕子花、（合唱）「ヨーヨーナ、」おそば恐れて下り藤、ヤットサノサ。（合唱）「下りーふーぢ。ヤットサノサ。」

○あさーがーほーのー、アヨイ、はなのつほみのー、ふでーさーきーに、アヨーノ〳〵ナ、つるがまるらせー候とーなーり、アヨイ、ひとめのーかきにしのーびーざーき、エーしのびーざーき、しのーびーざーき。

○あーおせすんがりーと、たかはしーのー、（合唱）「コラセ、」下行水が、しづなれーば、（合唱）「アーようでたな、」もつれつきたいー、かづーらーばし。

○おやーかーたー、うちは、あさひーで、でたーれーどーもー、みちのくー、尋ねー、はるばーると、たづーね來たぞーよ、えんしうーや。

○おいたはしいや照若君、侍從じじゆうたよりに力草、たづね、きしの、松下へ。

○門にちらりと、こもそうが、あの吹く笛のよさわいな、むねにやきばん彌五郎さん。

○つく〳〵〳〵走りつく。走りついたら、すがりつく。さまでないぞよ、だいがらのさを。ヤットサノサ。

○夜前もやかたへ來て見れば、だいがらつまえて猫の糞、曉は門から犬の糞。ヤットサノサ。

○私の樣なふくとさへ、嫁に吳れいとほーほから、私しや何處へもいかなじの魚。

○おすがたをー、ちらりと、ヨイナーー、みたに（地名）から、つのむーねー（山名）、ヨイナ、やまへとー願をーこめ、ソラヨイ〳〵ナ、なぬかななよーさかけあーんど。

○エーどなたさんもーおうたひなーされ、ハラヨイ〳〵ナ、どんなわーたーしがーつけーまーすーる。

○紺のエー前垂、どつこいな、松葉のちらし、ヨイ〳〵ナ、待つにこんとは氣にかゝる。ヨーハラヨイ〳〵ナ。

○わが戀はー住吉浦の、ドツコイナ、夕景色、ヨイ〳〵ナ、

只青々と松ばかり。ハリヤヨイ〳〵ナ。

○石山にかけし霞は吹きはれて、向う遙にみかさ山。

○君さんむかうの百足山、しづは唐崎一ッ松、あひの湖へだてられ、いまだ粟津がじつつらい。

○せたのから橋中ほどで、田原藤太秀郷が、むかでうたんと弓を引く。

○始めてあうた君樣に、なにから唐崎さきで申さうやら、胸は矢走やばせの舟の數。

○山中通れば鶯の、梅の小枝に晝寢して、花のちるのを夢にみて。

○お樣の召したる著物は、大阪染か京染か、白にほつ〳〵梅の花。

○おすがた吉野の絲櫻、一枝欲しく思へども、人の花なら折られまい。

○竹になりたい五三竹、外に望みはなけれども、お樣文書く筆の軸。

○お屋敷の御庭に咲いたる金銀草、一と年お花が五色咲く。春咲けや赤し、夏白し、秋紫で冬うこん、末に金の花が咲く。

○あなたは向へのなぎの花、私は手まへのあやめ花、及びないのが谷越し櫻。

○君に別れて夫れからは、袖は涙にしよんぼりと、乾く隙なき沖の石。

○そなたの御聲は、義經の初音の鼓打つ如く、曉忠信で無けれども、音に聞えて飛んで來た。

○頃は五月の末つ頃、晴るゝ隙なく降る雨に、水嵩增る川々や、私の胸は解けやらで、思ひ斗りが增さりけり。

○樣さんが御歌上手と聞いた故、矢走の船に帆を卷いて、歌の文句を積みに來た。

おすがた節は田植、麥打、草取、籾摺、米踏等にも歌はる。

（那賀郡）

○お姿見るよりー走りーでーてー、妻菊さんかよ懐しーや。よう出たな。言うてお側へ萎れー菊。ヤットサノサ。

（板野郡）

○朝咲く花は、朝顔の、晝咲く花は、ひぐるまの、お日が、傾けやー、桔梗の花。

○かうーとしよりーては、(附)「ドッコイナー、」かれーくさーのーはなさくー、(附)「ヨイトナー、」みーでーはーなけれーどーもー、(附)「ハラヨーイヨーイナー、」おさまーお御歌うーたをー、聞きにーきーたー、(附)「ヤットソーヂャー、」聞きにーきーたー。

○おさまは、風よし、しよてんよし、ならびに御歌の文句よし。どこに非難が入れられうか。

（那賀郡）

盆神踊歌

此歌は古より上八萬村、佐那河内村、國府村大字和田村の特有にして、歌の由來等明かならず。又文句にある言葉に意義の不明なる者いと多し。盆に村人等あまた社地に參り、一大圓形を作り其圓の中央に二人乃至四人の太鼓打を置き、トントントントンと太鼓の拍子に四圍の者聲高々と謠ひ、且つ踊りつゝ、左へ〳〵圓周上を進む。踊手は皆團扇を持つ例なり。また干魃の時は雨乞として同じく此踊をなす。太鼓に三つ拍子とか八つ拍子とか或は十六拍子とあるは、其の打ち方なり。

入　葉

○をどりが參る。どちから參る。伊勢から參る。四十五の寶、頂きつれて、打出の小槌手に持ち連れて、御神踊りは一踊り〳〵。

孫　八

○イヤ上から下る、イヤ孫八彌十郎、イヤ京からをこけ、イヤ堺からかけご、イヤ十七八をうめとのをこけ、イヤさかすとほそれ、イヤうまずとたまれ。イヤをこけに入れて、イヤかけごでしめて、イヤあの淀河へ、イヤ流された。彌十郎イヤあかねの帶で、イヤ太刀やふりさいて、イヤ駿河の町をねりや廻る彌十郎。

御神踊（三ッ拍子）

○今日今宵の晝踊り、一ッは御神御奉公、イヤ今日今宵の此中で、不淨穢れがあるとても、イヤ今日今宵は許され〳〵。

御屋敷（同上）

○イヤこなたの屋敷はよい屋敷、イヤ東表に藏七つ、イヤ南表に藏七つ、イヤ中なる藏には大黑が、イヤ打出の小槌を手に持ちて、イヤ百姓揃へて御酒盛り〳〵、イヤ前のえ河を見てあれば、イヤ花の筏が流れ來て、イヤあれをこなたへかいこんで、イヤ殿になれ〳〵旅のとの。イヤ黃金臼の八ッから建てゝ、イヤ白がね槌を百拵へて、イヤ九十九人の米搗く中の女郎たちは、イヤ、どれが眼につく旅のとの〳〵。イヤかちん前垂八重襷、生絹の帷子眼についた〳〵。イヤあれをおれらにたもるなり、お手にや取らずと身にや著ずと、イヤこなたの屋敷へ年三年〳〵。

○イヤ此御池の蓮池に、鶴と龜とが晝寢して、イヤあひで千鳥がしく踊り〳〵。

御屋形（同上）

○イヤ御屋形樣の御屋敷、拜み申してあら美事。御椽の柱と六十六本ぬり隱し、塗り落したる木端に、金をのまして空は檜の、おのしふき〳〵、イヤ駄斗ぶきの〳〵、八ッ棟作りの空見れば、東格子や西格子、丹波の御簾おかけあるた〳〵、イヤ表の掛りを見てあれば、手桶鑵子は白銀よ、茶筅茶びしやく皆黃金〳〵。イヤ扨次ぎの間を見てあれば、長持道具に槍千本、たちしやくぶりとは打見えた〳〵。イヤ扨廳部屋を見てあれば、白う黑うの、はいたかは、先ははやぶさあら美事〳〵。

○イヤ辨慶が〳〵指したる太刀はあら美事、とんぼー返しの水車、水の上なる浪かくし、遂には辨慶かなれず〳〵。

○イヤ讃岐左近殿召す船は、船は唐金帆は錦、柱は白銀せみ黃金〳〵。

千　松

○イヤ己が弟の千松は、まだ十五にはならねども、小口を

いちぢとおたしなむ〳〵。ィヤ先一番に刀を召すが、刀はなにと好ませた。三尺七寸鎌倉よ。大のしのぎに、三尺さけをと好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎにお弓を召すが、お矢は何と好ませた。重籐作りの御弓に、稲妻のうつほと好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎに具足を召すが、具足は何と好ませた。上七段は唐金よ、下六段は板がねよ、合してふた色十三ほら〳〵と好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎに兜を召すが、兜は何と好ませた。八方白銀お兜に、唐のしやぐまと好ませた〳〵。ィヤ扨其次ぎにお馬を召すが、お馬は何と好ませた。關東名馬に虎月毛、金ぶくりんの鞍を置き、めうちん轡に綾の手綱をよりかけて、先は美事や、あら美事。

燕（十六拍子）

○ィヤ燕が〳〵勢田の唐橋から金ぎほしに巣をかけて、かひ子をまうけておさいづる〳〵。ィヤ其を大蛇が聞き附けて、横の柱をきり〳〵と巻きのぼる〳〵。ィヤそこで燕が云ふ事にや、大蛇は子をば育てぬか〳〵。ィヤそこで大蛇が聞き分けて、横の柱をきり〳〵巻き下る。ィヤそこで燕よろこんで、末繁昌におめでたかれ、世の中よかれとおさへづる〳〵。

御門

○ィヤこなたへ參りて、御かどの掛りを見てあれば、黄金の蔦が生えかゝる〳〵。ィヤこなたへ參りて、朝日の掛りを見てあれば、錢倉金藏あら見事〳〵。ィヤこなたへ參りて、屋形の掛りを見てあれば、八つ棟作りの檜皮ぶき〳〵、是も都に劣るまい〳〵。ィヤこなたへ參りて、廣間のかゝりを見てあれば、槍長刀は數知れず、虎毛のおつほか千五百、ィヤ虎毛のおつほが千五百。ィヤこなたへ參りて、厩の掛りを見てあれば、七軒厩に七匹たて、七人番所がかみを卷く〳〵。

御寶

○ィヤ上から御りう車が三つ下る。先の車に何を積んだ。蛭子大黒積みや下した〳〵。ィヤ中の車に何を積んだ。お伊勢の寶を積みや下した〳〵。ィヤ後なる車に何を積んだ。諸國の寶を積みや下した〳〵。ィヤ三つの寶をおし合せ、こなたのお庭へ積みや納めた〳〵。

大黒（同上）

○ィヤ乾の角なる福えの木、本は白がね中こがね、枝にはお錢がなりさがる〳〵。ィヤ枝にお金がなるならば、米でついぢをつきまゐらせ、米でついぢをつきまゐらせ。ィヤ米でついぢをおつきやらば、錢で踏む道築きまゐらせ。ィヤ錢で踏む道おつきやらば、太刀でもがりを結びまゐらせ。太刀でもがりを結びまゐらせ。ィヤ太刀でもがりを結びあらば、秋の鹿ではござらねど、ついの小袖をぬぎかけて、尻を廻して殿とせよ、尻を廻して殿とせよ。（名東郡）

盆踊歌

○剃刀片手に、床の門で、あはしてくだされ、床屋さん。あはしてあげるは易すけれど、もしやきれたら御氣の毒。

徳島縣　盆踊歌

○白鷺が小首かたいて、ヨイソラ、二の足ふーんで、ホーラ、エライヤツチヤ、エライヤツチヤ、痩せはせぬかえ水かゞみ。ホーラ、ウントサノサツサ。

○種蒔かぬ、岩に松さへ、ヨイソラ、はえるでなーいか。ホーラ、エライヤツチヤ、エライヤツチヤ、添ふに添はれぬ事はない。ホーラ、ウントサノサツサ。（那賀郡）

○出たことは出たが、むぎのくろほで、でたばかり。

○御しやめんなされ、私やひよこのとやだちぢや。

○たがよしはらの、露にぬれてはしのばれぬ。

○でた事はでたが、聲がをさのて屆きやせぬ。（海部郡）

○笹山通れば笹ばかし、猪豆喰うてほーい〳〵。

○踊るあはうに見るあはう、同じあほなら踊らなそんぢや。（麻植郡）

大臣踊

○ヨー昔大臣小臣殿、ヨー鬼界が島に放されて、ヨー此島を見てやればー、人間のー住まず島ではおんないがー、

誰はの人が教へある、ヤーたれはの人が教へある。（勝浦郡）

○むかし大じん五りん殿、四海が島へながされて、こーの島は人間の住むべき島でおんないが、たればの島でおそれある。大じん踊は一踊り〳〵。

○われをば誰とか思ふらん〳〵。われこそ昔のゆり若大じんよ。さらば船をもよほせて、ろをとりかぢを押し直す。大じん踊は一踊り〳〵。

○こーのほーどのをみとり丸の高よりも、西ふく風がありがたい。大じん踊は一踊り〳〵。

○王あがはしへ早着いた〳〵。王あが橋やうを見てあれば、れんほ風がいせいする。大じん踊りは一踊り〳〵。（那賀郡）

鶴上踊

○備前の國の、絲屋が子息の二番目は、鶴上殿とて鳥さす折のいで立ちは、腰に金箔茜木綿に茶の小袖、都ではやるゆあみ笠、ひちく小竿で鳥をさす。（勝浦郡）

大黒踊

○今年のお稻の、はえの丶よさは〳〵、からが五尺に、穗が二尺、先大黒と祝はれた〳〵。大黒踊はひと踊り、ヤひとをどり。ヨーハツサ、サーサーサー、トントコトン〳〵〳〵、トントコ〳〵〳〵〳〵トン。

○此大黒は有德なり〳〵。扇硯を手に持ちて、にほんの寶をかきや集める〳〵。此屋敷はよい屋敷〳〵、四方四面に藏たて丶、藏のまはりに松植ゑて、松の小枝に黃金花〳〵。此おせどの福よの木〳〵、よのみならいで錢や金やがなりやさがる〳〵。此おせどの蓮池に〳〵、鶴と龜とが晝寢して、龜を枕に、よれまくら〳〵。（那賀郡）

住吉踊

○住吉の松の葉越しに月見れば、しばし曇りて又さいた。

○住吉の松の葉越しに沖見れば、お船寶を積むと見た。

○住吉の四社の前なるそり橋は、誰がかけたよ、中ぞりに。

○誰というたが、誰がかけうた、おれがかけたに、中ぞりにや。

○住吉の松の葉にさへ書く文は、殿にさられて手が下る。（那賀郡）

金高踊

○これより東の大和の國なる金高長者に子がなうて、峯の藥師に申しこみ、子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り、まうし子踊は一踊り。

○そーれでまーんだかなはずば、〳〵、寶珠作りのお腰ものを、千腰ばかり大内の寶に持たせ、峯の藥師のそりはしに、かけて參りませう。南無藥師。子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り〳〵。

○それでまーんだかなはずば、〳〵、厚さ四寸の板金を千枚ばかり大内の寶に持たせ、峯の藥師の上ふきに葺いてまゐらせう。南無藥師。子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り〳〵。

○それでまーんだかなはずば、〳〵、白目の鏡を千枚ばかり、大内の寶に持ちたれば、峯の藥師の釣鐘に、釣りてまゐらせう。南無藥師。子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り〳〵。

○それでまーんだかなはずは、竹のかもじを千さけばかり、大内の寶にもちたれば、峯の藥師の鐘の緒に、さけてまゐらせう。南無藥師。子種を一人お下され。まうし子踊は一踊り〳〵。

○その時藥師がおどろいて、黃金の棒を千本ばかり、黃金の足駄を千ぞくばかり。つけかへはきかへたづぬれど、長者にさづかる子種なし〳〵。（那賀郡）

長者踊

○大和の國の金高長者に子が無うて、峯の藥師に願こめて、こめて參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしも踊りは一踊り。

○厚さ四寸の板金を、千枚ばかりもーちの（後の意）寶に持ちたれど、峯の藥師うはふきに、ふいて參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしも踊りは一踊り。

○それでも、まーんだ、かなはねば〳〵、をーりよー造りの御腰物の千腰ばかり、もーちの寶に持ちたれど、峯の藥師の、それ橋とかけて參らせう。南無藥師。子種を一

人御下され。もーしも踊りは一踊り。
○それでもまーんだ、かなはねば、唐の鏡を千枚ばかり、もーちの寶に持ちたれど、峯の藥師の釣鐘に、かけて、參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしの踊りは一踊り。
○それでも、まーんだかなはねば、竹のかもじを、千さけばかり、もーちの寶に持ちたれど、峯の藥師の鐘の緒に、かけて參らせう。南無藥師。子種を一人御下され。もーしの踊りは一踊り。
○そこで藥師が驚いて、黄金の棒を千本ばかり、黄金のふくりを千さけ許り、ふきかへ、はきかへ、たづぬれど、長者に授かる子種なし。もーしの踊りは是れ迄ぞ。

（那賀郡）

姫子踊

○姫子に貰うた、手拭は〳〵、どこでおとしたで、やれをしや〳〵、姫子の踊りは面白や。
○若しも誰じが拾たれば、召した御馬に代へませう〳〵。
姫子の踊りは面白や。

○召した御馬がいやなれば、あぶみかぶとに代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。
○あぶみかぶとがいやならば、具足のかぶとに代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。
○具足かぶとがいやなれば、差いた刀に代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。
○差いた刀がいやなれば、めーした御首に代へませう〳〵。姫子の踊りは面白や。
○召した御首がいやなれば、肌の守りに代へませう〳〵。姫子の踊りは是れまでぞ。

（那賀郡）

鎌倉踊

○鎌倉のふたご山で、小鳥籠をわすれた。九つ黄金小倉より、小鳥籠がをーしゆさよ。
○そことほるは七きむしや殿よ。あれこそこれのむこ殿よ。むこなれば人目打物松山こされた。
○あかしやくまにとらけ打物、あれこそおれのむこ殿よ。
鎌倉踊は一踊り〳〵。

○鎌倉の孫が方より細布えてきた。是爰で染めてたもれよ。はりまのしよしやの、こうかけ、書寫坂本のかうかけ。かまくら踊りは一踊り。

（那賀郡）

鼓踊

○花の十九のいでだちは、あかね木綿茶の小袖、それまたまよはん人はない。つゞみ、つゞみ踊は一踊り。
○いとし殿御が來る道は、黄金とうろを八つさけて、それの光で來るがよい。つゞみ、〳〵踊は一踊り。
○にくい殿御がくる道は、猿が酒もりするがよい。それにみとれてこんがよい。つゞみ、〳〵踊は一踊り。
○いとし殿御が帶くけは、ぢんや麝香をくけまぜて、腰のまはりは花々と。つゞみ、〳〵踊は一踊り。
○にくい殿御の帶くけば、いばらかいばらくけまぜて、腰のまはりはいざいざと。つゞみ、〳〵踊は一踊り。
○いとし殿御の水くめば、桶も金桶金びしやく、清水しみづの上水を。つゞみ、〳〵踊は一踊り。
○憎い殿御の水くまば、桶も破桶われびしやく、清水しみづの底水を。つゞみ、〳〵踊は一踊り。

（那賀郡）

神踊

○墨すりて、ながるゝ水に繪をかく殿は、いやよの、二道かくる殿は、アイヤ〳〵、ストトントン。
○淀川に綱なき船をつなぐ殿は、いやよの、二道かくる殿は、アイヤ〳〵、ストトントン。

（那賀郡）

烏帽子踊

○大坂若しゆにたふされた、もがりが空へたふされた〳〵。
○左をりか右折りか、冷泉折りかとりせいか、左折りをめす人は、するがの國のさがの守〳〵。
○さがの守もゑほすまい、賴朝殿こそめさうずれ、牛若殿こそめさうずる〳〵。
○牛若殿がめすあれば、くらまのお寺へござるべし。烏帽子あらため有るなれば、しゆりやにおいておかるべし。
○歌はかず〳〵多けれど、烏帽子踊りはこれ迄よ〳〵。

（那賀郡）

高麗踊

○太閤樣は人間人と申せども、諸國を照らすお日樣や。
○諸國の城へ呼びよせて、扨諸國木物を切りよせて、舟に作りてかうらいへ、さて其船をおし出して、海河原におつきある。（那賀郡）

牛若踊

○牛若殿のお馬のかゝりを見てあれば、奥州育ちの虎月毛、天黑小黑のお召しがへ〳〵。
○牛若殿の軍の懸りを見てあれば、兵庫前なるすゞかもが、浪を蹴上ける如くなり〳〵。
○牛若殿の寺入りは日本で一番鞍馬山、晝はお寺で學問なされ、夜は見かけのお太刀打。（那賀郡）

屋形踊

○屋形參りて、おていの懸りをみてあれば、白木の弓が千五百、まなごのおづなが千五百、おがい合せば數しらず〳〵。屋形踊りは一踊り。アイヤ〳〵、トントン〳〵。

○清水の小女郎が布を晒す、絹帶たすきかいやかけて、しほる手元にかいやほれてよ〳〵。屋形をどりは一踊り。アイヤ〳〵、トントン〳〵。（那賀郡）

若殿踊

○若殿さまへせしふがまゐり、一國參り、二國參り、拾三國が皆まゐり。
○若殿樣の御門、入りかはり參りて見れば、白銀柱ゆかや立揃へ、上ふき迄も黃金なる〳〵。
○若殿樣のお庭、入りかはり參りて見れば、金のいさごが足につく〳〵。
○若殿樣の馬や、入りかはり參りて見れば、七けん馬屋に名馬をたて、清書の絲で髮をゆひそろへ、錦の手綱に金入轡、とち金迄も黃金なる〳〵。
○若殿樣のおてい、入りかはり參りて見れば、白柄の鎗が千ほあり〳〵。
○若殿樣の奥のま、かはりて見れば、から忍の屏風ゆかや立てそろへ、まばりを見ればすだれ〳〵。（那賀郡）

殿御踊

○山ちかければなし、ヤーもみぢ花で、ヒヨ花をお肴で、あつも一つきこしゆめせ、こーの酒。
○ヤーぬまづが宿よな、ヤーせまい宿で、ヒヨひさけをかるにな、ヤーヤーかりかねて、あたる花むこに〳〵、あのひしやくで、夕をなあのとほらしゆふ。
○ヤーわごれうも十九よな。ヤーおれも十九。ヒヨはく絲よな〳〵あのながのさきで、あのたつべしゆふ。（那賀郡）

早川

○早川に金わをする忍て火を焚くとも、いやよ、ふた道かける殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。
○墨すそながれし川に繪はかくとも、いやよ、ふた道かける殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。
○雲あてはなれし馬をつなぐとも、いやよ、ふた道かける。殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。
○淀川に綱なし船はつなぐとも、いやよ、ふた道かける殿は、いや〳〵、ツトトントト、殿はいや〳〵。（那賀郡）

川水踊

○川水川柳うちとけ〳〵と、さあかされかさるよは只思ひ事あらん。サーサ、そもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。
○絲櫻に絲柳うちとけ〳〵と、さあがざれかさるよは思ひ事あらん。サーサ、そもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。
○うき人の髮のわけめがうちとけ〳〵と、サーサ、さてもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。
○うき人の腰の帶めが打ちとけ〳〵と、サーサ、さてもつれなの君樣よ。いやなら初めいやとはおしやらで、今さら何となるべし。（那賀郡）

お庭踊

○ヤーさーておにはを見てあれば、黃金小草が足をかーり

まく〳〵。

○ヤーさーて馬屋を見てあれば、ヤーつなぎならべし名馬七きん。駒の毛色を見るなれば、ヤー一に栗毛よ、二に、はあし、三に黒鹿毛、よる月かけ。

○ヤーさーて表を見てあれば、ヤー黄金つくり太刀が七ふり。

○ヤー太刀のめいじをよむならば、せきにせりよふせよかさに、やよぎ〳〵、ヤーやよぎ〳〵。

○ヤーこれのおせどを見てあれば、鳥もかよはぬ瀧の切岸〳〵。

○ヤー門のやぐらで沖みれば、青や小草がこれのごせりやうや。ヤー〳〵。

（那賀郡）

具足踊

○これの御子息虎松は、都そだちか、國侍か。まづ上方へ太刀打ちに、太刀をば何とこのませた。三尺さけをに虎皮まいて、親のしすけをさゝせた〳〵。

○兜はなんとこのませた。三枚しころに、四方しまだれふきかへす、大小鍬形おとした〳〵。

○具足は何とこのませた〳〵。上七だんはからくれなゐ、下六だんは紫よ。あやのはすゑで、十三ところおとした〳〵。

○鎗をば何とこのませた〳〵。もとは白銀中黄金、末は黄金のたすまきひすまき。

○馬をば何とこのませた。馬はぜんぜんあし毛に、しのぶ七くに、明六さいとこのんだ〳〵。

○鞍をば何とこのませた。鞍は白銀、鐙黄金ぶさ、しりがへはから絲、さておん供のせい數は、八百八十四りんせきと見えたり。殘る五百はくれしよふ、先三百はつれもせう〳〵。

（那賀郡）

船の踊

○船をつくりて面白や。白銀の帆柱に金でほこそまいたれ。船の踊はおもしろや〳〵。

○船を飾りて面白や。綾の幕を柱かじ、錦で帆こそまいたれ〳〵。

○ひはとこがらど鶯と、船のへさきにすあかけて、黄金よろこびさかえて、巣をばくてさへづる〳〵。

○船も繁昌、ところも繁昌、こなたに倉を立てめさる。船の踊りは面白や〳〵。

（那賀郡）

讃岐節

○あー丸くなれ丸くなれ、一寸丸くなれ、コラセ十五夜のあの月のやうに。（囃子）ヨーホイヨーホイヨイヤナ。

○あーかくになれ、かくになれ、一寸かくになれ、コラセ一升桝のあの底のやうに。（囃子）ヨーホイヨーホイヨイヤナ。

（阿波郡）

まかしよ節

○京屋のおすみと名も高い、さほどのきりやうでなけれども。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。手足の指の先までも、ゐりをのべたる如くなり。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。

小野の小町や、れいせいのおすみの心にやをかしうて、ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。なびく心は更になく、北堀町のだいこくや。ハーヨーイヨーイヨーイヤナ。（阿波郡）

金比羅道中記

――讃岐の地名　（）踊の囃し。

○イザヤ讃州金比羅へ、行くも返るも逢阪の、花の坂本見渡せば、（姿も揃ふ菅の笠、）勇む伊關や馬宿の、二寶三寶荒神の、（乘つたか〳〵はいどーぐ〳〵）休みなんせと云ふ下女が、袖は引田の町すぎて、弦に中山ごんべさん（脚氣がなほる參らんせ。）眼は白ろ〴〵と白鳥の、道の巷に胴取りに、（はつたか、はらんせ、ちよほいちを。）三本松かへ色かへぬ、君を待田や早たづら、音に聞いたるお梅茶屋、（お客驚きてとまる。）當る富田や石田村、……

……と云ふ下女は、長い長尾の觀世音（佛の顔も二世三世）深き願ひのふかみ草、つひに道草藤堂の、（十三塚や平岡や）弦は佛の生る、山とかや。數々たきの御寶物、寵釋迦の本尊拜まんせ。（なる程〳〵合點ぢや。）アレ〳〵〳〵、向うは八栗八嶋潟、其名も高き五劍山、（讃岐で富士とは飯の山）末はとうゞ〳〵瀧の宮、鈴の綱手もあらう